

ふるさと

矢部裕教授退職記念号



慶應義塾大学整形外科同窓会誌





ふりかへ

1998

慶應義塾大学整形外科同窓会誌



目次

・ごあいさつ	菅野卓郎	(27)	5
・あゆみ	矢部裕	(36)	7
・特集 矢部裕教授ご退職に寄せて			
矢部教授、誠に御苦労様でした	大内正夫	(12)	25
矢部教授、ご苦労様でした	泉田重雄	(23)	25
矢部裕教授ご退職にあたって贈る言葉	菅野卓郎	(27)	27
矢部君との思い出	榊田喜三郎	(31特)	29
共に過した日々	藤野豊美	(36)	31
矢部裕先生と手の外科	池田彬	(38)	32
矢部先生の新聞記者的センス	内西兼一郎	(39特)	34
矢部教授の退任に際して	芝田仁	(39)	36
恩師矢部先生	福田宏	(40)	38
tension-reducing positionと矢部教授	吉沢英造	(41)	40
	石井良章	(41)	42
	富士川恭輔	(43)	44
	鶴田征夫	(44)	46

矢部教授の御退官にあたって	鈴木信正(48)	49
矢部教授と名古屋保健衛生大学と私	高橋正憲(48)	50
(続)「これエ本にしようよウ」	片田重彦(51)	54
15年前の矢部教授のお姿	松林経世(53)	56
矢部先生と私	斉藤聖二(54)	57
矢部裕教授と大学院の思い出	中村俊康(67)	59
・ふるさとに寄せて		
近況	富田恭弘(37)	63
みやらくもん物語	鳴河みどり(43特)	63
	岡田菊三(46)	67
	家田浩夫(49)	69
	蜂須賀研二(54)	71
私の心の旅		
近況 産業医科大学リハビリテーション医学教室		
・関連病院の現況		
けいゆう病院	木内準之助(48)	73
伊勢原協同病院	高畑武司(56)	74
北里研究所病院	阿部均(57特)	76
練馬総合病院	飛弾進(59)	78
聖母病院	星野達(61)	80

・留学便り

リーズより

こんなデンマークに誰がした

須田健 (64)

関敦文 (65)

岩本潤仁 (69)

89 86 84 82

・教室便り

・教室幹事を仰せつかって

高山真一郎 (57)

91

・診療部門の現況

脊椎脊髄

藤村祥一 (47)

93

スポーツクリニック

竹田毅 (47)

94

足の外科

井口傑久 (49)

98

肩関節

小川清久 (50)

100

手の外科

堀内行雄 (52)

102

腫瘍

矢部啓夫 (53)

104

膝関節

松本秀男 (57)

106

小児・股関節

柳本繁 (59)

109

・新入局者紹介

111

・秘書紹介	126
・教室人事・慶弔報告	128
・「同窓会活動に対するアンケート」の結果報告	133

（いあいさつ）

同窓会長 菅野 卓郎（27）

今回の「ふるさと」は矢部教授のご退職の時期に当たりますので、「矢部裕教授退職記念号」といたしました。ついでこの間教授に就任されたと思っております。はやくもご退任の時期になったことに驚いております。

矢部教授の時代にいたる慶応整形外科の歴史を思うとき、われわれはすぐれた諸先輩をもつ伝統ある教室に育ち、今日なおご厄介になっていることを感謝せずにはいられません。

慶応整形外科は遠く大正十一年、前田友助先生により整形接骨科として始められましたが、昭和三年前田和三郎先生のとくに現在の整形外科学教室が発足しております。以来岩原寅猪先生、池田亀夫先生、泉田重雄先生、そして現在の矢部裕先生にいたる六教授により継承され今日に及んでおります。その間実に七十五年余を経ております。第一回日整会が大正十五年に発足したといわれますので、われわれの教室は日本の整形外科と同じ頃に誕生し、歩んできたといえます。同窓会名簿の最初の方には、昭和初期前田先生のもとに集まり、教室を創られ

た方々の名がみられます。今日われわれの故郷である慶応整形外科の基礎をつくられたこれら諸先輩のご苦労にたいし、有り難く頭の下がる思いがいたします。

昭和二十一年からの岩原先生の時代になると、わが国において整形外科がようやく認識され、次第に大勢の医局員が入り、教室として飛躍的な発展を遂げた時期であったといえます。昭和四十一年池田先生、同四十五年泉田先生の時代へと移りますが、そのころは色々の意味で困難な環境に見舞われた期間でありました。池田先生には健康上の不運があり、泉田先生には学内事情による幾多の制約を強いられました。しかしそれらにもかかわらず教室としては常に発展を続けることができたと思っております。また学会においては終始リーダーシップをとることができました。

代わって昭和六十一年、教授に就かれた矢部先生にはあらゆる面で大きな期待が寄せられました。それ以来十余年の間に、矢部先生は粘り強く一つ一つ問題を解決し、業績を積み上げてこられました。教室内の充実のみならず、医学部ならびに慶応義塾、あるいは日整会においてのご活躍はすでに皆様ご存じの通りであります。最近では第六十九回日本整形外科学会総会を立派に開催されました。まさに学内、外において慶応整形外科の名声をあ

げることができたと思っております。矢部先生は第六代教授としての大きな責務を全うされました。

もちろんこの七十数年にわたる慶応整形外科の発展は七百数十名の教室、同窓会員の総力そのものによるものであります。歴代教授はそれぞれ高い学識とすぐれた指導力によって教室を主宰してこられたことに敬意を表するとともに、教室、同窓会員各位のご尽力に感謝せずにはられません。

ここにまた慶応整形外科にとって、一つの時代が移り代わろうとしております。来る三月には矢部現教授が退かれ、代わって新しい教授に次の世代をお願いすることになります。必ずや優れた教授が選ばれることを確信しております。この伝統ある慶応整形外科教室ならびに同窓会がさらに大きく躍進することを心から祈念いたします。



あゆみ

矢部 裕 (36)

平成七年秋から二年余りの教室のあゆみを綴ります。
最後のあゆみとなります。

一、第69回日本整形外科学会学術集会

平成八年四月十一日(木)から十四日(日)午前までの三日半、第69回日本整形外科学会学術集会是品川の新高輪プリンスホテルで開催されました。「伝統と獨創性」をコンセプトとし、分化と統合を可能とする具体的施策に加えて、慶應の色を出させていただきました。有料参加会員数五〇六五名でありました。一般応募演題五九三題、同ピデオ演題一三題、学会奨励賞四題の発表に加え、企画八四題(演者数二四〇名)を消化したわけです。発表された演者数は延べ八五〇名となりました。まさにマンモス学術集会でありました。一般応募演題数に比し、企画演題の多かったことがひとつの特徴といえましよう。

① 市民公開講座

学術集会に先立って桃の節句の三月三日、読売ホールで市民公開講座を開催いたしました。担当の係は坂巻豊

教先生で、司会の村田幸子氏(NHK解説委員)は彼の患者でありました。山内裕雄氏(順天堂大学整形外科教授)の基調講演に始まり、林 泰史氏(東京都衛生局健康推進部長)、山崎 元氏(慶應スポンサー)、太田博明氏(慶應産婦人科助教授)、楨 文彦氏(楨建築設計事務所所長)、江澤郁子氏(日本女子大学家政学部食物学教授)、増田明美氏(スポーツライター)が先ず短時間それぞれの立場から骨の健康について語り、続いて司会の村田幸子氏が聴衆になりかわって各項目ごと各講師へ質問しながら話を進めて行く形式をとりました。司会の妙とそれにマッチした各講師の返答は興味深く、わかりやすく、読売ホール一、二〇〇席を満たした参会者、高齢者が多かったにも拘らず、居眠りや途中退場者は一人も出ませんでした。

まさに第69回日本整形外科学会学術集会の成否を占う幸先良き前哨戦でありました。翌四月から東京国立小児病院へ赴任した坂巻助教授の慶應現役中最後の心血を注いだ御奉公でありました。この内容は読売新聞平成八年四月十一日付(学会初日)朝刊に掲載され、同日学術集会受付で配布されました。

② 学術集会開会式

平成八年四月十一日午前八時二十分から二十五分間慶



学術集会開会式にて

應ワグネルソサイエティによるオーケストラの演奏で始まり、そのフィナーレに墊歌を配しました。続いて開会の挨拶をさせていただきました。

③ 記念講演と会長講演

会長講演は第一日の午前九時から、つまり開会式に続いて、記念講演については第三日目の終わりに設定致しました。私自身この二つの講演については最も悩み、それだけに熟慮を加えました。

会長講演「日本の医療―これで良いのか」は悩んだあげくの決断でした。慶應義塾大学病院院長を四年やっての実感でした。高度医療をやればやるほど赤字となる保険医療制度、そしてそこには規制のみで自由競争原理が全く働かない。これでは進歩はなく、医療やがては医学も崩壊するであろうというこの現実を大学人に知ってもらいたい。しかしながら医療に関しては素人である、そして本学術集會会長でもある超多忙な整形外科医に果たしてこの講演ができるかという心配がありました。このため三年余りにわたって資料を集め、学術集會一カ月前からは、殆ど二・三時間の睡眠時間で勉強もいたしました。しかし、一番強いのは、私が経験した慶應病院の実態を訴えることだと考え、収支についてもありのままに公開しました。幸いに大方の評判は良かった様でほっといたしました。この内容は、私の退職記念誌にも収録させていただきます。

記念講演を石川忠雄前塾長にお願いすると決めたのは一九九五年一月十日の三田西五一七番教室で開催された福澤先生誕生記念式典の時でした。病後であったにも拘わらず、石川先生は御元氣でありました。そしてアポイントをとって、先生の研究所に赴きました。私は「福澤論吉と日本の黎明」という題で講演をしてほしい。現在、



石川忠雄前塾長による記念講演

日本は政治、経済、社会そして宗教までが混迷しており、
明るい二十一世紀を見通す事ができない。かかる時に、
現在以上に混迷の極にあったであろう明治維新にあって、
これを正しくリードし、新生日本の夜明けを迎えること

に貢献した福澤先生の教えをひもとき、原点に帰って考
える必要性を説いたわけです。石川先生は「福澤先生の
ことなら私でなく福澤先生の研究会の人が良い。大き
すぎる。考えてはおきましょう。」ということでした。私
は、早速に手紙を書き、かつ再度赴き、私にとって福澤
先生のイメージが石川先生に重なることで、どうしても
石川先生でなければならぬことを強調しました。「何
とかやってみましょう。タイトルは福澤論吉と日本にし
て下さい。」ということ、快諾をえました。

四月十三日、石川先生の記念講演の座長をやっていて、
私は身の毛が彌立ちました。明治維新から日本の官僚指
導型の政治がもたらした利害得失を説き、デベロプトと
なった現在にはむしろ害失が多く、このままでは日本はま
すます沈下するであろうことを予測し、国民各々が福澤
精神、独立自尊の原点に帰って勉強し、真実を見極める
理を説いたわけです。とつとつと説かれるだけに迫力が
ありました。真実この講座内容は医療だけを見つめた会
長講演の何倍ものスケールの大きさを示しました。やが
て私の興奮は、このすばらしい記念講演を日整会の会員
の皆様聞いていただけた喜びに変わって行きました。

④ 特別企画

特別企画一はジェネラリストのための集中講座「専門

分野この一年の進歩」で、整形外科と関連の深い専門分野臨床十一部門を選択し、平成七年度に会長をされた各先生に自ら主催した学会におけるシンポジウム、パネルディスカッションや特に進歩に貢献した学術発表等三、四の話題にしぼって、この一年の進歩を紹介していただく企画であります。黒川高秀前会長の特別企画にも同じ様な企画がありました。マンモス化した日整会の各分野の進歩を効率よく紹介することは会員、特にジュネラリストにとって必要なことであり、これが定着すれば専門化に向けてますます高まりつつある分化の壁の風通しを良くし、統合に向けて役立つものと考えました。聴衆は必ずしもジュネラリストだけではなく、その道のスペシャリストもおられ、分化と統合それぞれに役立つたものと考えます。

特別企画二は「対立する整形外科治療」で、比較的日常臨床で遭遇することの多い七問題をとりあげ、それぞれ対立する治療法を行っている二名の先生にご登壇いただき、ホットなディスカッションも行っていただきました。大変に興味深い企画であったとの評価をいただきました。

⑤ シンポジウム・パネルディスカッション
教室内の各診療班で充分に検討してもらい、その道の

オーソリティーである先生方によるシンポジウム企画、第一線で活躍している先生方によるパネルディスカッション企画を選定いたしました。座長二名中一名、シンポジストないしパネリスト一名は、慶應関係の人を配しました。教室の各診療班は、いずれも日本のトップレベルにあると感じておりますが、更に大きく発展してほしい願ひも込めてあります。

⑥ 外人招待講演、特別講演、教育研修講演

招待した外国人九名は招待講演六、教育研修講演三に振り分けました。いずれもEnglishな話題の提供であり、これらは教室内の各診療班で選んでもらいました。教室員の今後の国際交流に役だっしてほしい願ひも込めてあります。各講演は学術集会第一、二、三日目に各々一会場のみ同時通訳をつけて配しました。日英訳は必要ですが、若い先生方の英語でのやりとりを見ていると、英日訳は必ずしも必要ではないとの印象を持ちました。平成七年度に退官された八名の先生方による特別講演はいずれも趣きと重みのあるものでした。教育研修講演は二十題、受講証明書発行数は、延べ一〇、二六〇枚でした。ということは一講演五〇〇名以上の受講者数であったということになります。



外人招待講演後 Dr. H. V. Crock と



外人招待講演後 Dr. S. E. Mackinnon と

⑦ 外人若手参会者

AAOSおよびAOAからのTravelling fellow四名に加えて、東南アジア各国からの各一名の若手研究者八名の招待は整形災害外科学研究助成財団およびアルケア㈱の支援によります。国際交流の成果は大きかった様で、各々お礼の手紙をいただきました。一方、一般応募で採用された三十五名の外国人中、四名の欠演があり、国際的な壁、経済的問題はなお厳しい事を感じました。

⑧ Orthopaedic Forum Guide

医科器械展示、書籍・薬品展示、ランチオンセミナー、ワークショップ、イブニングセミナーはOrthopaedic Forum Guideという小冊子にまとめました。豪華な食事付きのサテライトセミナーはすべてスポンサー付きでありましたが、卒業研修としての単位追加取得につながった会員は勿論のこと、スポンサーにも好評だったように思います。

⑨ 親善スポーツ大会

伝統のある野球とテニスを行いました。試合前から盛り上がりがあった野球の方は、一夜雨のために一部ジャンケンとなりましたが、決勝戦は後楽園の東京ドームで行い、札幌医大が優勝しました。テニスはシングルスで熊本大の福元哲也先生、ダブルスで池田、福元組が優勝しまし

た。

⑩ プログラム等の編成について

プログラムの編成にあたっては、特に参会者の専門領域を重視した円滑な横の流れとジェネラリストのための卒業教育の効率を配慮いたしました。参会者の幅の広さと多様性に対応して、参加していただいた先生方すべてに満足していただける様、三年にわたって準備した実行委員の先生方の努力の集積であります。プログラムの誤字脱字等の指摘も全くありませんでした。大正製薬に経済的支援をいただいたプログラムの表紙、黒地に映えた学問のすゝめのデザインは傑作でした。

Orthopaedic Forum Guideの表紙の'96のデザイン、分厚い日整会誌の抄録集を入れて持ち歩くのに最適であったモスグリーンの手さげ袋、慶應、三田の図書館と信濃町の医学部の航空写真をあしらった記念のテレフォンカード等、すべてが傑作で心がこもっております。

⑪ 会長招宴

学術集会のすべての流れが最高潮に達する三日目の午後後に石川忠雄先生の記念講演を組み、これに続いて会長招宴を開催いたしました。日頃から御世話になった日整会名誉会員、役員、評議員、座長の一部の先生方、外人招待者等にホスト役も果たしていただいた同窓の先生方

の一部計三六〇名が出席いたしました。新高輪プリンスホテルの最高のフランス料理と最高のワインに加え、土方先生に紹介していただいたメゾプランの井原なお子さんにエンターティナーとして出演していただき、招宴を楽しんでいただきました。

ステージにのぼらずにメインテーブルの自席に立って述べていただいた主賓の挨拶と、各テーブルに着席したままでの乾杯は、御足が不自由な石川忠雄先生を配慮してのことでもありましたが、スポットライトによる照明効果がさえ、かえってすばらしい演出となりました。

三十余名の外国からの招待者を紹介した鈴木信正君の流れる様な英語とそれにあわせて起立した各外人をめぐり照らすスポットライトの演出効果も最高でした。来賓の方からはさすが慶應、豪華でスマートな招宴とのお言葉をいただきました。

厳しい時代であったのに派手すぎたとの批判もあるかと思えます。しかし、私の耳だけにはとどいておりません。慶應であるが故にこうしなければならなかった理由もございます。出来れば御寄付いただいた同窓の先生方全員に出席していただいて、共に主催した喜びを分かちたかったのでありますが、その数があまりにも多過ぎ不可能でした。御来賓の皆様からエンジョイしていた

だけたことを報告して御許しただければ幸いです。

⑫ すべてを終えて

何から何までうまく行きました。天候や桜の花まで味方してくれました。雨は夜間のみ降り、毎朝をさすがしく迎えることができました。日中は晴天が続きましたが気温はそう上がりませんでした。品川周辺の桜の花は四月十四日までもちました。新高輪プリンスホテルの支配人に頼んで、十日頃に終る予定の桜祭りを十三日まで延ばしてもらいました。多少は花吹雪となりましたが、十三日まで夜桜を楽しむことができました。

四月十四日の午前十一時四十分、予定通り学術集会のすべてを無事終了し、学術集會会長のメダルを北海道大学金田新会長に手渡すことができました。東京大学黒川前会長から日整會会員を代表しての謝辞をいただきました。過分にはめ言葉をいただきましたが、さすが慶應らしい、そして実りの多かった学術集會との言葉が実感として残っています。

大任を終えた安堵感と満足感にひたりえたのは三週もたってからでしょうか。百通に近い御礼やおほめの御手紙をいただいた頃でした。空前絶後と思います。慶應のすばらしさと大きさをつくづく感じました。実行委員の先生方をはじめ、同窓の先生方すべてでこの祝福を分

かち合いたいと考えます。御指導、御支援、御協力まことにありがとうございます。

なお会計報告は平成九年春の日整会総会でさせていただきますました。会計規模は二億七千万円余でありました。



学術集会閉会式にて

二、同窓人事

① 教室人事

平成八年四月一日から、富士川恭輔助教授が防衛医大整形外科学教授として赴任いたしました。故新名正由教授が平成七年六月に逝ってから十ヶ月であります。故新名教授とはまた違った厳しさのある富士川教授流の教室造り、益々の発展を期待しております。坂巻豊教授が平成七年十二月に助教授（赴任）となり、平成八年四月から故村上宝久先生が停年退官された国立小児病院整形外科医長として赴任いたしました。坂巻先生流の小児整形外科を作るとともに、日本の小児整形外科の要の役割も果して下さい。お二人とも教室のスタッフとして長年私と苦楽をともにしてくれました。また富士川先生は第六九回日整会学術集会の実行委員長を、坂巻先生は同委員として市民公開講座、記念品、広報を担当され、ともに三月ぎりぎりまで尽くされ、そして四月の学術集会の時にも御支援いただきました。厚く御礼申し上げます。

平成八年十月に戸山芳昭君、松本秀男君が講師となりました。色々な事情で大変お待たせして申し訳ありませんでした。竹田毅講師が平成八年四月に整形外科からスポーツクリニックへと籍を移し、平成九年四月には同助教授となりました。おめでとうございました。更なる発

展を期待しております。

平成九年四月、教室幹事（医局長）が松本秀男君から高山真一郎君に変わり、十月からは診療副部長、外来医長、病棟医長、保険医長が変わりました。平成九年度兼担教授に平林冽先生、客員教授に大谷清先生、内西兼一郎先生、客員助教授に花岡英弥先生、坂巻豊教先生をお願いしました。講師（非常勤）は二十二名、客員講師は二十七名であります。

平成九年十月一日現在の教室のスタッフおよび役職は次の通りであります。（以下括弧は卒業回数）

教授 矢部 裕（36） 教室主任、診療部長

助教授 藤村 祥一（47） 教務委員

講師 鈴木 信正（48） 診療副部長、研究副主任

井口 傑（49） 会計

小川 清（50）

堀内 行雄（52）

戸山 芳昭（54）

松本 秀男（57） 研修医担当主任

助手 高山真一郎（57） 教室幹事

大谷 俊郎（59） 外来医長

市村 正一（59） 病棟医長

柳本 繁（59） 保険医長

私の退職まで、このスタッフでまいます。どうぞよろしくお願い致します。

平成八年度の入室者（75）は十七名、平成九年度の入室者（76）は十一名です。平成八年度フレマン中、四名は同窓の二世、一名は女性、平成九年度には三名の女性、つまりフレッシュウーマンが入りました。いずれも美人であります。平成八年度の大学院入学者は二名で、平成九年度は零、私の時代の大学院生は十名でありました。バイオメカが二名、分子生物学的基礎研究テーマが八名でいずれも基礎的研究手法を身につけたものと考えます。

② 関連大学、関連病院

平成八年四月に富士川恭輔（43）助教授が防衛医科大学校整形外科教授として赴任し、平成九年四月には根本孝一（55）君が同助教授、小林龍生（60）君が同講師、同十月には伊崎寿之（64）君が同指定講師となりました。これで富士川講座の陣容が整いました。今後の飛躍が期待されます。

藤田保健衛生大学では、平成八年五月に中村俊康（67）君が同大学坂文種報徳会病院整形外科講師、同九年六月には安藤謙一（52）君が同助教授、同月鈴木克侍（59）君が同大学整形外科講師、同十月には中川研二（47）先生が同教授（定員外）、中井定明（52）君が同助教授に

昇進しました。藤田啓介理事長急逝等の特殊事情のため昇進が遅れており、吉澤英造(41)教授も気を使っていたと思いますが、これで一気によどつかえがとれた感じがいたします。おめでとうございます。益々のご精進を期待しております。

東京女子医大膠原病リウマチ痛風センターの齊藤聖二(54)君が平成八年七月から助教授に、桃原茂樹(63)君が平成九年四月から同講師となりました。センターが新設され、間もなく逝かれた柏崎教授なきあと、井上教授のもとでどうぞ業績を重ねて行って下さい。

平成七年十二月に西浦康正(65)君が筑波大学整形外科講師、平成八年一月には小柳貴裕(59)君が東京歯科大学市川病院整形外科助教授に就任しました。おめでとうございます。がんばって下さい。

さて関連病院では、平成八年四月に大谷清(37)先生が国立療養所村山病院の病院長、柴崎啓一(44)先生が同副院長となりました。当然の人事です。平成八年五月には田崎憲一(54)君が荻窪病院副院長、同六月には彦坂一雄(50)先生が東京専売病院の副院長心得、平成九年四月には石名田洋一(40)先生が国立埼玉病院病院長に就任されました。おめでとうございます。医療をとりまく環境はますます厳しくなっており、病院の運営には

神経を使うと思いますが、患者さんと職員のために頑張ってください。

関連病院として平成八年一月から公務員共済南多摩病院(初代医長大熊哲夫君56)、平成九年四月から豊岡第一病院(初代医長依光悦朗君66)、同年七月から江戸川病院(初代医長栗村誠君65)が登録されました。公的病院でなくとも、病院の内容が伴い、派遣される教室員が了解すれば、教室協議会の議を経て、関連病院として登録されることは今後もあることと考えます。内容の伴わない公的病院よりは、教室にとってまた教室員にとって、メリットがあるものとも考えます。

平成八年度には八ヶ所、九年度には三ヶ所の関連病院への増員を行いました。なお増員希望は十一病院、新規派遣希望は八病院あります。厳しい時代にも拘わらずありがたいことと考えます。しかし、仲々御要望に応じきれず申し訳ありません。もうしばらくお待ち下さい。

③ 留学

平成八年には須田康文(65)君(英、リーズ大学)、平成九年には仁平高太郎(67特)君(仏、パリ大学)、新井健(64)君(スエーデン、 Lund 大学)、関敦仁(65)君(デンマーク、オーフス大学)、岩本潤(69)君(米、ニューヨークウイントロップ大学)が留学

しました。一方、川久保誠(60特)君(英、リーズ大学)、寺田信樹(65)君、(スエーデン、ルンド大学)、市村正一(59)君(米、ワシントン大学)、桃原茂樹(63)君(米、ラッシュ大学)、千葉一裕(62)君(米、ラッシュ大学)、仁平高太郎(67特)君(仏、パリ大学)はそれぞれ大きな収穫を得て帰ってまいりました。

リーズ大学やルンド大学は既に数名の教室員を送っており、実りの多い国際交流を続けてまいりました。来年度も留学希望者は多く、手の外科班では順番待ちの様です。事情の許す限り多くの留学を許可し、交流を深めるべきでしょう。しかし行かれる人は銃後の守りのあることを忘れずに行って来て下さい。

④ 御開業および退室・復帰

御開業、停年退職その他で教室を退かれた先生が二十名おられます。内十一名は開業です。おめでとうございます。若手の整形外科医の開業は一般開業医の高齢化の目立つ中で地域医療の活性化につながり、地域医師会でも歓迎される所が多い様です。

山岸正明(49)先生が防衛医大下村教授→新名教授→富士川教授へのバトンタッチの役目を終えられ、教室へ復帰し、国家公務員共済立川病院勤務となりました。長い期間、縁の下の力持ち役御苦労様でした。

三、研究

① 学位取得について

学位取得を目的とした主論文の私への提出は、私の在任期間を考えると平成八年八月三十一日が期限であることを、その約半年前から予告いたしました。指導者のチェックと許可を受けた上で期限内に私に提出した論文については私自身責任もって学位取得に向かって努力するということとです。八月三十一日付けで三十六編、その後三、四週遅れた論文を含めると四十編の原稿が私の机の上に積まれました。一週間に一編処理するとして四十週はかかりません。W.KON、T.KONを考えると一年はかかることとなります。平成九年十二月の大学院医学研究科委員会が最終の受理となり、逆算すると投稿後掲載までが最も早い慶應医学で最終便である十一月号に載るには平成九年の七月に論文がアクセプトされなければなりません。私も毎晩頑張りました。結局一名の方が間に合いませんでしたが、三十九名の方は良くついてきてくれました。本年二月十日の榎本宏之(70)君の審査をもって三十九名全員の学位審査は終了し三月三十日に学位記が授与されます。

私の在職中に私が主査をつとめた学位審査は一七七件、内教室員は一一三件であります。その内の多くの審査

(副査)を同窓の藤野教授と千野教授につとめていただきました。厳しい中にも温情あふれる審査でございました。御指導いただいたインストラクターの先生方にも厚く御礼申し上げます。

② 研究室の整備

別館中央棟四階の医局を含むすべての居室、研究室を大金を投じて改装したことは既にふるさと前号で報告いたしました。特にバイオメカの研究室には個室三室を提供して、コンピュータ室、力学実験室、三方向運動解析室としての機能も備えました。理工学部出身の六馬君を配し、各班から三十を超えるバイオメカのテーマが出され、その成果が期待されたわけです。しかし残念なことに六馬君の個人的問題もあり、実りは一部しかありませんでした。多くの教職員に御迷惑をかけたことをお詫びいたします。

組織や施設、設備等のハードも大切ですが、最も大切なのはそれを生かす人、ソフトであります。フレッシュライヘが比較的容易に手に入る慶應の整形外科にとって、バイオメカは極めて大切な研究手段であります。今後興味をもっているドクターが理工学部と連携してあとを引き継いでいって下さい。

生化学は中川智之(47)先生がチーフとして基礎的研

究を行ってきました。しかし後継者がうまく育たず、一時休息状態にありました。昨年米国帰りの市村正一(59)君が分子生物学的研究も出来る様な改修を含めて再整備してくれました。分子生物学的研究はDNAや免疫学的手法を含めて現在欠くことのできないものとなりました。大学院生と各クラスの有能な一〜二名の方が、教室外の研究施設や防衛医大整形外科学教室、東京女子医大膠原病リウマチ痛風センター等、分子生物学的研究が出来る所へ出向し、研究を行い、その研究手法を身につけた若手も大部育ってきました。今後の教室の研究手段として大きく活用してほしいし、最も伸展が期待しうる部門であります。

四、日本臨床スポーツ医学会

第八回日本臨床スポーツ医学会学術集会は、平成九年十一月二・三日、東京国際フォーラムで開催されました。

慶應病院内にスポーツクリニックを作り、その部長となった私は、日本臨床スポーツ医学会を主催せねばならない運命にありました。もともと同学会の評議員ではありましたが、スポーツ医学では業績も少なく知名度の低い私が、あと二、三年の在職期間中に会長をとってこのことは慶應というバックがあっても、昨今は至難の業で

あります。平成五年に当時山形大学の渡辺好博教授が私を学会の理事に推薦して下さったことは強運でした。浅野先生を頂点とする慶應スポーツ医学懇話会や同期の服部光男君の支援、山崎元教授や竹田毅助教授の後押しがあった、日本臨床スポーツ医学会黒田善雄理事長と親しく会食する機会を得ました。黒田理事長も矢部個人というよりはオール慶應の熱意を感じられ、理事会で私を第八回の日本スポーツ医学会会長に推薦していただけたものと考えます。

慶應スポーツ医学懇話会の主な方達に実行委員に入っていたとき、オール慶應で臨みました。小実行委員には竹田毅助教授を事務局長として、スポ研山崎元教授、小川清久講師、堀内行雄講師、大谷俊雄君、石田浩之（スポクリ・66）君と私が入り、月一回は定期の会合を開いて準備を進めました。規模からすれば日整会の六分の一程度ですが、各種の寄り合い世帯であるので、統合、連携に意を払いました。しかしながら実質的には竹田君をはじめとする小実行委員会にまかせっぱなしで、わたしは殆ど何もすることはありませんでした。

日整会と同様、学会前日の十一月一日に読売ホールで市民公開講座「減量の医学」を開催いたしました。森本毅郎キャスターの司会で講師は山崎元（慶大スポ研教

授・47）、大野誠（慈恵医大健康医学センター講師）、藤本エドワード（東京衛生病院健康教育部長）、勝川史憲（慶大スポ研・64）、増田明美（スポーツライター）氏です。各講師の短時間の講演後、森本キャスターが市民になり変わって質問し、討議を進めていくやり方は、日整会の市民公開講座と同様で、円熟した司会の森本キャスターと各講師の息もぴったりでした。減量は現代人の関心事ではありますが、本市民公開講座の成功は裏方を担当した大谷俊郎君の気配りによります。前哨戦の成功は翌日の本番での自信につながりました。

十一月二日の午前八時四十五分の開会、あの広い東京国際フォーラムでの受付、各会場への動線等気になりましたが、すべては円滑にスタートしました。各会場への入りもまあまあでした。十一時十五分からの会長講演「スポーツ医学―分化から統合、連携に向けて―」では本学術集会のコンセプトとして掲げ、既に慶應ではこのコンセプト通りにスポーツ医学を実践している現実を紹介して全慶應スポーツ医学のaligningを示しました。特別講演浅野真（32）先生による「現場の医学・日本陸連とともに」は日本陸連とともに四十年歩んでこられた先生の現場の医学の紹介であり、多くの感銘を与えました。午後五時から山崎元教授が招聘したMinori先生

による外人招待講演 Physical activity and cancer prevention)であります。スポーツは果して癌を予防することができるといふ極めて興味のある話題に自然科学的な分析を加えました。質の高さに加えて歯切れの良いわかりやすい英語による講演でありました。続いての会員懇親会は、第二日目にランチボックスを提供した総会とともに多くの会員の出席をいただき、盛況でありました。

シンポジウム三題、特別企画三課題、ワークショップ三題、教育研修講演四題とすべて口述発表とした一七一題の採用一般演題が十一月三日午後三時三十分すべて予定通り終了いたしました。有料参加者は八四〇名で昨年より三〇〇名余増の盛会でした。余す所なくオール慶應の力を示した学術集会でありました。

母体となっていたいた慶應スポーツ医学懇話会、実行委員会、同小委員会の先生方に心から感謝申し上げます。

五、同窓会会員八柱逝く

平成七年十一月から二年間余りで、八名の同窓会会員の方がなくなりました。左記の通りであります。

平成七年十二月 宮本 銈造先生
平成九年 一月 野町昭三郎先生

二月 星 幸男先生

三月 伊藤 原先生

九月 森 雅文先生

十月 村上 寶久先生

平成十年 一月 田辺 碩先生

二月 左名田幸夫先生

伊藤 原先生は同窓会会長をされ、同窓会の顧問でありました。森 雅文先生は長いこと同窓会幹事長をやって下さいました。左名田幸夫先生、宮本銈造先生、野町昭三郎先生、私自身をも育てて下さり、ありがとうございました。村上寶久先生、田辺 碩先生、逝くにはまだ早い、しかし村上先生はやるすべてを成し遂げました。田辺先生はすばらしい後継者を得ました。そして星先生を含め、先生方の御陰で、今日、伝統あるこのすばらしい教室があるわけでございます。先生方の同窓会番号は永久に欠番いたします。心から哀悼の意を捧げ御冥福をお祈り申し上げます。

六、退職に際して

昨年十一月に「手の外科に関する基礎的臨床的研究」で私自身、義塾賞をいただきました。身に余る光栄であります。文字通り有終の美をかざることができました。御推薦いただいた猿田医学部長に深謝するとともに長年

にわたってともに努力を重ねた慶大手の外科班の皆様への授賞と考えています。ありがとうございます。

あと二ヶ月弱で満期となります。無事の航海を終えることに安堵と無上の喜びを感じています。退職記念誌に整形外科四十年のあゆみを書かせていただきましたが、私の任期中に自らの能力を超える仕事をなしたげたことに驚いています。和と伝統と研究を重視して走り続けた十一年八ヶ月でありました。すべては教室、同窓の皆様方の御指導、御支援、御協力に負うものであります。特にスタッフの先生方が、各自各班勝手な行動をとることもなく、教室全体のことを考え、自らを犠牲にしてまでも、卒業教育、研究の指導を下されたことに頭が下がります。お陰様でキラ星のごとく輝く若手が育ってまいりました。

優秀な人材がそろっている教室、同窓です。誰が次代七代目の船頭さんになってもやっていけると思っています。乗組員全員の意を体して、船頭さん自ら一生懸命やれば、心ある有能な教室員は必ずついてまいります。どうぞ次代の船頭さんにも私同様、心からの御指導、御支援、御協力をお願い申し上げます。

教室は、ふるさとは永遠であります。

(平成十年二月九日記)





特 集

矢部裕教授ご退職に寄せて





矢部教授、誠に御苦勞様でした

大内 正夫(12)

泉田 重雄(23)

矢部教授御退職、誠に御苦勞様でした。

例えば、矢部教授就任の時代は、慶大医学部では、二大勢力の葛藤が漸く治まり、終末に向っていましたが、当整形外科教室では、尚その余韻が燻っている時期でした。どちらが良いとか悪いとかの問題ではなく、この問題を解決し、一方的に束めなくては、教室の平和も発展も阻害されるものと考えられていました。

この困難の時期に就任し、この難局を解決し得たのは、最大の業績と考えます。

矢部教授が、教室に、学会に、いや慶大そのものに残した種々の業績は誠に大きいものがありますが、前記のことは、余人のよく成し得ない、高く評価されるべきものと思います、ほんとに御苦勞様でした。

今後も、益々御元気で、益々御活躍されんことを祈っております。

平成十年もはや三月になろうとしています。この三月には矢部教授が退任されるので、氏の前任者として送別の辞を兼ねて所懐を贈ります。

凡そ、教室の主任者程に多忙で心休まる暇もない職はすくないと思われる。私自身にしてもあれ程悩まされた胃潰瘍が退任以来一度もおこっていないのである。ストレスの偽せる業であったと考えている。それはさておき大学における三大責務である教育・診療・研究はそのいづれ一つをとっても一人の肩に余る重荷であって、これらをやり通すことは心身を労すること一通りではない。矢部教授にはこれらを十余年に亘って立派に為し遂げた許りでなく、学会人としては第六九回日本整形外科学会学術集会々長として、空前の規模で、大盛會裡に開催されたことを始めとして、その他の多くの学会々長、又は理事として学会に貢献し、又日本整形外科学会副理事長として学会の社会的使命の達成にも尽力され、更に慶応大学病院々長として病院運営に当り、いづれの方面に於いてもその職責を立派に果たしたのであります。才能と

努力と強運とが然らしめた所であって、今般、使命を達成されて勇退されることは誠に同慶の至りであります。教室の歴代教授の中でもこれだけ多くの仕事を為された人はなく、これ又空然のことであります。本当に御苦労様、お疲れ様と申し上げる次第です。

なお然し、矢部教授退任と云った教室の大きな区切りについても現在医療のおかれた立場は生半可なことではないことが感じられる。近來頓に烈しくなっている医療や医人に対する一般の批判は吾々の目から見れば当っていることもあるが当らぬことも尠くない然し尚、我々の自己反省を促すものも多々ある。私が申したいのは、保健の点数や医療従事者の心情の問題で許りはない。これは勿論大切であるが、ここで申したいのは吾々が行つて来た、又行いつつある医療がどの程度人類に寄与しているかの問題である。辛沢弘文氏の言われた社会的費用の問題もその一つになろう。例えば吾々の行っている治療法を考えてみよう。治療には明らかに有効なものがあり、又然程ではないが症的に有効なもの、疾病に対して効果はないが慰安や快感を与えるもの、毒にも薬にもならぬもの、更には無益有毒なもの迄種々の効果段階がある。現行の医療制度では疑似行為を含めて、これらを峻別していない。従事者の生活権のために余程の有害行

為なければ目零しされている状況である。こんなことで医療の根本的な改革は望むべくもない。次代、次々代を担う方々の活躍を願いと期待とを籠めて待つ次第である。



矢部教授、ご苦労さまでした

菅野卓郎(27)

このたびご退任される矢部教授にたいして心から「ご苦労さまでした、そして本当にありがとうございます」と申し上げます。昭和六十一年、慶応整形外科教室の主任教授になられてから、あっといいう間に任期が過ぎてしまった気がいたします。短い期間のように思われますが、その間大変ご苦労をされました。しかしその結果多大の業績を残され、教授としての重責を全うされたことをここに感謝するとともに、心からお慶び申し上げます。いづれ矢部教授の経歴なり業績については別に明らかにされることかと思いますが、私なりに思いついたことを述べてみたいと思います。

昭和四十年代は慶応医学部は学内の機構改革に揺れ動いておりました。そのさなかの昭和四十三年、池田教授は就任一年余りのとき突然倒れました。そのころ助教は空席、当時講師であった矢部先生が孤軍奮闘、一人三役の活躍で教室を切りまわし、何とか苦境を乗り越えられたことをいま思い出します。

医学部改革は整形外科教室に長期間にわたって後遺症

を残し、昭和六十年にいたるまで正常の教室態勢をとることができませんでした。こうした混沌とした情勢のなかで矢部先生が教授に就任されました。昭和六十二年の「ふるさと」(矢部教授就任記念号)で、私は祝辞として甚だ勝手な希望とお願いを述べましたが、教室関係者は一様に大きな期待をもって教授をお迎えしたことと思います。

当時、教室を一つにまとめること、それが当面解決しなければならぬ第一の課題であったように思います。教授はまづ「和」の精神をもって、かつ教室の伝統を大切にしつつ新しい教室づくりに当たられました。大勢の人間の集まりであり、言うに易く実現の困難なことを時間をかけて着実に一步一步目的に向かって進めました。地味な誠実さ、時代や環境に左右されない信念と粘り強い実行力は、何よりも矢部教授のすばらしさであると私は思っております。おそらくそれは当時の植村学部長による医学部執行部によって評価され、教授にたいしてきわめて協力的な道を開いていただけたように感じております。丁度そのころ医学部は新棟を開設し、それによって病院の財政を立て直し健全化を実現して、それに医学部の将来を賭けようという意気込みでありました。矢部整形外科はここで医学部ならびに病院にとっての重要な

一員として、その責任を果たすことができました。

平成元年、教授はその誠実さと手腕を買われて医学部執行部に入り、副院長ついで院長に任せられました。細かい内容は存じませんが、ともかく慶応病院の経営を改善し、今までにない実績を挙げられました。平成五年のスポーツクリニクの開設は教授の就任時からの念願が実ったわけで、整形外科にとってもまた慶応にとっても大きな財産となりました。

一方日整会では理事選に勝たれ、その人柄と実行力を見込まれて平成三年副理事長に選ばれました。矢部教授は必ずその地位にふさわしい立派な仕事をされております。慶応内部のみならず日整会においても慶応整形外科の存在を明らかにしていただいたことは、われわれ同窓一同にとってまことに嬉しいことでした。

教授の対外的な活躍のみに触れましたが、教室にとつて大切な研究面についても教授は当初から力を入れておられ、各研究班の活性化をはかられ、助教授、講師ほかスタッフの協力を得て立派な研究体制を作られました。研究室の整備、予算の確保等にご苦労されたことはよく存じております。その結果各学会をリードできる業績が数多く生まれ、また学位論文も大変な数にのぼると伺っております。教授が今日まで慶応病院長、日整会副理事

長などととして対外的に活躍できたのも、足もとである教室内部の研究、診療面での充実が得られてこそはじめて可能であったものと思っております。

今まで手の外科学会のほか数多くの学会、研究会を主催してこられました。最後に平成八年四月、日本整形外科学会総会を立派に開催されました。それは教授が今まで蓄えてこられた力の集大成であったと思います。これはまた諸先輩の築いてこられた慶応整形外科の伝統と教室員、同窓各位の絶大なご尽力、ご支援に負うところ大ではありますが、矢部教授の手によって実現できたことにたいして感謝の気持ちで一杯であります。

教授はまたこのたび手の外科の研究業績によって、平成九年度の慶応義塾賞を受けられました。それは教授の立派な学術的価値が認められたことにほかなりませんが、永年にわたつて慶応義塾に尽くされた功績にもよるものと推察しております。医学部ならびに整形外科教室にとつてこの上ない名誉であります。おめでとうございました。教授は来る三月をもって慶応を去られますが、教授が残される遺産は多大であります。四月以降は新しい時代に移りますが、その財産を受け継いでさらに光輝ある世代を作っていくことができますよう、矢部教授の今後とも変わらぬご指導をお願いするものであります。

矢部 裕教授ご退職にあたって贈る言葉

柿田 喜三郎（31特）

矢部教授は36回生、昭和32年のご卒業で、私とは5年後輩にあたる。当時は岩原先生の全盛時代で、先生が学会発表で「幼少児上腕骨顆上骨折の予後」を担当され、その下調べのご下命が私に下された。関連病院の症例を含めるため下請けの後輩を数名使ってやってくれということだったので私は期限を切って5-6名に依頼した。そのなかの一人が当時大学院生であった矢部先生であったのだが、期限が過ぎても一向にデータは集まらないばかりか、必要項目の脱落したものが目立ち私はすっかり落胆した。例えば自分の仕事にもならない下請けのまた下請けの用事など誰もまともに引き受ける訳がないので、失敗は自分の甘さにあったことを痛感し、私は窮状に立たされた。しかしそんな中で矢部先生だけは真面目に正確な貴重なデータを提供してくれたので私は大いに助かり、これをもとにデータをまとめて岩原先生に答申するができ、かろうじて私の面目を保つことができた。この時から私の矢部先生に対する評価は一変し、信頼のおける熱血漢であるという確信を得た。また当時日本手

の外科学会が発足し、手の外科の専門医の養成が望まれていたが、岩原先生は有給助手を次々に自室に呼び、手の外科を専攻するよう説得されたが、誰もがお断わりして退出した。それは中野にレブラ（ハンセン病）の療養所があり、その麻痺手は手の外科を専攻する者には欠かせない好材料であったからである。当時潜伏期10年と言われて恐れられたハンセン病に敢然と立ち向かい、広島大津下教授のもとに内地留学し、さらにテネシー大キャンベルクリニックのリー・ミルフォード教授に師事して手の外科に磨きかけられた。先生の末梢神経横断図（トポグラム）の精力的なお仕事をみれば、研究に対しても決していいとこ取りのきれいごとではなしに真正面からぶつかって行く熱血漢であることが解る。

果たせるかな、卒業15年で新設の藤田保健衛生大学の教授に推薦され、副院長まで勤められた。昭和61年8月、泉田教授のご退職に伴い母校の教授に復帰されてからは就任時の所信表明にみられるように山積する課題を次々と見事に解決して行かれたといえよう。教室運営の基本的コンセプトを和と伝統と研究とし静岡、北関東、三多摩地区の関連病院の殆どを歴訪し地方で苦勞している会員と話し合い開業の先生方を含めた同窓すべての方々との協調をはかり、教室内ではセクシヨナリズムになりが

ちなデヴィジョン化に伴う各研究班が壁を作ることなく、教室という絆を通じて互いに競合し、成長を続けるよう配慮されたことは何よりの業績ではないかと思う。

行政面でも生体工学研、生化学研、動物、病理、細胞培養およびコンピュータ室などの研究施設の集約整備を初め、平成3年9月のスポーツクリニック外来部門の開設は大きく評価したい。学会担当も平成2年5月の第33回日本手の外科学会は当然のことながら平成8年4月の伝統とオリジナリティをコンセプトとした第69回日整会は教室の持てる力を存分に発揮することができ、まことに盛大な学会であったことは未だ記憶に新しい。

また自らは早々と平成元年10月に大病院副院長、翌年院長に指名されて見事にその重責をまっとうされた。その苦しい経験は日整会の会長講演「日本の医療―これで良いのか―」に集約されており、会員一同深い感銘を受けた。また日整会では小野村理事長の副理事長となり、役員中でも最も難しい庶務会計担当理事を勤められたことは敬服に価する。以上の事柄からみても教室主催者には決して頭脳明晰だけでは勤まらない。何よりも相手の身になって考え、同窓全員を思いやる心を持ち、しかも教室の発展につながる事柄に情熱をもって精進し実行することが求められる。矢部教授はこれらの困難な要求をか

らだを張ってほぼ満たしてくれたように思う。大変御苦労さまでした。その一方ならぬご努力に対し心からねぎらいの言葉を差し上げたい。



矢部君との思い出

形成外科学教室 藤野 豊美 (36)

同級の君は僕より3ヶ月前に生まれた先輩だ。退職記念祝賀会も、君が三月二十八日に帝国ホテルで、僕が二十九日にニューオータニホテルで行う。

思えば早いものである。初めて君に会ったのは四十七年前。医学部入試の時だった(その時一緒だった君と同じ浦和高校卒の佐野君に昨年春に再会でき、感激の至りだった)。昭和二十六年(一九五二)に医学部の二次試験で北里講堂の屋上で順番を待っているとき、すぐ前にいた君たち二人と会話を交わした。合格した。そして日吉の銀杏並木でばったりと君と出会った。「信濃町で会った君だよな、お互いに田舎っぺで知り合いはないし、何かの縁だから友達になろうか」と、いとも簡単に交友関係を合意し、それを今日まで継続している。

日吉時代には医学部特別コースには二組、P組(経済学部所属)とO組(法学部所属)があった。二年後には学部への試験がもう一度あり、約半数が落とされる。落ちればP組は経済学部、O組は法学部に各々進学できるといふ温情のあったコースだった。お互いにP組で良

く勉強をし、成績は殆どAだった。

初めての夏休みは、医学部予科入学のお祝いということで北海道一周旅行が可能となった。小樽出身の川村達之助君の世話で北村雄哉君を含めた四人の編成。小樽を出発点に世界最深の摩周湖で世にも珍しい毬藻を見学、弟子屈温泉に、また第一滝の本ホテルの巨大なお風呂に驚き、と初めて受験戦争の苦しみから開放された夢のように楽しい一週間だった。

医学部時代の課外活動での共通点は、新聞部に属したことだった。学IVの責任編集の時は、君は行政面の第一面を、僕は学術の第二面を担当した。

卒後は、整形外科に入局し、君は大学院へ、僕は新しい形成外科の研修のためフルブライト奨学生として米国へ留学した。専門として君は手の外科を、僕は頭頸部再建外科を選び、お互いに教職に就いた。その間、君は副院長、病院長に就任し、医学部病院の行政面を担当した。僕は学会を興し国際シミュレーション外科・コンピュータ支援外科学会も創立した。こうみると学生時代に医学部新聞を担当した役割を、そのまま継承しているように思える。

ポリクリは、我々のときは好きな者同志で組めた。そのうち二組が「六三四会」と称する仲良し会をつくって、

年一回の回り持ち幹事の世話で旧交を温めながら旅行を
楽しんでゐる。最近ではお互いに年取ったせいか、同伴
するようになった。

今時定年後も職に就けることは有り難いことである。

お互いに元気で最後のお勤めを果たそう。

一九九七年十二月二十日記



共に過ごした日々

池田 彬 (38)

私が入局した時、矢部先生は3年生であった。当時の
フレッシュマンは外来の書記や手術室の点滴係などにこ
き使われるばかりで、手術は全くやらせて貰えなかった、
その私に初めての手術の手解きをして下さったのが矢部
先生であった。確か女性の胸部の癬痕切除だったが「やっ
てごらん。」とメスを渡された時の嬉しさは天にも昇る
ようで、何と優しい先輩だろうかと思った。

その年の医局旅行は湯本であったが、幹事の矢部先生
は宴席の余興に素裸になって赤坂先生と宿屋の浴衣の帯
で一物をつなぎ合い、さながら北京原人のように踊り狂っ
たので、こんな野蛮な医局に入局してよかったのだろう
かと後悔した。豪快で細心、後輩に対する思い遣いに溢
れた心と云うのが初対面の印象であった。

当時、矢部先生は骨端線早期閉鎖に関する学位の仕事
に忙しく、臨床の仕事が晚く迄かかるので、動物実験が
始まるのは夜半になってからで、帰宅する暇がないため、
シャツの着換えに手術室の下着を着ていた記憶がある。
研究半ばに塩原に出張させられた時には動物小屋がない

ので、自宅の押し入れの中で鼠を飼って実験を完成させた。

その年、手の外科学会が新潟であり、野末先生と私の3人で出席した。手の外科学会は大層面白く、矢部先生が手の外科を志す端緒となったのではないかと思う。帰途、折角だからと佐渡に寄って行こうと連絡船に乗ったら、新婚旅行中の松井先生とばったり出会った。とても飲んでくれたが、今思うといささか迷惑だったに違いない。佐渡航路は大荒れで、1万トン位の黄金丸という船が、ローリング、ピッチングを繰り返し、ゴロゴロ左右に転がるだけでなく、頭と足の方にズルズルと滑り落ちるのですっかり酔いしてしまった。上陸した佐渡はともよよい所、旅館の舞台で正調の佐渡おけさや相川音頭を教わった。

矢部先生の結婚式には私も招んで頂いたが、米谷先生が「矢部は女の百人斬りを目差し36人送ったが、奥さんが37人目で」という挨拶には仰天するとともに一人の恋人もない我身と引きかえ、とても羨ましかった。

「Lionsの手術を初めて教室に導入したのも矢部先生である。それ迄、椎間板ヘルニアは椎弓切除術（しかも局麻で痛い痛いといわれながら）で摘出していたが、この新法を雑誌で見付けて来た矢部先生が黄靱帯切除のみに

よるヘルニアの摘出に成功し、その簡単さ、出血量の少なさ、時間の短かさに驚嘆した。

やがて、愛生園やCampbell Clinicで手の外科を学ばれ、教室の手の外科を形成された。腋窩ブロックや止血帯の使用等の基礎もこの時始められたことである。

今井先生の跡を継いで医局長になられ、名医局長振りを発揮された。印象深かったのはスピーチの巧みさで、特に医局員の結婚式の時には内容の豊かさや詞藻の見事さに感嘆した。

矢部先生はスポーツ万能で、野球もできるし、特に相撲が強かった。塩沢にスキーに行ったが、どんな斜面でもこなす実戦的なスキーであった。尾瀬に登山した時は平林先生と一緒に、健脚な彼は一日で私仏山と燧岳に昇る計画を立て、あまりにも先を急いだったので私の半月板が傷ついてしまい、結局どちらにも登らなかった。同行した山岳部のキャプテンの関先生もかなりバテていたが、矢部先生は平気で水芭蕉やいもりを楽しんでた。唯一私が矢部先生の師と云えるのはゴルフで、モダンゴルフに則り、ベン・ホーガンのフォームになるように努力したが、出来上ったのはローラ・ボームのような華麗なフォームであった。

名古屋保健衛生大学の教授になってから、毎年野口、

月村、伊勢亀先生とともに夏休みに一大サーキットを行った。これは伊勢からスタートし、マージャンをした翌日ゴルフをワンラウンド廻り、名古屋、浜松、東京と車で移動しながらマージャンとゴルフを4日間に渡って行う過酷なゲームで、矢部先生は晝間のゴルフで負けた分を夜のマージャンで居眠りしながらロンと云う得意のマージャン術で取り戻すという楽しい日々であった。

慶應に帰って来られた時、教授室に伺ったら手ずからお茶をいれて下さった。

その後の矢部教授は慶應病院の病院長や、日本整形外科学会の会長として整形外科医の頂点を極められたが、その多忙な日々にも医局員の凡ての論文に眼を通されるという精励さであった。

この度、教授を退かれることになったが、健康に留意され、新しい人生で一層ご活躍されることを願います。

矢部先生と手の外科

内 西 兼一郎 (39特)

矢部裕先生のご停年ご退職にあたり、私といたしましては申し述べたいことがあまりにも多くあり、まとめようがなく大変混乱しています。先生の慶大整形外科教室における立派な業績については、多くの同窓生からの言葉があると思いますので、私は日本手の外科学会における先生のお話しをさせていただきます。

日本における近代手の外科学は、天児民和(九州大)、岩原寅猪教授(慶大)などのご努力でその礎が築かれ、昭和32年神戸で開催された天児会長の第1回日本手の外科学会により幕が開かれました。昭和32年の第3回は東京で岩原先生の会長で行われました。その後、第20回は池田亀夫教授、第33回は矢部裕教授と学会の節目、節目は慶応義塾大学整形外科学教室が担当してきました。第20回は屈筋腱損傷および末梢神経損傷が主題で、また実験による基礎的研究が盛んとなり、第33回は麻痺上肢の機能再建と末梢神経再生が主題で、手関節に関する研究が多くなってきました。腱の演題が少なく、末梢神経のものが多数みられました。

矢部裕先生は、大学院卒業直後から手の外科学を研修され、近代手の外科学、とくに臨床のみならず実験的手法を取り入れて、この方面の学問に多大の寄与をされました。昭和44年の第12回学会で手の外科評議員に推薦され、近代手の外科学の嚆矢といえる津下健哉（広島大）、田島達也（新潟大）教授につづいて、山内裕雄（順天堂大）、室田景久（慈恵大）教授とならび第二世代の指導者として、日本手の外科学会を推進して来られました。

先生はきわめて丁寧かつ繊細な手技の持主で、かつ *idea man* であられます。昭和46年には、先天性橈尺骨癒合症に対する新手術法として、橈尺骨癒合部に肘筋弁を挿入し、上腕二頭筋を移行して回外筋とする術式を発表されました。この手術は、橈尺骨癒合の程度の軽い、片側性の症例に対し、現在なお利用されています。また昭和48年には、名古屋保健衛生大から *floating thumb* に対する機能再建術として、*floating thumb* を切断せずに、生かす術式を呈示されました。第一次手術で、皮膚の有茎移植と第4中足骨末梢2/3による第1C M関節の再建を、第二次手術で母指の屈、伸筋、対立筋再建を随移行術で行う方法です。手術の遂行には、充分な手の外科の技術が必要ですが、現在しばしば施行されている素晴らしい手術です。

慶大のみならず名衛大でも大活躍され、同大を古い伝統ある大学に比肩できるレベルにまでもってこられました。

教室では、矢部先生の薫陶をうけた、山根宏夫、加藤哲也先生をはじめ、三笠元彦、鶴田征夫、山屋彰男諸先生が、教室の手の外科学の、開拓者として活躍されました。

昭和48年に先生の名衛大教授へのご栄転に伴い、私が後任となり、小林慶二、村上隆一、それに伊藤恵康先生と一緒に慶大手の外科研究班を引き継いで来ました。現在、堀内行雄講師のもとに、約50名の錚々たる若い希望にあふれた優秀な手の外科医の研究者がおります。そして名実ともに日本一の手の外科学研究班を目指して頑張っております。

矢部裕先生には、これからも従来どおり、教室の手の外科班の一層の発展のためにご指導、ご鞭撻賜るようよろしくお願い申し上げます。

今後先生は、全く異なる環境になられるわけですが、くれぐれもご健康に留意されて、ご活躍くださることを念じております。

長い間、私共未熟な後輩をご指導下さいましたことに、厚く御礼申し上げます。

矢部先生、長い間ご苦勞様でした。教授として教室に今日の隆盛をもたらすとともに、大病院長として病院の経営改善にも成功され、また数々の学会を主催されるなど、多くの功績を残されて定年退職の日をお迎えになったことを、心からお喜び申し上げます。

先生と私は学年が三年しか違わないので、私が入局してからしばらくは共に教室の兵隊として暮らす日々がありました。ほとんど毎日先生の警咳に接し、指導を受け、そしておこられるという生活のなかで、多くのことを学ばせていただきました。このなかには知識として学んだことだけでなく、先生が私に示した姿勢から私が学び、私の記憶に残っている多くのエピソードもあります。そのいくつかをご紹介します、教室員のみなさんに若き日の教授の人となりを知って戴きたいと思います。

私がフレッシュマン出張から教室に帰った頃、先生はハウプトの研究の追い込みに入っておられました。ほとんど毎日徹夜で実験をし、明け方医局の硬い長椅子で仮眠をとるといふ生活をされていました。当時当直室というものは無く、医局の隅に二段ベッドのようなものがあり、その上段が当直用ベッドでした。私は当直の朝、先

生の目をさませないよう注意してベッドから降りようとするのですが、なにせ壊れかけたベッドなのでギンギン音がして、かならず先生をおこしてしまいます。しかし先生は不機嫌な様子も見せず、『当直ですか？ご苦勞様です。』とねぎらいの言葉をかならずかけて下さいました。

私が五年生か六年生の頃のある日、初診を担当していると慶応病院の看護婦さんがアキレス腱を痛めて受診されました。アキレス腱を触診しますと、腱の横径半分には明らかな凹みを触れるのですが、残り半分にはどう触っても凹みは触れず、腱の緊張を感じます。『アキレス腱の部分断裂なんて無いよな。』と思いつながら触診を繰り返しても、やはりそうとしか思えない所見です。そこで一診を担当されていた矢部先生の所に行き、おそるおそる『先生、アキレス腱の部分断裂と思われる患者がいるのですが……』といいました。すると先生は『そんなもの無いよお前。』『私もそう思います。でも有るんです。』と私。ということで先生に診ていただくことになりました。先生は私の三倍ぐらいの時間をかけて触診をされた後、『おっしゃるとおりです。これは部分断裂です。』と認めて下さいました。触診を大切にされる先生のお姿に感銘を受けました。この症例は保存療法

で完治したので正解は不明です。

それからまた何年かたち、私は大田原赤十字病院に出張していました。とある夕方、ピンを手に持って遊んでいて転倒し、ピンが割れて破片で左中指^{3rd}Ⅱに切創をうけた2才の女子が運ばれて来ました。屈筋腱が二本とも鋭切されているのを確認した私は、これは私が手をつけるべきではないと判断し、皮膚のみを縫合し副子固定をして、矢部先生に連絡をしました。先生は四カ月後に済生会宇都宮病院で手術の予定があり、その時手術をしていたことになりました。その後患者の中指は自動屈曲可能となりましたが、屈曲が不十分なので予定どおり済生会病院に入院させ、手術当日私も見学にまいりました。術野に現われた屈筋腱は一見正常の外観を呈しています。『君、本当に切れていたんでしょね。』。『はっきりと二本の腱が鋭切されているのを確認しました。』。やや憤然として私は答えました。先生はニコツとして『わかりました。』といわれて詳細な検索を始められました。その結果深指屈筋腱中極端と浅指屈筋腱末梢端が癒合し、深指屈筋腱末梢端もゆるみをもってこの部に付着していることが判明し、浅指屈筋腱切除、深指屈筋腱一部切除後縫縮をされて手術は終わりました。

この症例から先生は一定の条件を充たせば小児の場合、

屈筋腱の自然癒合が期待出来ると考えられ、その後意図的に保存療法で治癒させた症例などを加えられて『小児手指屈筋腱断裂保存療法の可能性について』（整形外科、26、13、1452、1975）という論文にまとめられました。怪我の功名で先生のお役にたつことが出来た事件でした。

私は先生から本当に沢山のことを学びました。先生はこれからもまだご活躍を続けられることと思いますが、これからは健康を第一に考えられ、あまり無理をなさらずに永くお仕事を続けていただき、これからも私たち後輩に多くのご示唆を与えてくださるようお願いいたします。



矢部先生の新聞記者的センス

東海大学整形外科 福田 宏 明(40)

初めて矢部先生にお会いしたのは昭和三十年(一九五五年)の四月であった。

その印象は四十三年過ぎた今でも鮮明である。現在の医局のある建物の玄関や北里図書館の前の階段で、新一年生(予科一)に対する信濃町キャンパスのオリエンテーション役を担当しておられた時である。道を隔てただ木造の二階建ての病院本館とろ号病棟が残っていたころのことである。

学生服に三色旗の腕章をつけ、学帽を目深にかぶった先生は、大きな目に光があった。多少の訛があるが、メリハリのきいた、迫力のある説明をされた。いわゆるスポーツマンタイプとはやや違う感じの人だなと思ったが、後に当時五年生(学三)の医学部新聞部員と分かり、成程と得心した覚えがある。まさに“筆もたち、弁もたつ”という新聞記者的センスが典型的にでていたのであろう。

その矢部先生に“再会”したのは、昭和三十七年春、私が一年間のインターン生活を経て整形外科教室(岩原寅猪教授)に入局後のことである。“ああ、あのとき

の”という思い出がすぐ戻り、なにか訳もなくうれしかった。それからいろいろの場面で接点があり、お世話になりながら今日にいたっている。思いつくままに先生との思いでのいくつかを振り返ってみたい。

私が昭和三十九年の秋、二年余の留学から戻ると矢部先生は医局長であった。翌年の出張人事で医局長は背中を丸めてポソツといわれた。“来年の出張だけど、高岡、寒いよ。”文字にするとこれだけのことになるが、一語一語切り刻む様な独特な発音と巨元と口元の微妙なニュアンス—そこに用意周到さとする種の温かさを感じた。

私の初めての症例報告は“胸椎椎体血管腫の全剝治験例”であった。当時何となく岩原教授の影響か(弟子が誤解していたのであろうが)、物事を難しくいう傾向があった。たとえば“…を傍証として提案し、強調する。”などはもっとやさしくいえるのでは、というのが矢部先生の忠告であった。新聞記者の面目躍如たる(これもかたい)ものがある。

年移り私が医局長になった。矢部先生はCampbell Clinicに留学されていた。時あたかも“医学部改革”の嵐の前であった。連日の様に若手の“要求”に対応するのが仕事のような毎日であった。際限なく続く言葉のやりとりの中で、以前に矢部先生から受けた忠告はきわめ

て有効であった。それは「フクチャン、君は物事をそのままうけとめすぎる。その裏になにかあるか別の視点も必要だよ。」であった。正に新聞記者のイロハである「4Ws+1H」のなかの「Why」の欠如を指摘された。

矢部先生の仕事のパターンは夜行性である。興にのつても、のらなくても夜半に及ぶというのがより正確な表現であろう。とにかく粘るのである。教室運営であれ、症例報告であれ、すべての可能性を考え尽くすまで関係者は解放されないのである。名古屋保健衛生大学でもカンファレンスが翌日に終わるといふのは有名な話ではななしてあった。「今夜は矢部先生との話し合いだ。」という、私の家内は、「ああ、それではお帰りは二時ね。」という調子であった。先生は奥様を持ち前の「粘り勝ち」で陥落させたのであろうか。

名古屋で新設医大の創業の苦勞を立派に果たされた先生は、慶応に戻られて水を得た魚の如く、自信をもってふるまわれた。平成六年四月、新高輪プリンス・ホテルに於ける日本整形外科学会学術集会は名実ともに、先生のご活躍の集大成であった。学会の興奮が覚めやらぬ閉会式の夜、私はお礼状を書くべく机に向かった。四十数年にわたる先生との思いでが脳裏を去来しつづつ骨子を以下の様に書いた。「この度の学会は隅から隅まで先生の

お考えがしみわたった形で運営されたことがよく分かる学会でした。読売新聞社の協力を得た、骨粗鬆症の市民講座に始まり、定評のあるワグネル・ソサイエティの響き、会長講演「日本の医療、これでもいいのか」から石川忠雄元塾長の記念講演まで、どれをとっても私学慶応の旗色が鮮明にでていました。慶応に連なるもの一人として、実に誇らしく、有難く、愉快でありました。「この学会の大成功は、慶応のスタッフ、同窓会など多くの人たちの協力があったからこそであるが、それを束ね、生かした矢部先生の企画力、統率力には感心のほかない。しかし、同時に矢部先生の偉いところは些末なことを決して疎かにしないことである。例えば冠婚葬祭で矢部先生に会わないことは極めて少ない。慶大整形の「刑事コロンボ」は常に努める人でもある。

この十年の矢部先生は慶大整形外科の総帥として獅子奮迅の働きをされた。関連大学に対しても陰になり日向になり心配りと応援を頂き、一同を代表して深く感謝申し上げる。これから始まる先生の第二の人生のご多幸を切に祈る。

(2/7/1998)

藤田保健衛生大学整形外科教授

吉 沢 英 造 (41)

停年退職おめでとうございます。時のたつのは早いもので、先生が保健衛生大学から慶應に戻られたのが、ついでこの間のことのように思われます、先生と一緒に過ごさせていただいた名古屋での十三年間は、私にとって有意義で楽しい思い出であり、その間に多くのことを先生から学ばせて頂きました。言いたいことが言え、またそれを真剣に受けとめて相談にのってくれる良き先輩と長年一緒に過ごせた幸せを感じております。

先生と私は性格が対照的で、先生はあまり周りを気にしません、責任感が強く、ご自分の判断力には絶対的な自信を持っておられ、どんな些細なことでも自分自身で目を通し、納得いくまで手を入れられました。また、その都度、何が最重要事項かを的確にキャッチし、とことん始末をつけてから次に移るといふやり方でしたので、予定の時間に遅れることがしばしばでした。その点、私の方は周りのことが気になる方で、自分に自信がなく、悩み、苦しみ、時間だけがどんどん過ぎて行くことが多

く、時間が無くなると落ち着いて集中できないといった具合ですから、先生の性格を何度か羨ましく思いました。

藤田総長存命中の本学は、総長のワンマン経営のもと教職員は管理され、息がつまる感じがしていました。深夜、先生と犬死だけはすまいと誓ったことが懐かしく思い出されます。このような雰囲気の中で、先生は日頃「一例一例大切に」と言っておられ、当時は浮遊母指の再建手術に取り組んでおられました。本学卒業の医師が入局し始めてしばらくした頃、先生の患者さんで浮遊母指の小児が入院し、数少ない若手の教室員が主治医として手術場で全麻下に血管造影を行ったのですが、上肢の血行障害を生じてしまい、上腕切断になったことがあります。教室主催者としての先生の心労は大変なものだったと思います。ある晩、先生は意を決して総長に電話を入れ、事の次第を報告されましたが、案の定こっぴどいお叱りの言葉が総長より発せられ、長々とお説教を受けた後、顧問弁護士からの指示に従うようにという指示が出されたとお聞きしました。その晩、若い主治医から総長宛に出す詫状を先生と一緒に作って作成した後で言われた言葉は、私にとって意外でした。「自分は今まで他人から叱られたことは一度もなかった。しかし、今度総長から叱られてみて、叱ってくれる人がいるというのはいい

ね。何か肩の荷がおりた気分がする。”と言われたので、先生の性格がにじみ出ていて感銘を受け、いまだに記憶に残っております。後日談になりますが、この詫状に総長は甚く感銘を受け、後にお褒めの言葉を頂いたと聞いております。

先生の慶應復帰の話が持ちあがった頃、私にも英国の某病院への就職の話が生じ、例によって迷ってしまいました。一応家族は賛成で、父親の了解も得られたのですが、自分自身は体力に自信を失っておりました。先生に相談したところ、“吉沢が英国に行くなら自分は慶應に戻らず藤田に残る”と即座に言われました。結局、自分自身踏ん切りがつかず、藤田に残ることになり、現在に至っております。先生は慶應の教授に応募する最後の段階で、最大の難関であった総長の了解を取りつけないければならなかったのですが、もしも総長が“NO”と言ったらやめると言っておられました。幸ひ、総長からは“母校に教授として迎えられることは名誉なことです。だめだったら又藤田で続けばいいじゃないですか”と温かい言葉が頂けたので先生の気持もやっと固まったように思います。先生は先生の身の処し方の潔さを感じ入ったものです。先生は慶應に戻ったら自分の手の外科も断念しなければならぬことは充分覚悟されていたものと思います。

慶應の教室再建を第一の目標に、帰る早々にしばらく断っていた大学院生の受け入れを積極的に行って若手の育成に務め、病院長を二期務めて病院の財政再建に並々ならぬ努力をされ、数多くの学位論文を最後の最後まで面倒をみられたのは流石と感心いたしております。優柔不断な私には到底できないことです。

いずれにしても、慶應帰局後十余年、本当にご苦労さまでした。病に倒れることもなく、無事に停年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。これからも益々お元気に活躍いただき、私達後輩にご指導を賜りますようお願い申し上げます。



矢部裕教授の退任に際して

杏林大整形外科 石井良章(41)

矢部裕先生が慶大整形外科教授の任をご健康で無事に果たされたことを心よりお慶び申し上げます。この文を書き始めた時、私達の世代が故岩原寅猪教授が主宰される慶大整形外科教室へ入局したのがつい昨日の事の様に懐かしく思い出されます。それは岩原教授、池田助教、泉田講師という黄金のトリオが活躍されていた時代であり、遅れること10数年、矢部先生を先頭に新しい世代が大きなうねりを形成し始めた時代でもありました。私の入局当時先生はらしいの麻痺手の研修で国内留学されており、その存在は実感の外にありません。帰局後は手の外科の臨床と研究に没頭され、しばらくして医局長を兼務されましたが、個人的に接する機会は少なく私にとっては遠い存在でした。当時の記憶ではたまたま先生の手の手術に助手として入ると5-6時間じいーっと鉤引きに専念しなければならぬので睡魔が襲って辛かったこと、中央手術室で先生が婦長と向かい合って手の症例の交渉をされていた時、婦長がしつこく手術時間を尋ねると先生が「3時間」と答えた所、先生の真後ろに立っていた

悪い後輩が黙って両手で6本の指を高く掲げており、婦長がそれをちらちら見ながら手術時間を記入していたのが滑稽だったので心に残っています。

先生が名古屋保健衛生大(現藤田保健衛生大)の教授に着任後、私が慶応の医局長をしていましたが人事のやりくりが苦しくて先生にご迷惑をかけ、お叱りを受けた事も昨日の事の様です。いずれにせよ手の外科の症例に対する手術、症例の整理、予後調査に驚嘆すべき粘り強さと集中力を持っていた事は鮮明に記憶しております。

この事は後年、藤田保健衛生大整形外科の記念誌の中で、同大の若手医師が「矢部教授の10数時間に及ぶ手術があと皮膚縫合を残すのみとなりほっとした。しかし術者の手がそこで止まり、しばらくじーっと何かを考えた挙げ句、今まで縫合してきた筋膜、腱を全て切り離し再び長時間にわたる手術を再開したのは仰天した。……」と記した事にも、その面目躍如たるものが伺えます。決して妥協を許さない、医学に対する先生の真摯な姿勢を示すものでしょう。

先生が母校へ教授として着任後数年してから先生との距離は随分と縮まった様に思われます。それは教職にある者として顔を合わせる機会が多くなったこともありませんが、四谷から離れて、他学出身者が多い新設医大の中

で道を切り拓いていく、という共通の経験が働いている事もあるでしょう。基本理念はPAIN KEEPERとしての発展を願うという事で一致していました。他大学のポスト獲得に向けて慶応のために随分と力を合わせた事もありました。また私が主任教授に昇進する際にも大変ご心配下さり感謝いたしております。この場を借りて御礼を申し上げます。

今後第二の人生のなかでのOWNに力点を置くくと宣言されているので、当面のライバルと目される私もむざむざと引き下がるわけにはいかないと考えています。先生は今後私達と同じ多摩地区でご活躍されるとの事ですので、さらに親交を深める事が出来ると期待しております。益々ご健勝で楽しい人生を送られる事を祈念いたします。



黒木良克先生 矢部 裕先生 平林冽先生 小生(石井)
(昭和大・藤が丘)



小生 矢部 裕先生
(石井) 糸満先生

恩師 矢部 裕先生

防衛医科大学校整形外科科学講座 富士川恭輔(43)

「光陰矢の如し」といいますが月日のたつのは本当に早いものです。私が慶應義塾大学整形外科教室に昭和四十年四月に大学院学生として入ってから三十年余りが過ぎました。この間風邪らしい風邪も引かずただただ体力だけで勝負してきましたが、最近是新幹線に間に合うように東京駅の階段を走って登ると、呼吸が落ち着くのは列車が新横浜の駅を過ぎる頃であったり、三階迄階段を登ると大腿四頭筋がジンジンしますがそろそろ仕方がないのかも知れません。体重もその頃より10kg以上、胴回りは20cmも増えました。

それにしても矢部先生はお変わりになりません。猫背、ややがに股ですが安定感のある歩容、低いがよく通る声、何でも見通すようなギョロリとした眼、話をする時の絶妙な間、などは昭和四十年私が初めてのOggsとして上目ずかいに拝顔した時とほとんど同じように感じられます。髪が白くなったこと、やや厚めの凸レンズ眼鏡を頻用することなどはむしろ貫祿以外の何物でもありません。私の整形外科医としての第一日目に、矢部先生は

Openとして、入院患者診療記録簿（カルテ）の書き方をかなり時間をかけて指導してくれました。これは私が関連病院の医長をしている時、また大学で卒訓をしている時に、二週に一回全入院患者のカルテをチェックして、記載が不十分なもの（ほとんどがそうだった）は、下級生、上級生を問わず注意してカルテの記載法を指導し、今でも大学はおろか、パート先でもうるさくいつていることに生かされています。常勤のいない私のパート先の整形外科のカルテをお見せしたいほどです。

矢部先生が当時日本全国最年少の整形外科学教授として、名古屋保健衛生大学（現藤田保健衛生大学）に赴任される時、実は私も付いてくるようにいわれました。何かの学会の帰りに夕食をご馳走になった後、人里離れた大学及び病院の建設予定地につれて行って頂き、月夜の中でやたらに広い原っぱの様なところで、棒で地面に線を引きながら「ここが整形外科外来、ここが待合い室」と示しながら「どうだい」といわれた光景は昨日のようです。当時の教室の上層部の意向でこの話は実現しませんでした。後日このことを矢部先生にお話した所「そんなことあったかー」とお忘れになっておられました。助教教授のお話を頂いた時に、講師のままがいい、それが駄目なら関連病院へと御願いしました。「バカヤロー、

いい歳をして俺の考えていることがチョットも分からぬーのカ。自分のことばかり考えて。もう自分のことだけじゃなく教室全体のことを考える歳だ」と大声で怒鳴られました。久々でした。そして少し声を落として「オイ富士川、勉強していたいのはお前だけじゃネー、俺だってしたいんだ。けどもうそういう立場じゃネーングダ」といわれました。私は自分の視野の狭さを心から恥じ、頭が下がりました。

助教教授になり学外活動が多くなるにつれて自分の教授の素晴らしさを実感しました。自分の教授は非常に真面目だと思いました。自分の教授に誇りが持てるのは素晴らしいことだと思いました。病院長時代は教室に戻るのはいつも夜半過ぎでした。多忙さは桁違いでした。真剣に健康を心配しました。教室のスタッフから「教授がだいぶ疲れ気味だ」などと情報が入るとソット見に行きました。私は一生懸命「助教教授」をつとめました。しかし視野の狭い助教教授でしたから微力だったでしょう。矢部先生は余り満足そうな顔をすることはありませんでした。

矢部先生が第六十九回日本整形外科学会学術集会を担当された時は実行委員長を命じられました。教室員は文字どおり一丸となりました。この時も矢部先生の力量を

知り多くのことを学びました。

学術集会終了後、「苦勞さんだったね」といわれました。満足そうな、嬉しそうな顔でした。このお顔と一言で二年余りの苦勞が報われました。今までのご恩の一端でもお返しできたかと久々に涙が出ました。我慢しませんでした。

この学術集会の直前に、防衛医大の教授就任が決まりました。矢部先生の御尽力によるものでした。教授室で御挨拶した時に、「余り気張るな、肩の力を抜け。教授というのは孤独なものだぞ。」と喋って兄貴のような眼でボンとお尻を叩きました。

教科書や文献では学べないことをどれほど教えて頂いたことか、学位を取らせて頂き、助教授にして頂き、教授にして頂きました。これらのことが走馬燈のように頭を巡り、この時何と御挨拶したのか全く覚えていません。ただ、「慶應における整形外科医としての約三十年に及ぶ人生は、矢部先生に始まり、矢部先生に終わったな」と思ったことだけは鮮烈に覚えています。

矢部先生は恐らく生涯現役でしょう。またそうあって頂きたいと思います。

“tension-reducing position” と矢部先生

鴉田 征夫 (44)

手の外科で一連の動物実験がうぶ声をあげた頃の話です。

昭和44年、学園紛争の嵐が全国の大学に吹き荒れました。自分達44回生は2度目の病院出張から帰って、臨床に少しばかり自信を持ちはじめ、手術に検査に危なっかしい腕を振いたくて、うずうずしていた時期です。

そんなある日、突然、小生は池田教授に呼び出され、確か、「変性椎間板におけるsinovertebral nerveの態度」とかいうハウプトのテーマを頂きました。他の仲間もそれぞれテーマを頂戴した筈です。大体sinovertebral nerveなんて神経、聞いたこともなかったので、現東電病院の土方先生にどうしたらいいんですかと泣きつきましたら、「千葉大がもう始めてるけど、染色がチョット難しくくて……」と、どうも一筋縄では行きそうになく、途方に暮れておりました。

天の助けってあるものです。我が慶應義塾にも学園紛争の余波が押し寄せて来たのです。「そうだそうだ、足の裏の米粒（取っても食えない、取らないと気持ち悪い）

みたいな学位論文なんてやめっちなまえ」と、44回生は大学院生を除き、全員並んでションベンしてしまいました。

その後約1年間、ある者は籠から放たれた小鳥のように、ある者は鎖を解かれた猟犬のように、臨床にゴルフに夢中になりました。……が、小鳥でも犬でも、ひとしきり飛び回り、走り回ってはしゃぎ過ぎるとおとなしくなるように、1年もすると、夢にみた自由気まま、自由奔放なんて、何だこんなもんかと、何やら物足りなさを感じはじめました。……かといって、何かやってみようかと思っではみても、悔しいながら、少なくとも若輩の自分には、何をどうやっていいやらさっぱり分からない。そうこう、うじうじしてる時に、見透かしたように、矢部講師が「腱」のテーマをちらつかせながら、何喰わぬ顔で「獲物」を待っておりました。「腱」のほうが、sinovertebral nerveなんて在るのか無いのか分からないう、か細い神経より、少なくとも肉眼でハッキリ見えるし、臨床にもピタシ直結。よしこれで行こう！なんて考えて講師室の戸をノックしたのが運のつき。飢えたダボハゼのように、あえなく矢部講師に釣り上げられてしまいました。1年前にこのテーマをもらっていったんションベンした山屋君との協同研究ということになりました。予備実験が早速始められました。矢部先生のアドバイ

スで実験動物はニワトリで行こうと決定。手近の白色レグホンやら名古屋コーチン等、手当り次第に腱縫合実験。ところが成鶏は腱が硬過ぎ、月齢もまちまち、雄鶏は朝一番のコケッコウで周辺家庭のブーイング。たまたまこの時期に伊勢原協同病院に出張。母体の農協の売り物、食用幼若ブロイラーなら、容易に手に入り、月齢一定、手術も容易、実験後は病院職員のチキンカレーにも利用できる、これの雌に決まり。

しかし、腱縫合実験はどんな縫合法を用いても、ピンで腱固定するVerdan法でも、ワイヤーで腱を減張しても、結果は悲惨でした。腱に関する代表的な実験的研究、Lindsay, Potenzaの縫合部の組織写真は、癒着はしているものの、我々のよりずっとましです。3人で額をよせあって、話しあって、「この写真で見ると、下半分欠けてるよね、半分しか切っていないんじゃない？キレイ過ぎるヨ」なんて冗談から、まずは腱の部分切断から始めることになりました。

この実験で腱に自己修復能力があることは、分かっていたのですが、肝腎の完全切断腱の縫合実験は文字通り完全に行き詰まりました。これからやろうとしている実験も、Lindsay, Potenza, Peacockらがこれでもかと、異種腱移植実験に至るまで、10年以上も前にやっています。失礼

ながら矢部先生は、どうもこれらの論文を知らなかったようです。それ以前から感じてはいたのですが、矢部先生は、まず白紙の状態で自分でとことん考える主義で、当時の先生ほど文献探さない、読まない講師もいなかったと思います。見上げた根性と尊敬はしておりましたが、この際、こっちにとつてはいい迷惑。「とんだトバッチリ受けたもんだ。ええい、ここまでよ、2度目のションベンしちまうか」。

ともあれ、術後、腱縫合部にどうしたら tension がからないようにするかがポイントになりました。素知らぬ顔して、離れた中枢側で切ってしまう手もありますが、いくら実験でも美学に反します。そんなある日、矢部先生は、影絵のキツネのような指をして、「このカッコでギプス固定してみろよ」。ニワトリの3本の深指屈筋腱はその中枢で1本になり、人のは筋腹で分離していない点に着目した専門医ならではの卓見でした。今度ばかりは、この固定肢位についての文献は見出せませんでした。それでも、ガタガタとギプス足を1日中踏み鳴らすあいつら鶏共に通用するか一抹以上の不安がありました。術後2週の腱鞘温存群で、ギャップはわずか、まさかの癒着の全くない “no man's land” 縫合腱の組織標本が出来たのを皮切りに、術後1〜8週にいたるまで次々に

同様の作品が得られました。

その後、20年余り続くことになった指屈筋腱に関する実験的研究のスタートでした。

この手指の肢位を “tension-reducing position” と名付けました。この英訳はUPI通信記者に相談した上でのもので、英米語として違和感は無いです。

他人の考えを見聞きする前に、まず自分でとことん考える姿勢は、矢部先生の大切な教示として、学問に限らず、もって肝に銘じております。・・・ただ、時間の制約から、それも云ってられないことの方が多いのは、時代が忙し過ぎるのでしょうか、自分の能力不足でしょうか。

矢部先生、ご指導有り難うございました、そして超多忙の40年間、ご苦労さまでした。

矢部教授の御退官にあたって

慶應義塾大学整形外科 鈴木 信 正 (48)

私が慶應義塾大学医学部整形外科学教室に入局したのは昭和四十四年ですから、はや二十八年を経過したことになります。過ぎ去った日々を振り返ってみると教室で出逢った多くの先輩、後輩の事、出張病院での事などが思い起こされ、本当に懐しく思われます。

学生時代に既に整形外科に進路を決めていたので、授業にはほとんど出席せず、整形外科の講義は、池田教授と野口講師の講義を二、三回ほどどうかがった記憶がある程度です。矢部教授(当時は矢部講師)との学内での出会いは、ポリクリ実習における口頭試問だけであったように記憶しています。最近では、学生の出来が悪いと大変ご立腹されると、しばしば藤村助教から聞き及びますが、当時は出来の悪い私どものグループにも大変穏やかに、優しくしていただきました。にこやかに再試だよと宣告されたのです。学校外ではさほど珍しくなくお目にかかったような気がします。私どもが雀荘でさぼっている、午後の中頃にどやどやと大人の四人組が現れる。たいてい伊勢亀先生と矢部先生を含んだメンバーでした。

これまでにお手合わせいただいたことではないので、矢部先生の麻雀の腕はどれほどなのか存じ上げません。

私が入局して二年後に、矢部先生は新設の名古屋保健衛生大学に教授として赴任されることとなりました。その赴任前に、土方先生が「教授としていくのなら腰椎前方固定ぐらい出来なければ困る。一例、術者となっていたできます。」とおっしゃり、第5腰椎陈旧性骨折に対する前方固定が矢部先生を術者として行われました。私は第三助手をさせていただきましたがどんな風に進行したか全く記憶にありません。おそらく土方先生がしゃべり続けていたのではないのでしょうか。後年、私が脊椎骨折の長期経過を調べた際、その患者さんを診察する機会を得ました。症状は全くなく、魚屋さんを営む上で何らの症状もないとのことでした。「L5/S1」の2椎間固定でしたが、極めて良好な骨癒合が得られていました。

その後、私が出張病院をまわっているとき、矢部教授は神出鬼没で、行く先々でお会いしました。そのたびに手術の助手をさせていただきました。手の外科の手術は座って行うこともあって、助手をしているとどうしても居眠りができます。私も何回か不覚をとったことがあります。どなたかは居眠りをしてよだれを垂らしたようです。そのせいか、手術を始めるとき矢部教授は「鈴木よ、

寝てもいいからだれは垂らすなよ」とおっしゃるのでした。

昭和六十一年八月に主任教授として慶應にお帰りになりました。まさに仕事の鬼のお姿を拝見させていただきました。第六十一回日整会会長として、準備にご腐心なさっているときは慶應病院長でもあられ、私ども鈍才の数人分の仕事量をこなされました。学会における会長講演の「日本の医療、これでよいのか」は誠に核心を突いたお話でした。在任中の学位授与数は一一七名の多数に達しております。御退官前の一年間では、四〇件以上の指導に当たられ、内容に関して妥協を許さず、実に詳細に校閲されたことは並の人間には到底出来ないことと感嘆、敬服を通り越し、ただ唾然とするばかりでした。

御退官後はごゆっくりなさることに存じますが、ますます日本の医療改革にご尽力いただくようお願い申し上げます。

矢部教授と名古屋保健衛生大学と私

高橋 正 憲(48)

私の保健衛生大学赴任期間は入局して7年目の昭和51年7月から2年間であった。保健衛生大学は開校して6年目であり、先任の三笠講師から矢部教授が大変な思いをして初めてキynchャーの手術を行ったなどの話しを聞いて、期待と不安の気持で名古屋に向かった。矢部教授から「とにかく業績を全て書くように」と言われ、博士論文を書けば学位が取れることを前提に無理やり講師にしてもらった。その頃の保健衛生大はまだ卒業生が出ていなかったため、矢部教授、吉沢助教、斎藤講師、中川講師と私の5人で本院の80床と分院である坂種病院を担当し、各先生共かなり多忙であった。そのためスタッフ全員が顔をそろえるのは週1回のカンファレンスを兼ねた医局会のみであり、その日には午前様になることもしばしばであり、矢部教授以外のスタッフは魔の水曜日として全員が恐れていた。各先生方が忙しい為、教授回診と言っても、夜遅くなって教授一人で包交車を引いて患者を見に行くのもしばしばであり、私が行ってからは包交車を押す役は私の担当になった。駆け出しの私まで

医学部や衛生学部の講義を担当させられ、今考えると何を講義していたのか学生が可愛そうである。教授は教室に寝泊りすることも多く、ほとんど病院の食堂で3食食べていた。そんな多忙な中にも、時には坂種病院の裏の『とっちゃん』で炭火焼きのホルモン焼きで腹ごしらえをして、矢部、吉沢先生の音頭で近くのマージャン屋へ繰り出すこともあった。吉沢助教授は負け込んで来ると『ご焼香』を唱えて役払いをするのが常であった。教授は週末には洗濯物の詰まった黒い大きなカバンを持って大宮に帰り、月曜の朝には洗濯された下着を詰めて新幹線で名古屋に戻るのが週課であった。名古屋市内は、教授自ら床から雨が降ってくるポロリボードを運転して移動することが多く、ある時、挙動不審でお巡りさん呼び止められ、トランクからは貴い物のウイスキーが何本も出てきて盗品と間違えられ職務質問されたとのエピソードもある。

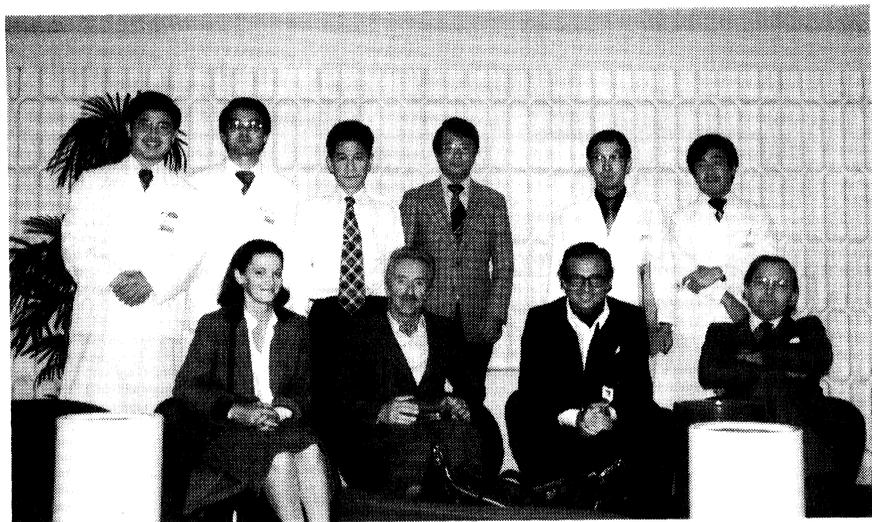
ともかく、当時の医局は教授自ら『気違い部落』と呼んでいた。

名古屋地区では『手の外科』は名大分院や液済会病院が中心となって積極的に手術や学



『保健衛生大学整形ファミリーの集い』
矢部教授の奥様を始めとして、5名のスタッフの奥様方と10名の子供達が初秋の晴れた日に名古屋城に集う

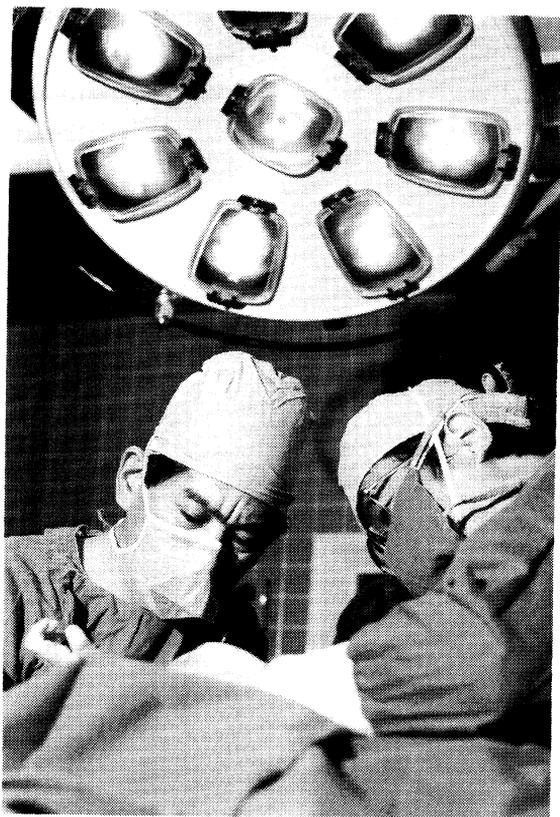
会活動をしていたので、新設の保健衛生大が手の症例を集めるためには矢部教授は大変な努力をされた。「ごみ溜めの中から一つでもキラリと光る物を探せ」を口癖に、どんな症例でも自分で手術し、患者と一対一で時間を掛けて後療法を行い、良い結果を出して患者も矢部教授も喜んでいた。対外的にも、中部地区の『手の外科症例検討会』を矢部教授や三浦教授が中心となって発足させ、他大学との交流を深め、次第に保健衛生の手の外科が患



京都のSICOTに参加したフランスのマイクロサージャリーの大家であるミッション・メルレ・フーツェ氏が保健衛生大学を訪問。翌年、国際手の外科学会の際には矢部教授、山内教授らとナンシーを訪問した。

者にも学会でも認められる様になった。矢部教授の手術は、今でも変わらないと思うが『走りながら考える』な
らまだ良い方で『止まって考える』ことも多く、時には
『後戻りしながら考える』こともあった。麻酔科の新井
教授は時間に厳格で有名であったが、最初の頃は矢部教
授にも嫌味を言っていたが、次第に矢部教授の手術日に
は予定の手術時間に関係なく一日中麻酔を掛けて下さる
程に諦めていた。新井教授も矢部教授の手術に対する情
熱に心動かされる物があつたのであろうと考える。手の
外科のことを何も知らない不器用な私の手術にも、額に
しわを寄せながらも根気良く付き合っ下り、マンツーマン
で2年間ご指導いただきました事に感謝致しております。
また、教授会でも「整形外科はバックボーンを扱うの
のであるから医学の中心である」などの発言をされ、
学内における整形外科の重要性を強調される等、矢部教
授の人生哲学も2年間に渡りたき込んでいただきました。
それらが、その後の私の生き方のバックボーンとして
今でも私の中に脈々と流れている事に深く感謝致しま
す。

ポリクリ時代、入局当初、矢部教授には大変ご迷惑を
掛けた私が、何故名古屋に行くことになったのかは、今
でも分かりません。



額にしわを寄せながら私の下手な手術を忍耐で見守る
矢部教授。

(続)「これエ本にしようよ」

—整形外科後療法ハンドブックのその後—

片田 重彦 (51)

1993年度の「ふるさとによせて」に書いた、「これエ本にしようよ」の続編を書きます。

さて、前回は矢部教授の表題のような一言が誘い水となり、講師だった私が一念発起して本の原稿を書き、出版社に売り込み、見事、「整形外科後療法ハンドブック」という単行書を発行したところまでの話でした。

この単行書の奇妙なことは矢部、吉沢両教授をおしつけて私が筆頭著者になっていることです。これは矢部教授の厳命、「片田君がほとんど書いたのだから、著者名は片田、吉沢、矢部というようにしなさい。」に従った結果であったということも前回述べました。

当時は著者の順番のことについてはあまり考えなかったのですが、二人の教授を下にの著書名ではどうも私の座りが悪くなってきました。国立小児病院に赴任してから改訂第2版が出版されましたが、その折に矢部教授に、「先生、どうも片田、吉沢、矢部の順では名前の座りが悪いから、矢部、吉沢、片田の順に変え

ましようよ。」

と申し出ると、

「何をいうんだ、この本は片田君がチャーリッヒのシュライバー教授のもとで学んだことを日本に紹介した我が国で初めての後療法の本だ。他のいいかげんな名前だけの教授による編集本とは成り立ちが違う。私はそれに参加させてもらっているだけなんだよ。」

と答えて、さらに

「おかげで定期的に南江堂から印税が振り込まれてくるので、ワイフにね、あなた最近、随分本の原稿をお書きになるのね、とほめられるんだ。」

ともおっしゃってウインクするのです。

それもそのはずで、この本は改訂第2版を含めて12回の増刷を繰り返すという医学書としては驚異的な売れ行きで、97年について南江堂の本では初めて第3版が出版されることになりました。

私の肩書はかただ整形外科院長になりましたが、さらに梶原助教授、中川教授を加えた強力な布陣となりました。下に3教授を従えたかたちの著者名でますます私の居ごちが悪くなったのですが、これはこれでもう押し通すことになりました。また増頁のため、約350頁の大部となりました。

この第3版の原稿のなかでは矢部教授のものが一番早かったそうです。矢部教授は慶応の教授として相変わらず多忙のはずでした。その中をいち早くこの本の原稿を書き上げて送って頂いたという話を編集者から聞いて、矢部教授がこの本に深い理解を示しているのだとの感を深くしました。

前回の私のこの原稿で「矢部教授の原稿は遅筆で有名な」との箇所はこの機会に取り消したいと思います。

さてこの「整形外科後療法ハンドブック」が好評な原因は、編集者から聞いたところによると、この本は整形外科医だけでなく、リハビリテーションを直接担当するPTに広く読まれている本なのだそうです。

現代の整形外科手術が発展してきた1970年代から整形外科の後療法が従来とガラリと変わり、機能的後療法に変化しました。手術後に外固定を行わず、早期から関節を動かすという機能的後療法が主体となったのに、その方法を具体的に示した教科書が日本にはなかったのです。

私がAO法と人工関節の本場であるスイスで目にした機能的後療法を日本にもちこんだこの本はやがて我が国のPTの必携本としてまたPTの教育用の教科書として制定され、日本の整形外科に携わるすべてのPTを育て

ていくことになったそうです。

このたび理学療法士学会の整形外科部会が成立して、その第1回の学会の講師として、講演を依頼されました。その学会の会長は私がこの本の初版を書いたときに藤田保健衛生大学のリハビリテーション科で議論を戦わせ、協力してもらったPTのO君です。演題は「整形外科手術後療法のマニユアル化とその問題点」として講演する予定です。

矢部教授には退任後も先生の大好きな手の外科手術をさらに発展させ、数年後に予定されている改訂第4版のときにもぜひ手の外科手術の後療法の詳細を書いていただきたいと思えます。



15年前の矢部教授のお姿

松 林 經 世 (53)

少し間をおいて後、「めっせん」という声があった。場所は当平塚市民病院の手術室、周りでは手術終了とばかりに弛れた雰囲気、時刻は午後8時過ぎのことである。

そして手の高度の癢痕拘縮になされたばかりの植皮術の見事な術部は矢部教授御自身の手で抜糸されてしまった。助手をさせて頂いていた私からみればすばらしいと思えた手術も教授は納得なされないらしい。雰囲気は一気に凍り付くようになる。中村洗部長のお願いで名古屋保健衛生大学から月に1回だけ矢部教授が金曜日に手の外科の特別外来を担当されていた時期のことである。

午後1時過ぎに沢山の荷物と鞆を下げてやや猫背の姿勢で当院に来られ、外来をされる。この外来が決して手を抜かれない懇切丁寧な物なのである。患者さんが充分納得されるまで繰り返し説明され診察にも省略はない。当然患者さん一人に要する時間も長くなる。一週間さぞフルに働かれ、お疲れであろうにと思うのだが患者さんの前ではそんな様子は微塵もみせない。午後4時を過ぎると手術室から「いつ外来が終了できるの?」「手術は

何時から?」と矢の催促である。ようやく外来を6時前に終了し、そのまま手術室へ直行してすぐに加刀。そして無事に手術が終了したと思った矢先の出来事である。私をにらむナースの眼が怖い。今後1週間は針のむしろだなとあきらめての心境である。さすがに教授も何かを感じておられるらしい。「手洗いを熊ちゃんに頼んで他の人は帰っていいですよ」とおっしゃる。熊ちゃんてなんだ?。熊ちゃんのこと何故、教授が知ってるの?二人の関係で何なの?もう混乱して判断は出来ない。

午後10時前に無事に手術は終了したが、その間、一過性の仮眠状態(早い話が居眠り)に陥った私にむかって「忙しいかい?。疲れるもんなあ」と同情(?)してくださる。さらに「俺のオベの助手はよく寝るよ。あの伊藤(恵康)も寝たことがあるよ」と追い打ちがきた。もうなんとも返事出来なかった。そして最後に「俺も歳かなあ。先週オベが少し続いたら疲れちまって。再接着術が2例連続しちゃってね。彦坂(一雄先生)と2人して26時間ばかりオペしたら結構疲れたよ。」

26時間で、この先生の1日は何時間なんであろうか。先生とは人間なのか、それともエイリアンなのか?ただ呆然とするばかりでした。

平塚で一ヶ月に一回、教授に直に接して、いかに患者

さんに誠心誠意対していくべきか、何事にも手を抜くことなく努力することの偉大さをお教え頂いたこと感謝にたえません。もっとも先生と同じことが出来るぐらいなら苦勞がありませんが。

最後に、矢部先生いつも全力疾走されるお姿にはいつも感嘆しきりですが、お身体にも少しは氣を使って下さい。

〇、教授は若い頃6ヶ月だけ当市民病院へ出張された折に看護婦の熊坂さんと一緒に勤務された時期があって名前を覚えていただけのことだそうです。



矢部先生と私

東京女子医大膠原病リウマチ痛風センター

斉藤 聖 (54)

私はまだ慶應の整形外科教室に在籍しているときに、矢部先生が教授として赴任されて来られました。程なく、私は稲城市立病院に転任致しましたが、その際、君は基礎を勉強してきたので、これからはリウマチを勉強しなさいと矢部先生からお話を頂きました。さあ、それからが大変でした。確かにリウマチと言う病氣は知っておりましたが、実際の患者さんをたくさん治療した訳でもありませんし、今迄は、基礎の研究といっても、O Aの研究を中心に行なっていましたので、リウマチに関しては全くの素人でした。

先ずリウマチ財団に入会してリウマチ登録医をとり、次いで、試験を受けてリウマチ認定医をとりました。これで一応リウマチ医という事になりましたが、当初は、何も知らない、何もいじれない、何もわからないリウマチ医であったと思います。しかも、リウマチの成因や基礎的な事象は奥が深く、理解に困難を究め、何度となく修得を放り出しそうになりましたが、私にも意地があり

ました。矢部先生にリウマチを勉強しますと一度お約束をした以上、何とか一人前になれる様に頑張ろうと思いい無我夢中で勉強しておりました。

平成三年になると、矢部教授より、東京女子医大膠原病リウマチ痛風センターに行ってみないかとのお言葉を頂きました。最初は、非常に躊躇致しましたが、やはり研究に魅力があり、稲城でも家兔を飼って毎日水や飼料を与えながら実験を行なっていました。大々的に研究できるとの矢部先生のお勧めによって東京女子医大に行く決心を致しました。幸い、女子医大に参りますと、センターの所長であった故柏崎禎夫教授には大変可愛がって頂き、又、私なりにリウマチの手術や研究を行ない、ようやく曲がりなりにもリウマチ医として現在に至ることが出来ました。

センターに移りましてからも、常に矢部先生から御氣遣いを頂いており、豊田、榎本、南雲、堀内先生のような優秀な若手の先生を送って頂くばかりでなく、桃原茂樹先生と言う貴重な人材を快くセンターの一員にしてください。ただくなど大変お力添えを頂きました。

矢部先生にはこのような御指導ばかりでなく、人生の先輩として、人の和、人に対する気配り、人への尊敬などの対人関係の大切さを、時に情熱的に、時にお叱りを

受けながら、教え諭して頂く機会を度々頂きました。この貴重な先生の教えを私の糧として、一生大事にしていきたいと思えます。

矢部先生、心からお礼申し上げます。今後も先生のご活躍を心からお祈りいたします。お体をご自愛頂き、益々、ご発展されますようお祈りいたします。



矢部裕教授と大学院の思いで

中村俊康(67)

医学部4年生での整形外科最初の講義は泉田前教授の「整形外科とは」で、学年のノート係(学生は講義に出ないので、ノート係が出席して、試験対策虎の巻を作ることになっていました)であった私は別館臨床講堂でわずか3人の級友とともに拝聴していました。昭和61年1月のことです。その後、講義は進み、昭和61年秋には藤田学園保健衛生大学から着任されたばかりの矢部新教授の臨床講義が始まりました。出席はやはり3-4名前後でした。授業開始直後、ほとんど人のいない臨床講堂に入っていた矢部教授は「何でほとんど出席していないんだ」とお怒りになり、「藤田では全員出席していた」と叫ばれました。これが矢部教授と私の最初の出会いです。授業はよくまとまっていますが、国家試験などまだずーっと先のことと思える我々にはあまり面白みのあるものではありません。そのことをお話しすると、さらに激怒されていました。

入局する際、整形外科にするかを迷っていた私はなんとなく同級生の勧誘により整形外科に入局し、矢部教授

の入局に際してのご説明と、それに全く相反する卒訓先生のお話を拝聴しました。それが大学院の再開のお話でした。

そもそも整形外科大学院は44回生の故新名防衛医大教授、水島済生会中央病院整形外科部長を最後に閉鎖され、23年がたっていました。そこへ矢部教授は大学院再開を宣言されたわけですから、かなりの困惑があったようですが、そんなことを私たちは知りません。ほとんどわからないまま、フレッシュマン生活を終え、川崎市立川崎病院に出張した私は毎日の臨床、手術に限界を感じ、そういうえば大学院ってあったな!と思ったわけです。当時、先輩方は日中の勤務を終えた後に、夜医局にいらっしやって実験を行っていました。夜の医局長を自認される「こわい先生」もいらっしやいました。その姿を見ていて、自分にはとてもできない、研究に本腰を入れる一定期間を持ちたい、さらに大学の臨床をフレッシュマンの目ではなく、3年目の目で見たい、と思いました。さらに、毎日たくさんの手術をさせていただけでも、なんとなくやつつけ仕事になってしまっているな、という感覚もありました。再開を宣言されてから2年間誰も大学院に入學していなかったことに不安を感じながら、平成2年の1月に矢部教授にアポイントを取り、相談し、大学

院の入学試験を受けてしまいました。語学試験を受けた後は面接ですが、面接官は矢部教授でした。得意な科目はとの質問に「薬理学でした」と答えると、「薬理じゃこまるなあ。そうだ、おまえは解剖が得意だろう」「いえ、解剖はCでした」「いや、きっとお前は解剖が得意だ」。次に、「研究したいことはなんだ」と聞かれたので、当時興味を持っていたバイオマテリアルですと答えたところ、「なに、バイオメカか」「いえ、バイオマテリアルです」「バイオメカか」「はい、バイオメカです」と答えた私の運命はバイオメカを研究することに決まったのです。私の感想は「決めているなら聞かないでほしい」でした。さらに、教室の研究の礎になるために大学院は必要であるという訓辞もされました。

このようにして、矢部教授の大学院第1号として入学した私の研究テーマが決まったのは平成2年6月のことです。教授回診の終わり頃、1号棟5階の待合い所で矢部教授が「Intrinsic muscle」「指伸筋機構」「三角線維軟骨複合体(FHCC)」のどれがいいか決めなさいといわれたのです。どれも手に関係したテーマでした。相談する相手がほとんどいなかった私は、井口先生が「Intrinsic muscleは難しいテーマだったといわれていたの思い出して、なんだかよくわからない一番最後のFHCC。

てやつが一番簡単そうだと思ったのでした。「先生、FHCCとかいうやつにしたいのですが。」「じゃー、それだ」とおっしゃった矢部教授は今も手元に残っている慶応の便せんに「研究テーマ 手関節三角線維軟骨複合体」と鉛筆書きされたのです。それから図書館に行き「FHCCを調べたところ、かなりのトピックであり、慶應で主催した手の外科学会でもパネルディスカッションで取り上げられ、他の国内外の大学で研究、先行されているという事実がわかりました。手の外科の先生には「北海道大学やN大学分院、聖M大学、Y口大学がもうかなりやっているから、何も出ないんじゃないの」といわれる始末でした。しかし、矢部教授は強気でした。その根拠は「誰の言っていることを聞いても、わしを納得させたものはない。おまえもわしを納得させる様な結果を出せば大丈夫だ」(事実でしたが、大学院に入学したばかりの私にはかなりこたえました)。その納得させられないことは回内外中の「FHCCの形状変化のことでした。これを明らかにすれば、きっと許してもらえないと感じました私は、FHCCの形状変化解析の研究に突入していったわけです。研究は戦争です。武器がないと勝てません。特にこっちは後塵を拝しているわけですから、並の手段では勝てない。武器がなければ、ない知恵を絞り、武器

を作るしかありません。このことも矢部教授に教えられました。

ここからは矢部教授が既に「あゆみ」にかかれたことなので、簡単に触れます。当時慶應は機能解剖やバイオメカをするための多くの機器をCPM研究費で整備していました（これも矢部教授の業績ですが）が、肝心のマテリアル（屍体標本）がありませんでした。学生用の遺体を8月に解剖させていただきましたが、E.C.O.の構造など全然わかりません。まして、その動きなど全くつかめません。そこで、矢部教授に「川崎医大の解剖学教室にどうも柔らかいご遺体があり、それを使って広島大学が研究しています。広島大学が使えるのだから、お願いしますれば私にも使わせていただけられるかもしれません。一度、伺ってみたいのですが」と伝えたところ、矢部教授は即座に広島大学の生田教授に電話をかけられ、あいにく生田教授ご不在と電話にでられた越智現島根医大教授から詳細を聞き出され、さらにその日の内に川崎医大の解剖学池田教授に電話をされたのでした。ちょうど、山口の宇部でマイクロサージェリー学会があるから一緒にいくぞ、と矢部教授と二人で川崎医大を訪問、池田教授に私を紹介され、矢部教授は学会に向かわれました。その際、解剖遺体処理法を修得し、これを導入したいと

慶應の解剖学教室に小川講師にかけあって頂き、川崎医大方式よりも教室にメリットがある新鮮屍体の供給が可能になったのでした。この時に矢部教授の行動力、即断力を感じ、畏敬の念すら感じました。（新鮮屍体を研究に使用できるようになったことは、教室にとってどんなにプラスになったかわかりません。）

矢部教授からいただき、大事に保管しているもう一つの便せんがあります。藤田保健衛生大学に出張になる際に骨間膜の機能解剖の日本語論文を提出し、おこられたものです。「論文の書き方、内容とも推敲が不十分である。インストラクターになったのだから、もっとしっかりしたものを持つてくること。骨間膜は上腕尺骨と橈骨手との間のdynamic stabilityに複雑に関与し、単に軸圧、牽引では片づけられない。このことは今後の宿題であり、今回の論文にこのことや、骨折、脱臼、骨切りについてふれる必要はない。W.Komである。もう一度、よく推敲して持つてくること」。今もこの文章をみながら、名古屋で自分を叱咤しています。（叱咤しすぎて、ちょっとめげています。なお、名古屋にきてみて、矢部教授の口癖である「えーか」「まあ、ええわ」が名古屋弁であることがわかりました。）

どうにかこうにか研究も出来上がり、論文を日整会誌

に投稿、学位をいただきました（その間、教授に会わないように逃げ回ったこともありましたが）。

さらに後輩の優秀な大学院生が着実に入学しています。大学院のシステムはこれまでのところ他の研究機関に学内留学（私と名倉先生（71）が慶應理工学部、山崎信寿教授の研究室に2年間、大津寄先生（70）と古谷先生（70）が病理学教室）、国内留学（井幡先生（68）が国立精神神経センター、楊先生（69）が国立がんセンター、松崎先生（72）が昭和大学、して、研究手法を学んで、（盗んで）くるという形態をとっています。評価に耐える大学院かどうかは、今後われわれが教室にどれだけメリットになれるかにかかっていると思います。それにはわれわれ大学院の卒業生がどれだけ研究指導できるかとそれぞれの精進が必要です、いつまでも他の研究機関に頼るだけでなく、自前の研究を行い、大学院生同士や大学院だけでなく教室の研究している先生とのジョイント、さらなる発展という夢も広がります。矢部教授、ありがとうございます。そして、ご苦労様でした。これからもがんばらせていただきます。



ふるさとに寄せて

「みやらくもん物語」(注)

鳴河 みどり(43特)

近況

富田 恭弘(37)

神奈川県国保と支拂基金の審査員をしていますので、同じ審査員の松井先生(31回) 赤坂君(37回) 池田君(38回) 齊藤(進)君(46回) 小林(信)君(47回) 佐々木君(52回) 倉林君(53回)と毎月顔を合わせます。飲み会は毎月、たまにはゴルフもやります。おかげで若かりし頃の医局の雰囲気味わえます。特に松井先生は医局長時代のノリで「オトミ」とよんでくれますのでうれしいです。同じ世代の矢部教授(36回)が今回で退職とさきますと、つくづく時の流れを感じます。



敬愛する矢部教授ご退職にあたり、『ふるさと』にはじめて寄稿させていただきます。

私が整形外科を選んだきっかけは、国家試験のため受講した岩原教授の講義でした。名調子の講義に感銘を受け、整形外科に興味を覚え医局を訪れました。矢部先生、内西先生方のお話しから、整形の『手の外科』は女性に一番適していることを初めて知りました。医局には女子医大の先輩の野間先生が『手の外科』をされているし、大河内玲子先生も今ドイツ留学中とのことでしきりに勧誘され、純情な乙女はすっかり乗せられてしまったと云う訳です。

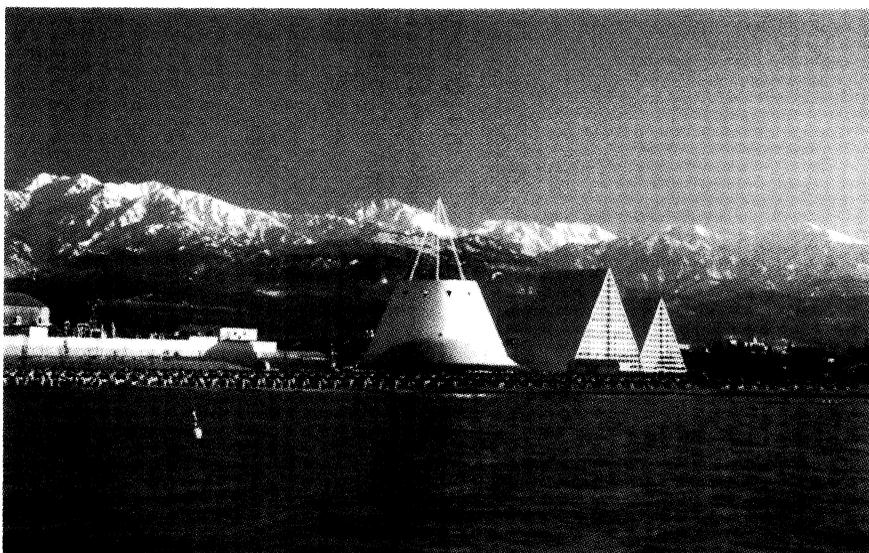
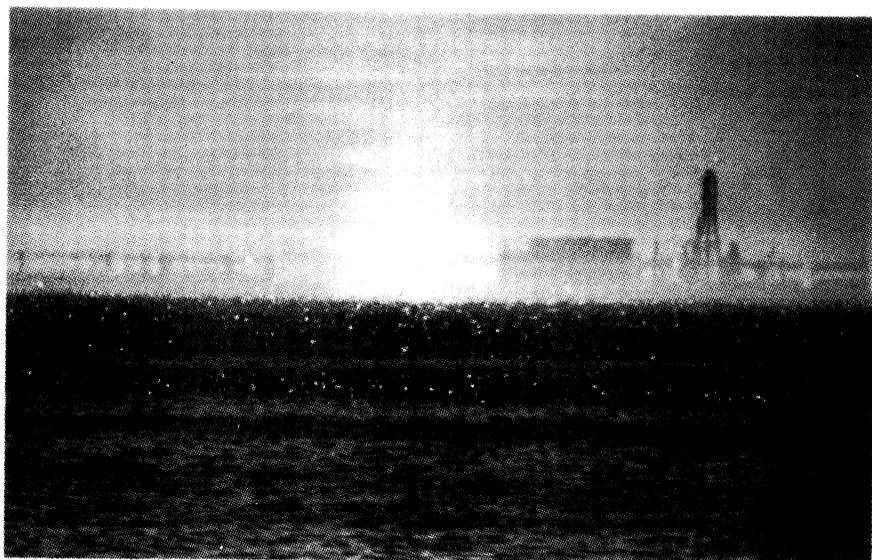
フレッシュマン生活は、中学から大学まで女子だけの温室生活から一転して紅一点の医局研修で、恐れ多くもあの岩原大先生から、『みどりちゃん』と呼ばれて恐縮しながらも嬉しく、矢部先生はじめ諸先輩先生よりの暖かい叱咤激励のご指導を受けながら無我夢中でした。この間、矢部先生の元祖『手の外科班』での抄読会やおペにも加えて戴いたりしていたので、てっきり『手の外科』



の方に進めるものと思っていました。ところが出張病院から帰局した4年目の時、池田教授から与えられたテーマは、なんと私の全く苦手の生化学でした。何も分からずただ毎日夜8時から夜半まで実験室で過ごした結果は、『有意の差なし』でした。『学位は優秀な論文に与えられるものである』と自分勝手に判断して論文をすっかり放棄いたしました。でもこの研究班のお陰で、川崎市立川崎病院の菅野先生に拾っていただき就職できたことは、これぞ正しく『有意の差あり』というものでしょうか。この整形外科は、関節リウマチのオーソリティーであり、優れた指導力と温かなお人柄の菅野先生が部長で、

出張病院として人気が高く、優秀な先輩後輩の先生方でもいつも活気にあふれていました。R A患者は、今までの病院でも寝たきり状態であったのが、菅野先生の『今、現在、痛みのない状態で生活できることが大切』というポリシーのもと、次々と歩いて退院されたことに大変感動しました。私は、短期間ではありましたが、矢部先生のご指導によるわずかばかりの知識を思い出しながら、また出張でこられる先生方のご指導のもとささやかに『手の外科』にたずさわっていきました。勉強以外では堂々と一人前にわがままでした。充実した独身貴族を楽しみながら、8年間も川崎病院で勤めさせていただけなのは、菅野先生のお陰といまでも心から感謝いたしております。

こんな不肖の娘だからこそ、岩原先生は私を心配して下さっていたのでしょうか、以心伝心の不思議な体験をしました。川崎病院に勤務して間もなくのある朝、岩原先生から電話があり、『みどりちゃん、話があるので鳥山に遊びにいらっしやい。』という夢をみた。と医局で笑いながら皆に話をしました。ところがその日の夜、自宅に夢と全く同じ電話がかかってきたのです。今の若者風というと『エッ、ウツソー、シンジラレナイー!』でした。早速、ドキドキしながら重い足取りで、入局挨拶



みやらくもん物語

撈以来の烏山を訪れますと、大先生は畑仕事をしておられました。用件は、思っていた通り学位とついでに結婚についてでした。『し泥、も泥』の中で、お説教とたくさんの手作り野菜をお土産に戴いて帰りました。学位は自分の能力次第であると自覚していましたが、なんとなくその後も『足の裏の飯粒』をつけたまま歩いてきたような気がします。月日がたつうちに、結婚は縁のものと気にならなくなり、『足の裏の飯粒』もだんだん乾いて何処かに消えて無くなっていました。

川崎病院退職後は、自分を鍛えようと『包丁一本晒しに巻いて』と旅にでて、従兄弟の黒磯病院、女子医大先輩の阿部医院、同期生の福田整形外科医院の手伝いと様々な貴重な経験を積みました。そして、縁あってついに束縛のない優雅なシングルライフに終止符を打つことになりました。引越準備中、突然父がクモ膜下出血で倒れたのですが、その場所から電話で私に『式を決行せよ』という強い希望を伝えてきました。病の床にありながらたつての願いだっただけでしょう。お世話になった方々にご挨拶廻りする時間もなく、急遽東京を離れるその日、岩原先生にお電話しました。高千奥様が出られて先生の寝室に切り替え『お電話ですよ』といったら『みどりちゃんからだろう』と言われたので奥様は大変驚かれたそう

です。電話は玄関にあり、寝室とは離れて全然聞こえないということでした。父と恩師に心配されていた結婚もまた『有意的差あり』といえるでしょうか。

2000年に60才となる現在、かの池田弥三郎先生が移り住まわれこよなく愛された『蟹気楼の見える街』魚津において、3000mの北アルプスの山々と日本海に沈む夕日に感動しながら、おいしい水、魚、果物を糧に、『みやらくもん』の声にもめげず、ボランティア・文化・教育（柄にもなく教育委員長）・ゴルフ・海外旅行と元気に飛び回っております。

注：『みやらくもん』富山地方の方言で、身は楽者（遊び人）のこと



岡田整形外科

岡田 菊三(46)

矢部裕先生、長らく慶大整形外科教授に在職なされ多くの後輩の指導に当り優れた後継者諸君を養成なされ、同時に慶大病院長の職務に邁進なされました。その御努力に對して一塾員として感謝致します。又この度は慶應義塾賞の受賞おめでとうございます。

私は平成6年世田谷で開業し3年を経過し、微力ながら地域医療に貢献しています。

先日(平成9年11月29日)読売新聞の朝刊に「肩の障害、仕事が原因」最高裁判決、保母の訴え認める、という判決記事をみて本当にこれだよいかと疑問を感じました。ある57才女性が28才の時横浜市立保育園の保母となり、2年後から肩や背中が痛み始め、4年後新設の保育園に移ってから症状が悪化し頸肩腕障害と診断されました。このため横浜市を相手に一千万円の損害賠償を求める訴えをおこなっています。保母の仕事は「精神的緊張を伴い、肉体的にも疲労度が高い。乳幼児の抱き上げなどで上半身を使うことも多く、首や肩にもかなりの負担がかかる」とし「原告の仕事の内容と障害の発症、悪化

との間に因果関係が認められる」という最高裁判決を出し、東京高裁に差し戻しています。

それでは私も整形外科医は毎日多数の外来患者を誤診しないように充分注意して診療し、必要があれば手足をもち上げてギプス固定を行い、20人以上の入院患者の治療にも専念し患者と家族に丁寧に説明しています。又週に2〜3回緊張して少しでも間違いをすると術中術後の死亡もありうる手術をしています。週1回夜間の当直をしその次の日も全日働いています。しかし整形外科医の労災例は聞きません。私どもの仕事は保母より精神的緊張が少く、肉体的疲労が低いのでしょうか。

もしこの判決が確定されると、ごみ収集に当る方は毎日交通繁多な路上で緊張しながらごみ袋を集めトラックに積み込む動作のため頸肩腕障害という労災が今後多発します。又介護労働に当る方達は毎日患者を抱きかかえ移動させ怪我をさせないように注意緊張するため同様の障害がおきます。このため全国津々浦々に労災による頸肩腕障害の頻発が考えられます。

他覚的所見が乏しいといわれる頸肩部痛の患者に明解な側頸部の圧痛(野末-岡田の圧痛)がみられ、この所に針金を貼ってX線撮影をすると多くの場合第5-6頸椎椎間関節裂隙の上に針金がつってきます。この圧痛

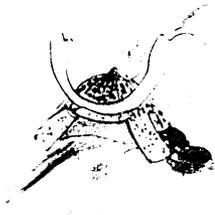
を示す椎間関節内に局麻剤を注入するといつもの痛みは消失し、高張食塩水を注入するといつもの痛みの拡がりに放散痛が誘発されます。多くの場合頸肩部痛の源はこの頸椎椎間関節（中位）です。

頸肩部痛の原因は、1、長頸化、2、頭部重量への増大化、3、睡眠時間（横になる時間）の減少化、4、老化、5、外傷、6、奇形が考えられ、中でも睡眠時間の減少化が最大の原因と思われます。神が人体を設計なさった時の基本思想は日没とともに横になり、日昇とともに起立活動する、つまり10〜12時間は十分に横になるように設計しています。この横になる時間が少く6時間以下 \parallel 1日の $\frac{1}{4}$ 、quarter以下の場合が長い間に及ぶと椎間関節部に炎症が生じ病度が確立され、頸肩部痛という自覚症状が椎間関節の高位に依じて放散されます。

外来では横になる時間を必ず問診しています。多くの患者では夜12時過ぎに横になり朝6時には起床しています。この横になる時間が6時間以下の生活習慣は20才台ではあまり問題をひきおこしません、40才以降になると強い頸肩部痛と凝りをひきおこします。その時側頸部に強い圧痛が認められます。つまり長年にわたり横になる時間が少い、不良なライフスタイルが頸肩部痛にとっては大切な意味をもっています。

現在調査中ですが横浜市の例もおそらく長年にわたり横になる時間が6時間以下のケースと思われます。つまり頸腕障害は労働によるのではなく、個人の不良な生活習慣ライフスタイルに起因すると思われまます。

傾きつつある日本が行財政改革によって国力を再興させる努力をしている時、一つの重要な資源“勤勉な労働”に水をさす先の判決は間違っています。このような観点から横浜市の保母の訴えを再度吟味なさるよう最高裁と東京高裁に意見書と論文の提出を留意しています。この努力は世間では螻蛄の斧ととられましようが、今後の正しい判決の一助となればと思います。



“私の心の旅”

家 田 浩 夫 (49)

テレビ、BS11で毎週土曜日夜やっている“世界、わが心の旅”の影響を受け、私達夫婦も懐かしい街と人を訪ねる旅をしよう、と前から話し合っていた。約20年前、Balticsに留学したとき、最初はすごくおっかなく感じただけど、大変お世話になったシュライバー教授夫婦と、今はウィーンで開業しているAhmad夫妻を訪ねる旅だ。Ahmadは私がチューリッヒに行った当初、同じ病棟の担当だったので、まだ標準ドイツ語さえ充分使えなかった私に、患者さんが話す難しいスイス方言から、秘書がタイプでカルテに記載するためのデイクタホンの使い方まで、一から教えてくれた友人である。しかも、偶然二人共、チューリッヒ郊外の、同じ建物に住んでいたの、女房同士も大変仲良くなり、帰国後も、互いに家族の近況を伝えあっていった。教授夫婦とは、家を訪ねるか、どこかのレストランでお会いできればと思い手紙を書いた。ところが、彼は以前、私達がサンモリッツを中心としたエンガティン地方(スイスの中でも一番スイス的で静かな美しい所)が好きだと云ったのを憶えてくれて、

自分の別荘がサンモリッツにあるから、一泊旅行へ行こうと誘ってくれた。2時間位ならまだしも、一泊二日、教授夫妻と4人きりで旅をするなど、自分は何年も使っていないドイツ語でどうしよう……、女房は女房でドイツ語はヒヤリングのみ少し可能、相手が英語を理解してくれるといっても自身の英語力がたいしたことないし、かといっても、恩師が折角計画してくれたことをとても断れない、と、日本を発つ前から楽しみ半分、憂鬱半分であった。昨年夏休みに訪れることができた久々のチューリッヒは、街並、市電、青い空、赤いスイス国旗、どれも20年前と同じで懐かしく、昔小さな子供達を連れて散歩したBahnhofstrasseや、旧市街の石畳の道などを、時間を忘れて歩き回った。

翌朝、ホテルに私達を迎えにきてくれた教授の運転で、チューリッヒを出発しサンモリッツへ向かう途中、十四、五世紀からあるという丘の上の小さな教会に寄った。古い石造りの教会の中を見てから、周りをとりまいている西洋風のお墓と、きれいに咲き乱れている花を見ていたら、教授が、“本当はいけないんだけど、記念に”と言って、女房に、エーデルワイスを一輪とってくれた。スイス人の典型みたいな、あのまじめで厳格な人がよく……、と驚いたが、スイスの国花でもあるこの花を有り難く戴

き、本には喜んで大事に日本へ持ち帰り、アルバムの一頁に貼った。夕方前に着いたサンモリッツでは、私達用にと、別荘のそばのホテルの一室を予約しておいてくれ、夕食に迎えに来るまで休んでいてくれと言われたので、気楽に日本語を使えてほっとした。スイス国旗、州旗がひるがえっていて、沢山の花に囲まれた、標高2000mにあるこのホテルは、ヨーロッパの上流社会の人達が避暑に来るような落ち着いた感じのホテルで、老婦人と召使のペア、品の良さそうな中年夫婦等が、静かなロビー、庭などで本を読んだりしてゆっくり時を過ごしていて、一泊だけしかできないのが、すぐもったいなかった。教授が約束の7時に、歩いて迎えにきてくれ、御夫妻の別荘で食前酒にシャンパンを飲んで乾杯してから、柱の色と太さから、その歴史を感じさせる街のレストランへ行った。レストランのチーフが来ると、教授とはイタリア語で、奥さんとはフランス語で話し、私達の希望を聞いてくれるがメニューを決めた。スイス人は何か国語も自由に話せて本当にうらやましい。ちなみに、この夫婦間の会話は夫人が元フランス人ということもあり大体フランス語で、私達にはドイツ語か英語でしゃべってくれた。10才以上年上のはずなのに、西洋人の腹は計り知れない。同じように食べて、こっちはこれ以上ないくら

い満腹なのに、御夫妻はデザートに、なんとかパフェ風のやたら甘そうなのや、いくつものチーズのかたまりを食べているのを見て、体力の違いを思い知らされた。チュールヒへ帰った後2日間、昔住んでいた所や、Balgristなど懐かしい所で、懐かしい人達と会ってから、Amhad夫妻の待つウイーンへ旅立った。チューリッヒ⇨ウイーン間は、飛行機だと一時間だが、今回は、20年前の私の安月給ではとてもできなかった鉄道の旅をぜひともしたかった。丁度ザルツブルグ音楽祭の最中だったので、Amhadが、ホーエンザルツブルグ城の庭園で催される野外オペレッタの券を用意してくれたから、ザルツブルグに一泊することになった。ウイーン中央駅には、花束を持った女房の親友（Amhadの奥さん）が迎えに来てくれていて、感激の再会をした。その後3日間クリニクを休みにしてつきあってくれたAmhad夫妻と、以前学会で来たときドイツから来たDr.と意気投合して飲みすぎたけど、ぜひまた来たかったグリーンチングでホイリゲ（今年できたばかりのワイン）を飲んだり、街のカフェで本場のケーキとコーヒーを味わったりして旧交を温めることが出来た。

若かった時、外国に住んでみたい、家族に海外生活をさせたい、と、それだけの理由でつてを捜してできたス

イスでの留学生生活、行った当初の言葉の問題、帰国後の子供達の教育問題など人並みの苦労はあった。だけど今回、会いたかった人、待っていてくれた友人を訪ねる旅をする事が出来て本当に良かった。昔、私の我儘を許し、留学させてくれた皆様に感謝したい。



産業医科大学

リハビリテーション医学教室

蜂須賀 研 二(54)

私は昭和50年に卒業し、泉田教授、池田教授が主宰する整形外科教室に入局しました。当時、リハビリは整形外科の臨床グループの一つであり、千野先生が講師でそのチーフでした。その後リハビリが中央診療部門として独立した際に移籍し、整形外科の先生方とは引き続き同門としてお付き合いさせていただいています。当時研修先として、伊勢慶応病院、国立塩原温泉病院、国立療養所村山病院、月ヶ瀬リハセンターに勤務しました。パート先としては、足利日赤、太田総合病院、埼玉中央病院、国立埼玉病院、都立大久保病院、専売病院、市立清水病院、静岡日赤病院、市立小田原病院などの整形外科にお世話になった記憶があります。

さて現在は、地元が宮崎でもあり昭和62年より北九州市にありますが産業医科大学リハビリテーション医学教室に勤務(助教授)しております。産業医科大学には公衆衛生学の土屋教授が学長として慶応より赴任し、その強腕を発揮して大学創立に大変実績を上げられました。現

在は小泉学長（東大）がその後を引き継がれております。当時は慶応出身の先生がかなりおられました。徐々にならなくなり、医学部には眼科：秋谷教授（本年3月退職予定）、高橋助教授、小児科：白幡教授、公衆衛生学：華表教授（本年3月退職予定）、医療科学（病院管理）：舟谷教授、と私のみとなりました。大学に併設されている産業生態科学研究所（産業医学に関連する研究室）には、環境疫学：大久保教授、高橋助教授、作業病態学：東教授が活躍されております。

九州では、慶応大学はそれほどブランドではありません。慶応というだけで一目置かれることはありません。慶応であることよりも、臨床、教育、研究に地道に努力して実績を上げ、周りの患者さんや先生方に評価していただくことが第一と考えております。

最近が高齢者に対するリハビリや神経筋疾患の研究などをやっているせいか、整形外科との接点は少なくなってきましたが、整形外科と関連する近況をお知らせします。

10年程前、リハビリ医学会の評価基準委員会の委員に任命され、関節可動域評価法の改訂を担当することになりました。担当委員は私、広島大学整形外科講師畑野先生（リハビリ担当、現在開業）、防衛医科大学リハビリ

部石神助教授の3人でした。私は関節可動域の基本方針と序文、説明文、上肢・体幹を担当して、3年程度の年月を要して試案を作成しました。その後、日整会身障委員会委員と合同委員会結成して細部を詰め、日整会とリハ学会の連名で関節可動域評価法を公表しました。現在先生方が使用されている関節可動域評価法は、当時の仕事の一つです。時々、成書にこの評価法が掲載されていますが、この評価表を見る度に、何か不都合はなかったかとドッキリする今日この頃です。

最近の日整会学術集会には稀にしか参加していませんが、平成10年度学術集会には筋萎縮に関するパネル・デスカッションに選出され、徳島に行くことになりました。これは、月ヶ瀬リハセンターにいる頃始めた神経筋病理の研究の一環として筋生検を行っていたからと思います。現在、大学内部では神経内科、小児科、内科から、また、外部からは九州労災病院、小倉記念病院、九州厚生年金病院から依頼があり、現在までに300例ぐらい症例が集まりました。これらを基にして廃用性筋萎縮の病理の紹介をしたいと思えます。

日整会では、久しぶりに多くの同門の先生方にお会いできることを楽しみにしています。九州にいますと、慶応であることを存分に発揮する機会はありませんので……。

・ 関連病院の現況

けいゆう病院

木内 準之助(48)

昭和8年、当時の神奈川県知事横山助成氏、警察部長相川勝六氏の提案にて、病院建設の母体となる財団法人神奈川県警友会が組織され、皇室はじめ県内外篤志家より寄付金が集まり、警察消防職員の拠出金18、504円を含め総額300、276円に達した。殊に、天皇皇后両陛下より5、000円のご下賜金を賜わり、当時としては異例のことであった。そして昭和9年5月6日警友病院が誕生しました。以後約60年職域及び地域の中核病院として運営されてきましたが、建物、設備の老朽化が進み、平成8年1月8日、横浜市西区みなとみらいに新病院が完成、名称も「けいゆう病院」と改めました。

新病院は、地上13階、地下3階でランドマークタワー、クウィーンズスクウェア、パシフィコ横浜などの建ち並ぶ「みなとみらい地区」の中にあります。ベッド数は



351床と旧病院と変わりませんが、敷地は8、000㎡で約6倍、延床面積は34、482㎡で約15倍と著しく大きくなり、また全病室から海が見渡せます。ソフト面では、オーダリングシステムを取り入れ、1日の平均外来患者数1、600人も余裕を以て診察しております。新病院の基本方針は、21世紀を展望する国際的な新都市構想のMM21地区にふさわしい、近代的な総合病院とし、3つのメインテーマすなわち、Amenity、Hospitality、Internationalityを設け、広い空間につつまれたゆとりある環境、患者のプライバシーを確保、患者サービスの向上、高度医療機能の充実をめざします。

整形外科では、私が赴任して来ました昭和55年当時、医師3人でしたが現在では6人と益々充実してきました。外来患者は1日約180人で3人が担当し、手術は年平均420例です。

2年後の平成12年には地下鉄の開通が予定され、病院のすぐ隣が駅となり、交通の便がよくなると、益々患者数は増加すると期待されます。

伊勢原協同病院

高畑 武司(56)

当院にあって「関連病院の現状」の題から連想されるものは外来・入院患者数、手術件数、それらの対前年比、対計画比など経営面になってしまいます。そして「どうすればいいのだ」と八方塞がりの空気が漂ってしまい、この時期に部長になったことは前世においてよほどの悪事を働いた報いと諦めるしかありません。

という事でできるだけ直接には「当院の現状」に触れぬように今から約20年前、医局に入ってからを振り返り、すなわち過去を投影しながら今後を考えてみたいと思います。

関連病院出張の直前にみんな集められ教授、助教授、卒訓担当から今後の職場での生活・仕事上の訓戒・注意を承りました。何項目にもわたるものでしたが、結局今でも覚えているものを挙げると以下になります。

出張して2、3年での勉強(研修)態度がその後の臨床能力を大きく決定づける。

病院と手術室へは一番早くいっていること。「医長は最後に来て、最初に帰るのが仕事の一つだ」とも助教授

がいったことを聞き漏らしませんでした（これはなかなか深遠です）。

整形外科ははじめの数年はつらくてもそのうち楽になる（?）。

女性との付き合いはうまくやること……など。

以上のほかさまざまなお話を頂き「わかりましたか、頑張ってください」と励まされ、一同「ハイ」とヒボクラテスの誓いのような気持ちになって関連病院へ赴いたのでした。

その後、漂泊のジプシー生活が始まりました。渡良瀬川を渡り、南アルプスを越え天竜川を渡り、さらに北アルプスを越え神通川を渡り、ミシシッピー、那珂川、そして富士川を渡りはじめの6年間に9つの病院・施設を経験いたしました。信濃町から離れるほど、また他大学の人々に囲まれるほどよけいに自分のルーツ「慶応」を意識しました。一方、慶応の医局は単に「遠くにいるヤツ」ぐらいにしか思っていない気配を山、川、海をわたる風から敏感に感じると押さえがたい寂寥感に天を仰ぎました。

こうして幾多の試練に耐えながら今の伊勢原協同病院にやってきました。

前評判は、給料はマズマズで、むかし鬼軍曹といわれ

た首席卒業の池田先生が元祖で現役、しっかりとした整形外科がなされており、湘南の海に近い、といったものでした。大体、当たっていました。池田先生は鬼ではなくニコッと笑顔の良い方でした。

前任者の増田先生は人望が厚く13年間おられただけに私のようなジプシー者がかわりに降って湧いたのですから「オイ、だいじょうぶか」と会う人ごとの顔に書いてありました。やはり人々の心配は的中するものでこの年を境に年々整形外科の対計画の業績は低下していくことになるのでした。医局人事の及ぼす影響はスゴイとひとごとのように感心してしまいます。

病院としてはこの事実を見過ごすわけにはいきませんが、もちろん業績の悪化は人事のことだけではありませんが、院長室の話は医局からの人事のことにも及びます。「大学の関連病院ですから派遣される人を受けるとか……」の言は途中で消されて、「関連大学という意識でいて下さい。病院が採用するのですから今後はなんらかのチェック体制を敷くことを考えています。」というように病院の態度は変わってきています。

最後に平成10年1月現在のメンバーをお知らせします。

池田顧問、寺田医長、宇井医長、大山医員、フレマン片岡、そして部長の高畑です。みんなそれぞれ持味を活

かして大活躍です。どんな様子であるか想像のつく方は
そのご想像通りではないかと思えます。

矢部裕先生へ贈る言葉と

北里研究所病院の現状

北里研究所病院 整形外科部長 スポーツクリニック部長

阿部 均 (57特)

矢部先生が慶應義塾大学医学部整形外科学教室主任として赴任されて十数年がたち、早いもので平成10年のこの春で退官されようとしています。当院にとってみると、矢部先生とともに大きく揺れ、大きく発展することができた十数年でした。その渦中にいた私にとっては、あっという間の年月であり、思い出は深く、忘れられないものでした。

港区白金の北里研究所病院（以下北研病院）の構内では、10階建ての新病院が建設中で次第にその偉容を現わし始めており、その中で21世紀に向かって、予防医学を中心とした新たな医療が展開されようとしています。

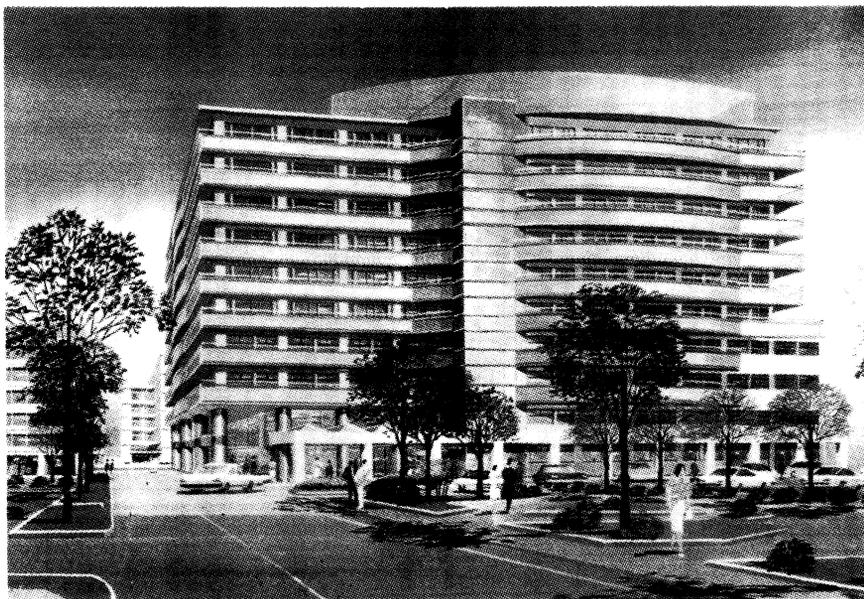
1986年に矢部先生、河村元院長、芝田前部長に北研病院でスポーツ外来を開設することを認めていただいた以来、世の中のニーズにマッチして、整形外科はスポーツクリニックとともに大きく発展することができました。この十年で北研病院の整形外科の実績は、外来患者数は



2倍、入院患者数、手術件数は3倍に伸び、このうちの60〜70%をスポーツ関連の患者さんが占めるようになりました。さらにスタッフは医師が3人から5人、パースト医師が1人から4人、理学療法士が1人から3人、トレーナーが0人から3人と増えました。

この実績は、北里研究所理事会の認めるところとなり、北里学園（北里大学を含む）の白金地区再開発構想の一環として、21世紀に向けた予防医学の柱としてスポーツクリニック、スポーツ医学を運営して行くことになりました。新病院は、平成11年春に開院の予定で残すところあと1年余りとなり、そこで行われる予定の構想は少しずつ現実のものとなっています。

予定されている構想の例を挙げます。競技レベルの高いスポーツ選手に対しては、各種メデイカルチェックの充実、身体的能力を高めるための体力チェック、トレーナーによるコンディショニング、外傷・障害からの早期プレー復帰のためのアスレチックリハビリテーションとこれらの予防などです。また、一般人に対しては、各種ドックの充実、日常生活内で十分な可能なマイルドな運動の処方と指導などによる骨粗鬆症、生活習慣病などを予防する試みなどが中心となっています。従って、従来の整形外科の診療の他に、前述したような項目をわれわ



れで運営しなければならず、医療保険の改訂、世の中の働きや考え方を視野に入れた運営をする必要があります。

矢部先生にこれらのことをお話しし、真剣に耳を傾けて聞いていただいた上にきめの細かい十分なアドバイスもいただき、さらに本院のスタッフの方々にもご理解していただいたことを幸せに思います。

北研病院においては、近年、力を充実させてきた北里大学と慶應義塾大学の接点にあるため、様々な配慮が必要となります。そして、新病院の開院まであと1年となり、大きな変革の流れのまった中にあり、慶應義塾といえども安閑としていられない状況にあります。北研病院整形外科のスタッフは、これらの新しい医学にチャレンジするために十分なる努力をするつもりです。そして、北研病院における整形外科とスポーツクリニックの基礎を造っていただいた矢部先生に感謝するとともに、さらに別な立場から、われわれを含めた日本の医学界を引っ張っていただきたいと願うものです。少し休みつつ、お身体をご自愛の上、悠々と過ごされることを願っています。ただただ、感謝する次第です。誠にありがとうございます。

練馬総合病院の近況

飛 弾 進 (59)

矢部教授が退職される本年は、折しも当院の創立五十年にあたります。この場をお借りして近況を簡単に報告させていただきます。当院は戦後間もない昭和二十三年三月の開設で、昭和三十六年に総合病院となり、正式名は「財団法人東京都医療保険協会練馬総合病院」です。地域密着型の病院ですが、練馬区は総合病院が少ないので、かなり広い地域から患者さんが来院されます。常勤医師は飯田院長(50、外科)以下二十三名おります。科別では外科が院長を含め六名、内科五名、産婦人科と整形が各三名、泌尿器科と皮膚科が各二名、眼科・病理各一名となっております。他に看護婦さん約一二〇名、検査技師十三名、放射線技師九名、などで職員総数は約二四〇名です。許可ベッド数は二四四床ですが、現在一部病棟を閉鎖して、実際に稼働しているのは一八〇余床です。平成八年の病院全体の一日平均外来患者数は全科で四四三名、入院患者数は平均一六九名となっています。建物は鉄筋七階建てですが、築三十年近くを経っており大分くたびれています。床の張り替え、内装のお化粧でし

のいでいるのが現状です。整形外科は五階病棟に泌尿器科と同居しており、特に科別の上限はないので、五階が満床になれば、他のフロアーに入れてもらえますが、逆の時は他科が否応なく入ってきてしまいます。

当科は今年から、吉田(祐)先生の後任として宮永先生が着任し、王先生と私の三名の常勤医と三名の非常勤医で診療にあたっています。昨年の整形外科の平均一日患者数は約一〇〇名余、入院数は平均三十八名でしたが、今年に入って急に増えて一時は六十五名と膨れ上がってしまい、いつになく忙しい年明けとなりました。患者さんが違うフロアーに分散しているので回診は結構大変です。年間手術件数は平成八年、九年とも二八〇件前後でした。また昨年七月からは、週休二日制の導入で土曜休診となりました。九月の保険改正と共に、患者さんの減少が危惧されましたが、当科では今のところ大きな混乱もなくほっとしております。

さて、矢部教授には、昭和六十一年の御着任以来十二年間に亘り大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。私は昭和六十三年に一年間帰室しましたが、教授の手術に御一緒させていただく機会には少なかつたと思います。しかしうーんと唸られてからじーっと術野を睨み付けながら慎重に次のプロセスに進まれる、そ

の迫力に吞まれそうになりました。また論文投稿の際には驚くほど僅かな期間に数十項目の問題点を箇条書きされ、ご多忙にもかかわらずひとつひとつ丁寧に御指導いただき大変恐縮したこと、などが強く印象に残っております。院長職をはじめ公務で忙殺される身でありながら教室員の御指導にあたられるのはさぞ大変なお仕事であったのではとお察しいたします。

私は当院に赴任して二年ですが、教授が近年、教室員の結婚式で仰られたように、慌ただしい時も“ゆとりの心”を忘れずに患者さんや職員と接して行けたらと思っております。

最後に、教室員ならびに同窓の諸先生方におかれましては、今後とも益々の御指導・御鞭撻をお願い申し上げます。



聖母病院

星野 達 (61)

矢部先生、長い間我々教室員をご指導下さいまして有り難うございました。矢部先生が教授に就任されたのは私が卒業して3年目の時ですが、最初に教授が各病院の医長との面談で強調されたことばは「和をもって尊ぶ」だったと記憶しています。たしかにそのころの医局はいわゆる「改革運動」などの余波もあり、研究班のほかに〇〇派というレッテルがひとりひとりについていて、これは大変なところに入ってきたものだという気がしていたものです。しかし今の医局をみると研究班の区別はあるものの、それはあくまで専門分野の違いであって、いわゆる政治的派閥というものはほぼ解消されたように思えます。

「教室全員が一丸となって」という、とかくお題目だけになりそうなかけ声が一昨年の日整会でも文字通りに実践された事實は、「和をもって尊ぶ」からさらに一歩進んだ成果をあげられたあかしのようには思います。これらもひとえに教授の強力な指導力の賜といえるでしょう。これからも新しい職場で、さらなる激務が待っているこ

とは存じますが、どうぞご自愛下さりまして、よりいっそうご活躍なさいますようお願い申し上げます。

さてわが聖母病院の現状についてですが、比較的新しい関連病院ですので場所から説明いたします。西武新宿線で高田馬場から一駅目の下落合から徒歩5分、もしくは山手線目白駅からバスで3つ目聖母病院前下車です。山手通りの内側で新目白通りと目白通りの間に位置します。社会福祉法人の病院ですが、実質的な経営母体は聖フランシスコ会という修道会です。お産の病院として特に有名で、年間出産数は千三百件を超え、出産数では日本でも一二を争う数とのことです。にもかかわらず、いわゆる都内の「お産御三家」には入れず、その次の位置にランクされているのが残念であり、またある意味でこの病院の問題点を象徴しているといえます。稼働病床数は約120床（看護婦一斉退職のため一病棟閉鎖中）でその約半分は産科系（婦人科は含まず）です。内科は36床、外科は20床、我が整形外科は6床、他に眼科、耳鼻科4床ずつです。整形外科は随分少ないと思われるでしょうが、これは多分に戦略的なものです。実際には10床前後稼働しており、名目稼働率は150〜170%をキープしています（他科は80%程度）、月間外来患者数は二千人前後、年間手術件数は百五十件程度（慢性疾患が中心）です。

まわりが古い住宅街で少し電車に乗れば大学病院、国立国際医療センターなど大病院がたくさんあるというロケーションから、患者さんはいきおい近傍の高齢者が中心になります。そしてカトリックの病院であるため、聖職者や信者さん（クリスチャンのこと）の受診が多く、さらにもっとも大きな特徴として、外国人の受診が多いことがあげられます（当院の英語正式名称は international catholic hospital）。外国人受付が別にあり、6カ国語を話すシスターが通訳してくれたりします。しかし英語はいちいち通訳してもらえず、そのへんが語学が大嫌いな私にとってストレスでもあります。そしてこれらの特徴や建物がかもしだす一種独特な宗教的雰囲気に着かれる「聖母病院ファン」というのがたしかに存在するようではあり、また逆にどうしてもなじめないという人も少なくないようです。院長は医師（歴代すべて信者）ですが、管理部長（すべての権限をもつ実質的な経営者）、事務長、総務課長、看護部長、産科系病棟部長といった要職はすべてシスターが占めており、社会福祉法人とはいうものの、実質的には宗教法人に近い経営体制をとっています。小規模の病院ながら付属の看護短大（全寮制で門限7時）を持ち、看護婦の大部分はその短大出身（＝純粹培養）でクリスチャンも多く、きわめて素直で従順

な人が多いため、病棟などはある意味では働きやすいともいえます。しかし職員数が300人を超えるにもかかわらず労働組合は無く、職員（医師も含む）の権利はキリスト教の愛と奉仕の精神の前に屈服しているという状況です。着任以来、整形外科の医療に関してはかなり改革を行い、慶應の出張病院としての最低レベルには達したと自負しておりますが、キリスト教三千年の壁は厚く、交渉ごととは進まず、世間の常識は通用せず、最近ではそれもこれもこの病院の「味」なのかなあ、と妙に洗脳された気分になってきたのが不安ではあります。都心に近いというメリットはありますので、今後ともよろしくお願いたします。



・留学だより

新井 健 (64)

矢部先生大変ご苦勞様でした。ご多忙のところ、矢部教授をはじめ諸先生方に御尽力いただき、留学させていただきましたこと誠に有り難うございました。

私は、スウェーデンのマルメというところに、去年の四月から来ています。マルメはスウェーデンの南にあり、海を隔ててすぐコペンハーゲンがあり、歴史的にはデンマーク領だったこともあるところです。人口は二十四万でスウェーデン第三の都市です。ここから約20kmのルンドに、北欧最大のルンド大学があり、マルメには、その付属病院があります。こちらでは手の外科が独立しており、私は、手の外科のGoran Lundborg教授の所に末梢神経の研究のために来ています。ホームページがありますのでよろしかったら訪れてみてください (http://www.hand.mas.lu.se/Guest.html)。慶応大学整形外科からの留学は私で四人目で、前任の先生方が大変優秀だったことに加え、大学にLundborg教授を呼んで講演

していただいたことがあるなど大変良い関係ができて、研究の方もスウェーデンに着いてすぐに研究が始められるなど、他の留学生に比べると大変恵まれていて幸運だったと思っています。これも大学の医局の力だと思いたい大変感謝しております。

マルメは、スウェーデンの南ですが、緯度でいいますと、樺太の北端よりさらに北になります。冬はどんなに寒いのかと恐れていましたが、今年は暖冬とのことで、東京とあまり変わりなく、ほっとしています。

スウェーデンに来て最初に思うことは、スウェーデン人が実にゆったりと仕事をしていると言うことです。朝は七時頃から始まりますが、九時頃にはコーヒータイムになります。十一時過ぎには昼食の時間となり、ゆっくり昼食をとります。二時頃にまたコーヒータイムがあり、四時には帰宅します。街では、一般の商店は五時までで、土日も休みです。店員もあまり商売っ気がないようで、日本やアジアの市街地に比べ活気が足りなく寂しい感じがします。中国からの留学生も同じようなことを言っています。

夏休みは二ヶ月あり、休暇も実によく取ります。そんなに休みがあると時間をつぶすのが大変だと心配してしまうのですが、ピクニックなどをしてゆっくり過ごして

いるようです。スウェーデン人は実にピクニックが好きで、夏になると公園などの緑にビニール風呂敷と食べ物を持ってピクニックに出かけます。私もLundborg教授に、教授の家の近くの野原にピクニックに連れていってもらいました。スウェーデンでは、他人の土地でも、一泊以内ならばピクニックをしてもキャンプをしても良いという決まりがあるそうです。

私は、普段研究所にいますが、身之性なのか時間をもつたいないような気がしてつい遅くまで研究所に残ってしまいます。遅くまで仕事をしているのは、中国人やアイランド人などの所謂外人だけです。

スウェーデン料理と言ったものはあまりなく、パーティーなどではデイルと言う香草が効いた生魚の塩漬けがでてきますが、私の口には合いません。近くに小さなチャイナタウンがあり中華食材が手にはいりやすく、家では中華料理をのよくなものをよく食べます。

英語が不得意で生活できるかどうか不安でしたが、お互い英語は外国語なので、単語をつなげたような英語でもちゃんと聞き取ってくれて、何とか会話が成り立っています。スウェーデン語は発音が難しく、いまのところ挨拶とスパーの買い物に使う数字くらいです。

動物を大切にする国で、公園に行っても鳥が逃げたり

する事はなく雁や鴨が餌を求めて寄ってきます。パンが余ると近くの公園に、鳥に餌をやりに行きます。公園がたくさんあり景色はきれいなのですが、道は鳥や犬の糞でよごれています。はじめは糞を避けながら歩いていましたが最近は無視しました。

マルメとの良い関係を壊さないように精進いたしますのでよろしくお願いいたします。矢部教授をはじめ、医局も忙しい時期と思いますが、お身体をこわさないよう気をつけてください。



“リーズより”

須田 康文 (65)

96年9月29日に英国の地に到着してから早いもので1年3か月が経ちました。

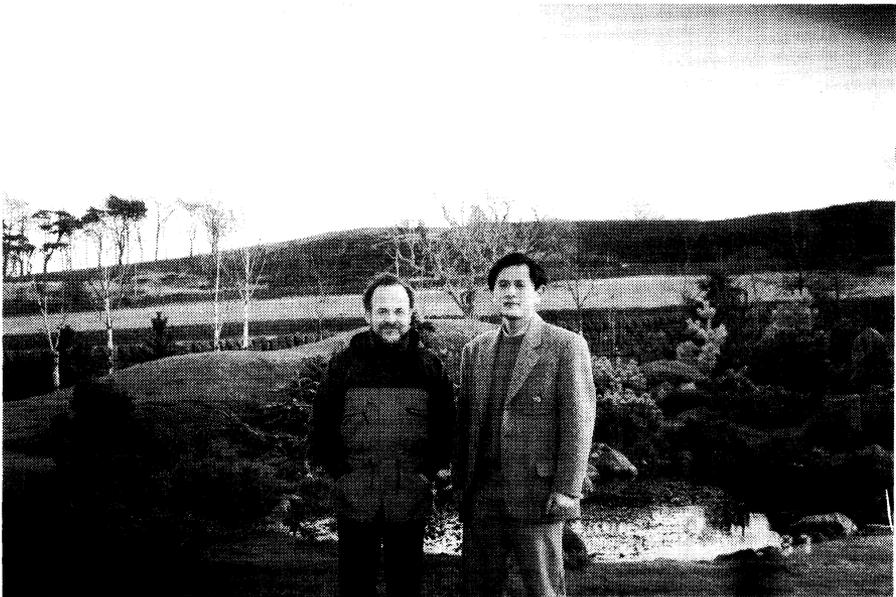
現在、私はリーズ大学医学部大学院生として、医学部の一研究棟でありますRheumatology and Rehabilitation Research Unitのバイオメカニクスグループに所属し、Dr. Seedhomにご指導いただき工学修士(Mphil)の取得を目的に研究を行っております。グループでは現在関節軟骨の物質特性に関する研究を中心に、膝関節、足関節の不安定性の解明や、人工関節と骨との接合強度の計測を目的とした実験が行われ、このうち、「膝関節後外側回旋不安定性の病態と治療の解明」が私の研究テーマです。本研究室への慶應からの留学は竹田助教授が最初にいらしてから20年以上に及び、これまで防衛医大富士川教授、東海大戸松助教授ほか7名の先輩方が学んでおられます。研究室内では、実験内容、時間の配分などはすべて研究者個人の裁量に任ざれており大変有り難いことなのですが、学生時代から与えられた仕事をこなすことに慣れ親しんでおりました私としまして

は、当初、自主性を重んじるこちらの雰囲気には戸惑いも感じられました。しかし有能なスタッフの協力により、最大の難関と考えておりました実験装置（膝関節に各種負荷を加え、生じる変位量を計測する装置）が比較的簡単にしかも驚くほど廉価（数十ポンド程度⇨1万円円弱です）で完成しましてからは、実験も順調に進み無事終盤を迎えることができました。3月末にオックスフォードで開かれます英国整形外科基礎学会に研究の一部を発表し、学位論文を完成させることが目下の目標です。

さてイングランド北部に位置しますリーズ（北緯⁵⁴は、ウェストヨークシャー州の州都で、人口約75万人の英国第3位の都市です。ロンドン、エジンバラからはほぼ等距離（約300km）にあります。リーズはかつては紡績の町として栄えていましたが、近年はロンドンの地価急騰により国内企業の事務所移転や、周辺への日本、韓国などの外国企業の工場進出が盛んで、産業形態が変化しつつあり、にわかには活気を帯びてきています。しかし、市街地から一歩離れますと周囲は緑一色となり、素晴らしい田園風景と放牧された羊の群れ（とにかくたくさんいます）に遭遇します。日本でも有名なヨークやハワース（嵐が丘の舞台）へは自動車で40分程度、湖水地方までは1時間半程度と、近くには観光の名所も多く存在し、

英国の自然をごく身近に堪能することが出来ます。また、民間のナショナルトラスト運動により数多くの文化遺産（教会、城跡など）が保護、保存され英国の歴史に容易に触れることも可能です。

こうした豊かな自然、文化遺産に囲まれているためでしょうか、さらに近代西洋文明の基礎を自らが築いたという自負からでしょうか、あるいはいまだ現存する階級制度による影響でしょうか、多くの英国人が何事にもゆとりと自然体で対処する姿（自分自身をあるがままに受け入れようとする姿勢）にはいつも感心させられます。とかく他人と比較することによって自分のポジションを見いだそうとしがちな日本人にとりましては見習うべき点も多いようです。しかし、こうした英国人気質も、近年の利潤追求型経済への転換による所得格差や、公立校における教育レベルの低下（公立進学校はよほど優秀でないと入れませんし、私立校は授業料が非常に高く、また入学には親の職種が影響するため、いずれも一般庶民の子女には狭き門です）などによって、徐々に変わりつつあるようです。犯罪数の増加や低年齢化、風に舞う道ばたのゴミや、未成年者の喫煙、飲酒などのモラルの低下はその現れかもしれません。また、英国の象徴とされてきたフィッシュ・アンド・チップスに代わって、最近



ではフライドチキンやハンバーガー、ピザを好む人々が多くなり、狂牛病の影響からローストビーフを口にできる機会もなくなるなど、英国文化にも変化の波が押し寄せています。

昨年はブレア労働党政権の誕生、ダイアナプリンセス・オブ・ウェールズの訃報など、期せずして英国の歴史に残るような出来事にも遭遇いたしました。このように、異文化の中で実生活するということは、その国や地域、そこに住む人々の素晴らしさ、問題点を直接垣間見れることができるだけではなく、自分自身のこと、家族のこと、ひいては日本をも見つめ直すことができ、大変有意義です。

最後に、今回このような貴重な機会をお与え下さいました矢部教授に改めて御礼申し上げますとともに、こちらで得ました知識を、帰国後の仕事に役立てられるよう残る留学生生活を頑張ってまいる所存です。

こんなデンマークに誰がした

関 敦仁(65)

Biomechanics Research
Laboratory, University
Hospital of Aarhus

私たちデンマークのオーフスで、静かに正月を迎えております。この国は夏の間、決して暑すぎず、それでいてなかなか日が沈まないもので、ゆったりと生活するには理想的な国です。その時期には世界中から観光客が集まります。たいいていの旅行ガイドブックには、この時期の遊び方についての説明が載っています。

一方、冬のデンマークは全く異なった様相を呈しています。冬の北欧と聞いて、まず厳寒の雪と氷の世界を連想するかもしれませんが、特に今年はや暖冬でもあり、現在まで雪が積もってはいません。それよりも日の短さと暗さが我々日本人にとっては抑鬱的に感じます。11月の末にもなると日の出は8時半頃で日没が3時半くらいになります。冬至では朝9時から昼3時頃までしか外は明るくなりません。南東から昇った太陽はアーチを描かず、ピッチャーライナーのボールがグラブに吸い込まれる様

に、南西に沈みます。おまけにこの国の気候はその時期ほとんど曇りか小雨で、とても買い物以外に外出する気になれません。自家用車でもあれば気晴らしのドライブができますが、予算の都合から必要なときだけ車を借りる生活をしていますと、外の景色を楽しめない状況では頻回に借りる気にもなりません。近くの遊園地も冬の間は使えません。これでは楽しいはず（と思っていたのは私だけ？）の海外生活が台無しです。今後どうあっても北欧で暮らしたく思っている方は、以下の点に留意してください。

(1) まず、潤沢と言える程に資金集めをする。奨学金をしこたま稼ぐのも良し、大金持ちの配偶者を見つめるのも良し、何よりその努力を惜しまないことが重要です。(2) 外の暗さに負けない何かを持つこと、単に部屋を明るくするだけでも少々の効果があります。暗さにめげない不屈の精神を持つというのも候補の一つですが、可能な人は試みてください。他の案としては、例えば忘年会用の瞬間芸のビデオを見て、それを習得して独演会を行うというのも挙げられます。もっとも、自宅で家族相手にそれを披露しても、きつとひいてしまうでしょう。

The CDを聴く……。お気に入りの方はどうぞ。冬の間は知人を招待したり、招待されたりして交流を図るの

が最善かもしれません。そのためには家族の人にも英会話の練習をせよという必要がある。さもないと亭主ばかりお喋りする羽目になり、疲れます（ここまでの記述内容に対して、家内には異論があります）。最近では、こちらにいても日本の番組を見ることのできるテレビがあります。これも無難な線ですが、1)とも関係しまして我が家では却下されました。

では、現地人の生活を紹介します。12月はクリスマス季節ですので、町全体が飾りつけられます。日が早く沈むだけ町のイルミネーションが美しく感じられます。イルミネーションといいますが日本の鮮やかなネオンとは異なり、クリスマスツリーに被せるような単色の小さな電球のみです。数多くではありますが静けさを感じます。そのおかげで町の中心は夜も明るくなってきます。電飾以外の飾り付けではハートの形に編んで作った紙袋と、紙テープを折って作った星が特徴的です。個人のクリスマスツリーにも繁華街の飾り付けにも見られます。ハートと星は紙さえあれば自分で作れます。日本の折り紙を教える代わりに、私もハートと星の作り方を習いました。

北欧にはクリスマスの時に飲む特別なお酒があります。グレッグ (Glögg) といまして、スウェーデンから伝

わったのだそうです。安めの赤ワインに干しぶどうとスライスしたアーモンド、さらに即席用としてグレッグのエキス（この材料はスーパードで手に入ります）を入れて熱めます。暖かくしてお酒を飲むのは日本酒も同じですが、グレッグは甘いジュースのようです。寒い外から帰ってきたときには美味しい一杯になります。強いグレッグが飲みたいときは、干しぶどうを予めアルコール度数の高い酒につけ込んでおきます。

また、町の教会に行くとも無料でコンサートが聴けます。替美歌ばかりですが気分が落ちつきません。息子は熟睡していました。

クリスマスの後は新年会です。ここでは大晦日の夜から仲間が集まり、12時の時報とともに乾杯したり椅子から飛び降りたりします。その前後で町の至る所から打ち上げ花火が上がります。さらにビール瓶がビールの入ったまま割られます。とても危険です。たまたま、私たちの（安全な）パーティーに参加していた救急隊の人が、この日は毎年、手の怪我が多いと話していました。新年の打ち上げ花火と爆竹は、あの有名な中国でも、手と目に危険で火事の原因にもなるという理由から、既に禁止されていると中国人留学生が教えてくれました。因みに彼はこの日、自転車に乗っていて、瓶の破片を踏みつけ

パンクしています。私のアパートの階段にも瓶の破片が散乱しています。また、部屋の窓から直接花火を上げていたものがあり、一夜開けた朝は汚らしい限りです。アンボンタンはどの国にもありますが、穏やかなアジア人から見ると、バイキングの国は野蛮です。抑鬱的な時期ゆえの所業と諦めるしかありません。

皆さん、これでもまだ北欧で暮らしたいですか。



留学便り

岩 本 潤 (69)

運動が骨代謝におよぼす影響に関する研究を行うために、一九九七年七月より、State University of New York, Graduate School of Exchange Visitor Program、同 University, Health Science Center の関連大学病院である Winthrop University Hospital, Metabolism Laboratory に来ています。主に、骨形態計測学を用いて、成長期における運動と detraining が骨代謝におよぼす影響や低カルシウム食下における運動が骨量におよぼす影響などの研究をしています。指導者は、State University of New York, Health Science Center の Professor : John F. Aloia MD であり、Associate professor : James K. Yeh PhD とともに素暗らしい業績を持っている反面、指導はかなり厳しく、仕事も大変です。時々、辛くなるのですが、頑張るしかないと自分に言い聞かせつつ、ラボに通っています。

大学病院はマンハッタンの隣にあるロングアイランド (John F. Kennedy Airport がある島) の Mineola という所にあります。一〇〇年以上の歴史を持っています。

特に、Health Science に力を入れているようで、ニューヨークでは虚血性心疾患の予防や治療で有名です。大学病院内には、普通の図書館の他に、Health Science Library があり、運動と骨に関しても多くの雑誌が置いてあります。また、自分の健康管理も出来ない医者に、患者を診る資格はないという雰囲気があり、健康管理に関しては職員に対しても厳しいようです。実際、私がこちらに来て、大学病院の ID カードを得るのに多くの健康診断が成され (ツ反まで調べられました)、一つでも異常が発見されると受け入れてもらえなかったとのことです。大学病院内で、どこから来たのか、出身大学はどこかなどの質問をよく受けます。東京を知らない人はいませんが、東京大学や早稲田大学を知っている人はいても、なぜか慶應大学を知っている人はほとんどいません。おまけにこちらが何度ケイオーと発音しても、キーオと言われてしまいます。

家は大学病院の近くの Westbury という所にあります。マンハッタンからは車あるいは電車で 30 分位の所です。冬はとても寒いのですが、夏には家の庭でリスが戯れ、蜚が飛んでいます。また、直ぐ近くに、ゴルフ場が 3 つもある大きな公園 (セントラルパークより大きい) やとても綺麗で大きなビーチがあります。コストの問題は残

るものの、環境が良く住み易い所です。治安も悪くありません。

謝致します。一九九七年十二月二十六日。

こちらに来て約六ヶ月が経ちますが、これまでに楽しかったことと言えば、Halloween、Thanksgiving、Christmasなど大きなイベントに参加できたことです。とても感激しましたし、一生の思い出になりそうです。辛かったことと言えば、実験中にラットが1匹負傷したことで、病院で実験に関する幹部会議がもたれ、そこに呼ばれて30分程説教を受けたことです。レポートを提出して済みましたが、獣医や動物愛護協会の人が目を光らせており大変です。実験の申請でさえ、A4用紙20〜30枚にわたるプロトコール（論文形式、参考文献は50〜100個）を提出し、会議で承認されなければならないのですから、本当に大変です。このように充実した(?)日々を送りながら、ようやくアメリカに慣れてきたところですが、おそらく一年で掃国することになりそうです。残された時間は長くありませんが、留学生生活を有意義なものに出来るよう努力するとともに、出来るだけ多くのデータを持って帰れるように一生懸命頑張りたいと思います。最後に、留学の機会を与えて下さった整形外科学教室矢部裕教授ならびに医局の先生方、また、留学に際し色々とお支援助下さったスポーツクリニック竹田毅助教授に深



● 教室便り

教室幹事を仰せつかって

高山 真一郎 (57)

平成9年4月1日より、松本秀男先生の後を受けまして第7代(こういう記録があるのかどうか分かりませんが)慶應義塾大学整形外科学教室教室幹事を仰せつかりました。就任にあたっては諸先輩方より「大変な時期にあたって気の毒に」と同情とも哀れみともつかぬお言葉をいただきましたが、矢部教授の時代では8人目にあたる最後の医局長という大役を務めさせていただくことになりました。前任者の松本先生、その先代の戸山先生とは学生時代のクラブの同級生・先輩という腐れ縁で、就任前からいろいろと教えていただきました。医局長の仕事はなかなか簡単に説明できるような種類のものではないことも多いのですが、彼らの医局長時代の徐々に生気を失っていく姿、医局長の任務が解かれたときの晴れ晴れとした顔を見れば、自ずとその雰囲気は感じておりまし

た。

教授が総理大臣に相当するならば、教室幹事という呼称の医局長とは自民党の幹事長のような権力者というイメージをお持ちの先生もいらっしゃるかと思いますが、実際は幹事長より秘書といった立場と業務内容であります。一言で言うなら教室のすべての雑用の元締めですが、これだけ所帯が大きくなりますと、通常の行事・冠婚葬祭・人事などの他に次から次へ感心してしまうほど、いろいろなハプニングに遭遇いたします。残念ながらこの紙面では公表できない話も多いのですが、小生に清水健太郎君(△注▽70回生、最近小説家としてもデビュー)のような文才があれば、将来印税で生活を成り立たせていけそうな話題がいろいろと広がっています。

さて、既に10カ月経過し任期も半ばを過ぎた(のつもり)ところで、自分なりに医局と医局長の仕事について考えてみました。医局長の仕事の中でも最も重要なことは、教室員の人事です。ご存じのように、われわれの教室は教室構成員が300名を超え、近年夏(7月)と冬(1月)の定例の人事ではそれぞれ約100名、60名の異動がおこなわれております。これまでの方針では、インストラクター(7年生以上)になっても責任医長となり定着するまで、数年ごとに異動が行われています。先輩の先生

方の中には、医局の人事に対し「教授の一声で突然辺鄙な病院に飛ばされる」といったイメージをお持ちの方もおありかと思いますが、現在ではごく小数の例外を除いてはこういう状況は見る事ができません。もちろんレジデントの場合には、動きたくないとか、この病院はいやだと言う先生は慶應の教室にはいない（はず）のですが、学年が上になりますと個人的にもいろいろな事情があって、教室の一方的な命令といったものでは動かしかにくいことも多いのが実状です。

整形外科の人事は、いつまでもちよくちよく動かされて大変だというnegativeな評判もありますが、別の見方をすれば常に教授が気を配って、よりよい人材配置が維持されることを考えているのだと思います。たとえば、本人が余り望まない病院に配属されたままになったり、配属された病院でうまくフィットしないような場合、適切な異動が行われないと人材が死んでしまいます。もちろん、ある程度の年齢となり、家族のことや色々なしがらみが増えて異動を望まない人も多いと思います。通常の会社組織であっても、頻繁な人事異動はおこなわれるのでしょうか、教室の人事は会社の転勤と違い、業務命令を下せないところが決定的に違うところです。すなわち、あくまで各人が現在勤務している病院を「一身上の

都合で退職」し、新たな病院に新規に就職を希望して採用されるという形式を取っております。もともと教室（医局）という組織は、はっきり定義された社会的なものではありません。それだからこそいっそう全体にとっても個人にとってもプラスになり、なおかつ公平感が失われなような人事が行えるように、配慮していかなければまとまらなくなると思います。人事を担当する方としてはなかなかつらいところではありますが、「わがまま・ごり押し」ものが得をしないように、「すなおで正直者」でしっかり仕事をする「ものが不利益を受けないように、微力ながら努力していこう」と思っております。

教室員の諸先生方には、**「恫喝・懐柔・懇願・取引」**などの策略を必要としないように、なにぶんよろしくご協力をお願いする次第であります。



脊椎脊髓班の現況

藤村 祥 一 (47)

脊椎脊髓班の過去二年余の動向について報告させていただきます。平成九年暮れには脊椎脊髓班としての忘年会も二十五回目を迎え、私の現況報告も三回目になります。私と鈴木、戸山、小野、鎌田先生の五名を中心に活動しておりますが、米國留学から帰室した市村、千葉先生の二名と松本先生が小野、鎌田先生と交替し、現在は六名であります。

脊椎脊髓班発足後より毎月一回定期的に行われてきたオール慶應の脊椎症例検討会は平成九年夏には二〇〇回を迎えました。一〇〇回目の症例検討会を境に活動の中心となった第二、第三世代の先生方は指導者として各々の大学や施設で活躍しておりますが、多忙のため症例検討会に出席していただけないのが現状です。出席者の顔触れもこの二〜三年は研究中の若手を中心になってきたため、手術手技の基本を習得してもらうため、実技の講習もとり入れております。慶大脊椎脊髓セミナーも二年毎に開催してきましたが、鈴木先生が第七回セミナーを企画して以来、中断しております。次回のセミナーから

は演者も若手に切り替え、再出発したいと考えております。若い先生方には実績を重ね、是非ともセミナーの演者をめざして欲しいものです。一方、脊椎関連の学会や研究会を主催する先生方は枚挙に遑が無く、大変嬉しい限りです。

現在、臨床例の中心は変性疾患、脊柱靱帯骨化症、脊柱側弯症、脊髓腫瘍などであり、勿論、変性疾患の対象は頸髄症と腰痛症であり、他科からの転移性脊椎腫瘍例の紹介も増加しております。この現状から長期成績に基づいた疾患ごとの病態に即した治療体系を確立し、同時に治療技術を磨くことが今後、益々厳しくなる医療現場において不可欠なものとなります。高齢者に対する手術適心の拡大や *instrumentation surgery* の氾濫がみられる今日、この問題を避けることはできません。高齢化社会が進むであろう二十一世紀において、今日の治療が医療現場において経済効率を含めて通用するかどうか疑問です。Major spine surgery とは相反す *minimally invasive spine surgery* を目指した治療手段の開発と確立も急務といえます。

一方、基礎的研究面については、ここ一〜二年、矢部教授の叱咤もあり学位論文の完成は量的には成果をあげておりますが、質的な評価に耐える研究はまだ十分

とはいえません。現在の研究テーマは、脊髄修復、脊柱側弯症、脊椎バイオメカニクスが中心ですが、幸い、脊椎脊髄班には基礎的研究が一区切りついた多くの若い俊才が控えており、積極的に留学を志しております。彼らの生化学、遺伝子学さらに分子生物学的手法を駆使した研究は緒にいたばかりですが、彼らがエネルギーを集すれば脊椎脊髄班の発展に貢献するものと確信しております。

学会活動を含めた研究成果については、数年前から開設している脊椎術後外来の効用もあり、脊椎手術の長期成績について学会報告が行える状況になってきました。投稿論文も若手を中心に英文投稿が積極的になり、国外学術誌にも徐々に掲載されるようになってきております。今後、脊椎脊髄班の現況報告を書く機会があれば、臨床および研究の両面において成果について報告したいものです。



スポーツクリニック開設秘話？

竹田 毅 (47)

「光陰矢の如し」。スポーツクリニック（以下スポクリ）が慶應義塾大病院の独立した中央診療施設として産声を上げてから、早七回目の春がめぐってきます。この間の歩み等につきましては本誌上でその都度報告してまいりましたが、表面に現れない話しも多々あります。

スポクリの文字通り生みの親、矢部教授のご退職の日を迎えるにあたり、これらのことをあらためて振り返りますと、ひととき感慨深いものがあります。

そこで今回は、スポクリ開設にまつわる印象深い二、三の出来事（秘話？）を、思い起こすままに書き綴ることといたします。

発端

昭和の時代が暮れつつある年（昭和六十二〜六十三年頃？と記憶）の某日、当時まだ黒髪だった若手スタッフ数名と小生が突然教授室に呼ばれて、「スポーツ医学の臨床の場を作りたいので、場所の選定も含めた構想を立てよ」と命じられました。この一言がそもそもスポクリ

開設計画の発端でした。ただし小生も含めて誰も本気でこれが実現するとは思っていなかったのではないでしょうか？・・・その証拠にそれぞれが出した案は、今から思えばどの案も絵に描いた餅、荒唐無稽のもので、予算など念頭にも置かないものでした。実際当時の医学部の状況は、新棟の完成に伴う空き室の再編計画がほぼ確定しつつあり、新しく割り込む余地はほとんどなかったのです。ただ矢部教授にはある程度の成算があったのかも知れません（ご本人は否定していますが・・・）。

ところがある時、スポーツ外来開設のために一億円の指定寄付がされるといって湧いたような話しが起りました。この背景には当時の石川塾長が、臓器移植とならんでスポーツ医学を重視しておられたことがあったように思われます。そのまま背後には矢部教授の熱意と、当時日吉に新設された慶應義塾大学スポーツ医学研究センター（スポ研）の存在があったのかもしれない。いずれにしても、この一億円の指定寄付によって、にわかに話は現実味を帯びるようになったわけです。これがなければおそらくスポクリは将に絵に描いた餅のままに終わっていたことでしょう。

閑話休題

昨年のプロ野球の日本一は大方の予想と異なり、ヤクルトスワローズでした。その勝因の第一が野村監督のID野球にあることに異論はありませんが、忘れてほしくないことに故障者の復活があります。投手では石井（一）、川崎、伊藤（智）、加藤、野手では土橋の活躍が記憶に残るところですが、これらの選手は、小川清久先生（50回：肩）、堀内行雄先生（52回：手・肘）、宇佐見則夫先生（58回：足）、大谷俊郎先生（59回：膝）いずれかの先生の手術を受けた選手です。またもう一人真中という外野手の活躍も貴重なものでしたが、彼は昨年三月に東電病院の土方貞久先生（41回）による腰部椎間板ヘルニアの経皮的髓核摘出術を受け、術後一ヶ月余りという驚異的早さで復帰しています。ちなみに土方先生は知る人ぞ知るヤクルトファンで、神宮球場のネット裏に年間予約席を一つならず持っているようであります（真偽のほどはご本人にお確かめ下さい）。このようにヤクルト優勝の陰には、慶大整形同窓会があるというわけです。

ところでスポクリ開設以来セントラルリーグの優勝は不思議なことにスポクリが健康管理を委託されたチームだけです。なお巨人は昨年からスポクリの手を離れています。今年もこのジンクスが生き続けるか否か興味深いところであります。

名付け親、育ての親

スポーツクリニックという名前を付けたのは医学部担当常任理事であった植村泰夫先生です。この名称はその後全国各地で用いられるようになっていきますが、大学病院内の施設名としては画期的と言って良いほど目新しいものでした。スポーツクリニックを、救急部や手術部と同列の中央診療施設とすることを決められ、その診療内容について、整形外科だけでなく、内科系を含めた幅広いものとすることを強く勧めたのも植村先生でした。その意向が診療内容に反映され、これが現在も引き継がれているわけです（外来表参照）。こうしてみると、植村先生はスポクリの名付け親であるとともに育ての親でもあったと言って過言ではありません。

設置場所

最期まで決まらなかったのが設置場所でした。当初候補地に上げられたのは、別館二階の腎センター跡地でした。医学部にはここしか空き地はなかったのです。しかし、別館には診療部門を置かないという病院の大原則が大きな隘路となったのです。結局全施設の同時開設を断念し、ともかく外来部門のみを平成三年に開設することとなりました。とはいっても、これについても候補地

の選定は困難をきわめ、最期にたどりついたのが、事務部門の会議室予定地を譲り受けることでした。こうして外来部門は現在も事務棟の中に異端者のように存在しているわけです。

このような状況ですから、フィットネス・トレーニング部門（以下フィットネス部門；この名称はスポ研の山崎教授による）の院内設置は絶望視されるに至ってしまいました。これを救ったのが一つのアイデアでした。“窮すれば通ず”とはよく言ったものです。当時医師のロッカーは別館に医局のある医師用も含めて全て院内にありましたが、これに相当する部分を、前述の別館二階の腎センター跡地に移動し、院内にこの分の面積を確保することを基本戦略としたわけです。その後は、リネン室、職員ロッカー室、用度課倉庫などを順番に押し寄せのグルグル回しをする大事業が行われました。その結果、日当たりの良い旧リネン室がフィットネス部門用地として、生み出されました。特筆すべきは、この事業に対して不満が出なかったばかりか、感謝する意見が多かったことです。まさに平成大魔術、矢部教授の真骨頂を見させていただきました。

こうした紆余曲折を経てフィットネス部門は平成五年十月にはれて開設されました。

スポーツクリニック外来担当医一覧（1998. 1～）

外 科 系

	午 前	午 後
月 曜 日	川久保誠（膝・整形一般）	増本 項（整形一般） 宇佐見則夫（足）
火 曜 日	竹田 毅（整形一般） 小川清久（肩関節）	大平貴之（脳外科）第1、3、5週 竹田 毅（変形性膝関節症）
水 曜 日	竹田 毅（整形一般） 若野紘一（脊椎）第1、3、5週 鈴木信正（脊椎）第2週 市村正一（脊椎）第4週	堀内行雄（手）
木 曜 日	竹田 毅（整形一般）	
金 曜 日	大谷俊郎（膝・整形一般）	
土 曜 日	市村正一（骨粗鬆症） 君島康一（整形一般）	

内 科 系

	午 前	午 後
月 曜 日	石田浩之（生活習慣病） 徳村光昭（小児科）	山下光雄（栄養指導）
火 曜 日	大西祥平（循環器）第1、2、4週 山崎 元（循環器）第3週	近藤国嗣（リハビリテーション）
水 曜 日	中村岩男（循環器）	徳村光昭（小児科）
木 曜 日	天川和久（呼吸器） 勝川史憲（肥満）第1、3、5週 （健康維持）第2、4週	勝川史憲（健康維持）第2、4週 運動療法教室（第二週内科 第三週精神科 第四週栄養指導）
金 曜 日	石田浩之（生活習慣病） 小熊祐子（糖尿病）	
土 曜 日	休診	

開設費用

開設に要した費用の基礎となったのは、先にも述べた一億円の指定寄付ですが、このほかにもいくつかのプロ野球球団などから多額の指定寄付をいただきました。その結果、外来部門およびフィットネス部門の開設および、これに付随した事業に要した費用すべてが、指定寄付でまかなわれたことはどうしても触れておかなければなりません。またこの場をかりて深甚の謝意を表したいと存じます。

おわりに

以上スポクリ開設前後の非公式話を忘備録の意味も込めてあれやこれやと書き記しましたが、小生もスポクリとともに満六年を過ごしたことになりました。

「少年老い易く学成り難し」と言われますが、中高年はより一層老い易いような気がします。また“学”に至っては“成ること能わず”というのが偽りのない実感であります。ただし知恵だけは目一杯に働かせて、今後もスポクリ発展のために微力ながら最善を尽くすつもりであります。それがスポクリの生みの親矢部教授の大きな期待に応える最善の道であると信じます。

足の外科班の歩み

慶應義塾大学医学部整形外科

足の外科班 井 口 傑 (49)

足の外科は足関節と足部を対象とする外科で、一九七七年（昭和五十二年）に、日本足の外科研究会として発足しました。慶應でも足の外科の会長をされた加藤哲也先生を始め、多くの諸先輩が足の外科で活躍されて来ました。

慶應で足の外科が班として生まれたのは一九八八年（昭和六十二年）の二月十五日(月)です。この日、足の外科に興味を持っていた数名の有志に呼びかけ、慶應病院の六号棟三階に集まり研究会を初めて開きました。従って、慶應の足の外科班が産声を上げたのは、矢部教授が一九八六年八月に慶應に着任された一年半後のことです。私が一九八七年七月に帰室すると、矢部教授から足の外科班を創るように命じられました。フレッシュマン以来、電気生理やバイオメカを中心に手の外科を細々と続けていた私には少々ショックでしたが、前足の外科をやってきたと思えば後足の外科も出来るだろうと考えました。私の足の外科の業績と言えば距骨骨折だけで、一

般整形外科医以上の経験は一切ありませんでした。その為、足の外科班をいきなり始めると言っても学会活動の種一つないので、それまで各自で足の外科に興味を持って活動していた宇佐見君、星野君、平石君に声をかけて集まってもらった訳です。当時、博士号の研究と臨床班は表裏一体の状態だったので、矢部教授にお願いして何の業績もない中から無理やり博士号テーマを出させて頂きました。先達どころか自分もやったことのない分野から四つも五つもいっぺんにテーマを出して頂いたのですから、研究する方も指導する方も手探りの状態で、いまだに苦労が続いています。しかし、一生かかってもやり通して、創生時の義務は果たし、恩義に報いねばと考えています。

応募による第一回の博士号テーマは橋本君で、その後宮永君、富上君、若松君、早稲田君、水谷君、谷島君と続いています。橋本君は一九九四年に足のバイオメカに関する博士号の研究を終え、更に研究を進めるためにスウェーデンのカロリンスカ研究所付属フッディングゲ病院整形外科に日瑞基金派遣研究員として留学し、帰国後の一九九六年に学位を修得しました。

臨床班と博士号の研究は別という矢部教授の趣旨から、足に興味のある人は誰でも歓迎と言うことで、臨床を中

心に学会活動を進めてきました。初期には指導する立場の人材が少なく、習うよりは慣れろと無理を重ねて学会発表、投稿を奨励しました。若い人達に早く実地に覚えもらうしか無いと覚悟し、多くの先輩からお叱りの言葉を常に頂く日々を過ごしてきました。指導が悪いと怒られ、矢部教授を始め諸先輩に頭を下げながら、本人達が潰れずに奮起してくればと願っていました。一九九三年にはスペインのマヨルカ島で開かれた国際足の外科学会に総勢六名で参加したのを皮切りに、宇佐見君を中心として海外での学会にも積極的に参加し、一日でも早く他の大学に追いつきたいと努力しました。

お陰様で班員も二桁となり、若松君、桜田君が開業、宇佐見君、星野君が医長に就任し、一九九九年には日本足の外科学会、日本靴医学会を主催し、国際足の外科学会には副会長、財務として参与できることが決まり、創立一〇年でやっと半人前になれたかなと思っています。

これまでは創設間もない弱小班だからと目をつぶって頂いた多くの点を改善しながら、次の一〇年に進もうと思っています。誰でもできる足の外科、どこでもできる足の外科医を目指し頑張っていく所存ですので、今後も諦めずに宜しくご指導ください。

肩関節班

小川 清久 (50)

慶應における肩関節の継続的研究は池田名譽教授、泉田前教授時代に始まりました。その後、研究の中心的存在であった福田宏明先生（現東海大学教授）の東海大学

転出に伴い慶應自体での研究は下火になりましたが、東海大学、三笠元彦先生（現都立大久保病院部長）の居られた藤田保健衛生大学、小川が赴任した埼玉医科大学では、研究は連綿と継続されました。昭和60年に小川が帰

局し、手の外科班の一員として慶應での診療と研究を再開し、更に昭和62年矢部裕教授の着任により、それまでの私生児的研究班から脱却し独立した研究班になりました。現在まで在籍した班員は七名です。以下、矢部教授の御指導の元に行われた研究の軌跡を紹介しますが、臨床的研究が大部分を占め、基礎的研究が少ないことが反省させられます。

1) 骨折

最も初期の研究対象は上腕骨の自家筋力骨折（投球・腕相撲・ブルワーカー骨折）で、事実の積み上げと解析により、肩内旋筋の *eccentric contraction* が原因である

ことを解明した。

上腕骨近位端骨折に対する髓内K鋼線固定法の開発と応用範囲の確立、大・小結節単独骨折に対しては長期追跡結果を踏まえた治療法の確立を目的とした一連の報告を行った。一方、肩甲骨の烏口突起、肩峰・肩甲棘、上縁の各骨折に対して、既報告に無い多数例を集積し、分類と治療法の確立を目的とした一連の報告を行った。

鎖骨においては、治療が最も難渋する外側端骨折の長期成績を分析し、中年以上においては積極的な偽関節形成も治療の選択肢の1つであるとの提言を行った。

2) 脱臼

随意性脱臼の心理的要因を解析し、精神科的治療と整形外科的治療の役割分担を報告した。反復性脱臼に関しては初回脱臼の定量・定性的因子と空気造影CT所見及び脱臼様式を検討し、これらの間に相関が無いことを一連の研究として報告した。

多方向不安定性を基盤とする反復性脱臼に対しては拡大Bankart法の開発とその長期追跡結果を、外傷性後方脱臼骨折に対しては内固定を用いない治療法の開発と追跡結果について一連の報告をおこなった。

3) 腱板

基礎的研究として、腱内空隙の発生様式とその本態、

肩峰の骨棘形成と腱板変性との相関関係、大結節の高位と腱板断裂との関係を検討した報告を行った。一方臨床的には、肩甲下筋腱単独断裂の画像診断、不全断裂に対する二層形成法の開発と長期成績の報告を行った。

4) スポーツ関連

剣道、空手の傷害統計と競技特性に基づく受傷機転の推測、スキー・野球の肩関節外傷と障害の分析と受傷機転の解明を目的とした報告を行った。Bennett肩に対しては、発生過程の障害連鎖に対する仮説を提示した。

5) その他の研究

基礎的研究としては、腱の病的石灰化機序における抑制因子(吉田)、肩関節内圧(井口)を各々学位論文として提出した。

臨床的研究としては、急性化膿性肩峰下滑液包炎・化膿性肩関節炎、血友病肩、急速軟骨破壊性肩関節炎、Charcot関節、滑液包型RA、三角筋拘縮症の骨格変形と二次的障害、ガングリオンによる肩甲上神経麻痺のMRIと筋電所見の相関、石灰性腱板炎の石灰沈着部位と外転拘縮、肩前面の破格筋など報告した。

6) 学会活動

諸研究を通して学会発表は国際・国外学会における21題を含め、146題、投稿論文は著書(分担)、2つの学位

論文、12の英文論文を含め173編を数える。これらの成果の結果、三笠先生が主催された第14回(昭和62年)肩関節研究会に続き、第26回(平成11年)肩関節学会を小川が開催する予定です。また、国際肩関節学会では、福田先生が執行部三役の一人となられ、三笠・小川もnational delegate、chairman、symposist等を務めさせてもらっております。これらの高い評価は、総ての班員の努力とこの班員が所属した関連諸病院の先輩、同僚の諸先生方の御協力と寛容の結果得られたことは疑いが有りません。誌上を借りまして御礼申し上げます。



手の外科班と矢部教授

堀内行雄(52)

手の外科は、言うまでもなく矢部教授の専門とする分野で、矢部教授は日本の手の外科のリーダーとして今までに数多くの立派な業績と偉大な足跡を残している。病院長として忙しいときも、じっくりと的確に患者を診る姿勢は変わらず、手術中の楽しそうでそのいきいきとした目の輝きは小生のような凡人には計り知れないすばらしさをもっている。

実際に慶大手の外科班の基礎を築かれたのは、矢部先生で名古屋保健衛生大学(現藤田保健衛生大学)の教授に招かれからは内西兼一郎先生(現国際医療福祉大学教授)がそのあとを継ぎ、さらに伊藤恵康先生(現慶友整形外科病院副院長)が加わって現在のような発展を見るに至っている。

昭和61年8月に矢部教授が教室に戻られたが、その時在籍していた手の外科班のメンバーは、内西先生と伊藤先生と小生でした。矢部教授が教室に戻られるにあたり、慶大手の外科班は大きく変貌すると噂された。しかし、大方の予想を裏切り、矢部教授は、慶應の臨床や研究の

自由な気風を尊重し、他の臨床班と同様に手の外科班に關しても何の強制もされなかった。これは、内西先生に對する配慮ではないかと思っていたが、小生の代になってもその方針は決して変わらなかった。臨床や研究面で行き詰まったときに矢部教授にご相談申し上げると、どんなに忙しいときでも的確なアドバイスをいただくことが出来た。その都度、上に立つ人間とはこうでなくてはならないのだという手本を見せられるような思いがした。

さて、矢部教授は任期中に多くの学会・研究会・研修会を開催された。それらのうち手の外科関係のものを列挙すると、第二回東日本手の外科研究会(昭和六十三年二月)、第三三回日本手の外科学会(平成二年五月)、第六回日本肘関節研究会(平成六年二月)、第五回日本末梢神経研究会(平成六年七月)、第三回日本手の外科学会秋期教育研修会などがあげられる。

矢部教授が就任されてから現在までの任期中に教室に戻って矢部教授と一緒に診療研究に携わったインストラクター以上の手の外科のメンバーは、内西兼一郎先生(39)、伊藤恵康先生(46)、井口傑先生(49)、彦坂一雄先生(50)、堀内行雄(52)、高山真一郎君(57)、浦部忠久君(58)、市川亨君(61)、山中一良君(61)、仲尾保志君(63)、池上博泰君(64)、井幡殿君(68)の12人

にのぼる。この間、臨床における手の外科の学会活動、文筆活動を行い、数多くの業績を残している。現在は、矢部教授の他、堀内、高山、池上の三人が手の外科の診療に携わっている。臨床面におけるこの間の新たな歩みとしては、手関節・肘関節における関節鏡の導入と手根管の鏡視下開放があげられる。また、MRIの導入も診断面の一助として大いに役立っている。これには、大学院生であった中村俊康君(67)が頑張ってくれた。

手の外科班では、研究面ではさらにいくつかのグループに分かれる。分かれていてもお互いに連携をとりながら助け合いアイデアを出し合って発展を続けている。その結果、多くの研究が実を結び、立派な業績を残してきた。ちなみに矢部教授在任中に手の外科班で学位を取得したものは、なんと28名にのぼる。末梢神経の実験的研究で高山真一郎君(57)、森岡英雄君(58)、根本哲夫君(59)、持田郷君(60)、山中一良君(61)、仲尾保志君(63)、新井健君(64)、西浦康正君(65)、渡辺理君(66)の9名が、筋の修復実験で浦部忠久君(58)、市川亨君(61)、寺田信樹君(65)の3名が、腱の実験的研究で中村俊夫君(60)、池上博泰君(64)、吉川泰弘君(65)、有野浩司君(66)の4名がそれぞれ学位を取得した。さらに、肢芽の奇形の実験的研究で飯島謙之助君(56)、

外川宗義君(59)、松村崇史君(63)の3名が、骨関節の実験的研究で山内健二君(60)、西村正智君(63)、亀山真君(64)、岩部昌平君(67)の4名が、肘の解剖学的研究で飛進進君(59)、関敦仁君(65)の2名が、さらに指尖の修復で佐藤和毅君(68)が学位を取得した。最後になったが、忘れてはならない2人にマイクロで学位を取得した佐々木孝君(52)と鈴木克侍君(59)がいる。

その他に大学院を卒業後に中村俊康君(67大学院)、井幡巖君(68大学院)、大津寄雄志君(70大学院)が手の外科のメンバーに加わって現在活躍してくれている。矢部教授は、熱心に海外留学を進めて下さり、手の外科班では、カナダのトロントに根本孝一君、ニュージーランドのオタゴ大学に高山君、スウェーデンのマルメに浦部君、寺田君、新井君(留学中)の3名、米国のワシントン大学に仲尾君と渡辺理君の2名、デンマークに関君(留学中)がそれぞれ留学の機会を得た。また、近日中に亀山君(英国)、西浦君、吉川君(ともにスウェーデン)、中村俊康君(米国)、井幡君(スウェーデン)が留学予定であり、岩部君と佐藤和毅君をはじめ多くの若手が留学を希望しているのは、喜ばしいことだ。小生も3年前3カ月間、矢部教授のご厚意でスウェーデンとフ

ランス（2週間）に滞在し、貴重な経験をすることが出来た。

現在、手の外科班は、八月を除く毎週木曜日の午後に手の外科外来を行い、その夕方の七時より、中央棟五階のカンファレンスルームで症例検討と抄読会を行っている。また、二カ月に一回遠方の先生向けに、症例検討のみをする機会をもうけている。さらに、年に一度、九月頃に慶大手の外科研究会を開催し、一般向けの臨床の演題と若手の研究に関する演題を中心に講演会を行い、最後に症例検討も行っている。

最後になりましたが、同窓の先生方にはいつも多くの貴重な症例を紹介いただき深謝致しております。御陰様で、多くの臨床例を診ることが出来、若手の教育にも多いに役立っております。これからも臨床でお困りの症例がございましたら、お気軽にご相談ください。



腫瘍班

矢部 啓夫（53）

私自身、帰室してまだ4年である。従って、それ以前のことには知らず、省略させていただく。この4年間、周囲のEtiologyに対する執拗かつ陰湿なイジメ？にめげながらも、なんとか無事？やってきた自分を褒めてやりたい。最初の2年、正直いって色々なことに悩まされた。ベッドの問題、治療の無理解と冷たい視線、それに加え、手術枠が無く（最初の1年は枠が無いことすら知らなかった）、枠なしで翌朝まで手術をしている、などの非難もあり、症例の消化が大変であった。ここ2年は、森岡をはじめスタッフの充実、周囲の理解など、それまでが嘘のようである。手術枠も週に1枠に優先1枠を得ることができた。それでもさばけず、さらに枠外、手術室2部利用と、local invasiveなゲリラ活動は続けており、ゲリラ班ともレイプ班（犯？）とも呼ばれている。さらに都立大久保病院や南部病院など、関連病院も利用させていただき、非常に感謝している。

現在、OBや大学院生を除く班員は9名であり、約1名を除き20、30代のこじんまりとよくまとまった若い班

である。大学に3名(矢部啓、森岡、山田)いるが、なかに外勤専門と噂されている者もいる。その他に関連大
学1名(伊崎)、関連病院に5名(南雲、鈴木、穴沢、
森井、加藤)が働いている。清く、正しく、美しくをモ
トとして、benignかつ没個性である矢部啓を除き、い
ずれも個性豊かな、一騎当千の強者である(その他に構
成員、準構成員、隠れ腫瘍班員を密かに募集、養成中であ
る)。大学では、病理診断部で月1回、臨床では月2回
のconferenceを行っている。症例の豊富さも1理由とは
思うが、彼等の知識吸収はすばらしく、腫瘍外科医とし
ての成長の著しさに感心すると同時に、彼等が次第に悪
性腫瘍に似てくる(malignant transformation)の
を楽しんでみている。そして関連病院での活躍もめざま
しく、多くの腫瘍症例に取り組むのみならず、satellite
の役割も果たしてくれている。

学会活動は、骨軟部腫瘍学術集会を中心に、全員が臨
床、基礎を問わず多くの学会、研究会に積極的に参加し
ており、他大学から注目と羨望の目でみられている。従っ
て、抄録しめ切り直前が最もbusyであり、必ず誰かが
学会事務局に、しめ切りに間に合わなくてもよいかと確
認している。今後、このようなことが半永久的に続く
ことが予想される。

研究は、以前からの破骨細胞、巨細胞に関し、免疫組
織学的手法を加え検討、軟骨組織内の抗腫瘍因子、免疫
組織学的手法による腫瘍のprotease、ELISA法などに
よる腫瘍産生cytokine、genome分析、さらに抑制遺伝子、
遺伝子抗体の検索など遺伝子異常を、少ないmemberで
多岐にわたり、現在最も大きな問題に取り組み、それな
りの成果を得ている。若い班員が多く、教授在職中の学
位取得者は2名(伊崎、森岡)のみだが、在職中に間に
合わなかった者のうち3名は、学位論文完成に限りなく
近づいている。

臨床面は、多くの関連病院、諸先輩に紹介して戴き、
全国でも5本の指に入る、年間数十例の原発性悪性腫瘍
の外科治療を積極的に行っている。その他にも転移性腫
瘍、良性腫瘍にも取り組んでいる。腫瘍の治療は、ここ
10年間で大きな変化がみられ、外科治療では、切除範囲
の問題から機能再建法、補助療法も各腫瘍に応じた対応
が必要である。手術すれば必ず、切除材料の切除縁評価
が必要であり、組織切り出しに立ち会っている。化学療
法では、必ず副作用のチェックと対処が必要である。従っ
て、外科のなかで最も外科的であり、かつ内科的な知識
も要求され、対応範囲が広い。仕事量が多く、こんなに
働いてよいのかと、しばしば反省しているが、魅力的な

臨床班であることは事実である。

将来について、現在行っている研究の継続は勿論、まだまだ行うべきことは多い。臨床面でも今後さらに複雑化し、仕事量の増加が予想される。現在いる班員が、限りなく悪性腫瘍に近づき、よりaggressiveになったとしても、班員数はまだ少なく、また骨軟部腫瘍について、いまだに十分に理解していない（先天的に理解できない？）整形外科医が多い。従って、多くの専門家が育つこと、それに加えて、腫瘍について周囲への啓蒙が必要であると思っており、このことに関してのみ、浸潤、転移を切に希望している。



膝関節研究班近況報告

松本秀男（57回）

慶應義塾大学整形外科学教室、膝関節研究班の起源は、岩原寅猪教授時代の今井望先生による「十字靭帯の再建に関する基礎的研究」にあると聞いている。その後、伊勢亀富士朗先生を中心に研究班としての活動が始まり、基礎的研究、臨床的研究が次々と世に出て、徐々にその名声を高め、国内ばかりでなく、国際的にも“Keio Knee Group”の名の下に活躍している。私が教室に入室した1978年頃、学会で座長に指名された伊勢亀富士朗先生や富士川恭輔先生が雄々しく解説している姿に感激したものである。

1986年8月に矢部裕教授が帰室されてから、そのご指導の下、膝関節研究班は益々発展し、伊勢亀富士朗先生、富士川恭輔先生の牽引力により、学会での指導的立場を維持してきた。

1996年4月に富士川恭輔先生が防衛医科大学校に教授としてご栄転されたからは、私が後を引き継ぐことになったが、自分ではメシが食えない兄弟をたくさん残して、父親が去ってしまった様なもので、長男が途方に

暮れているといった現状である。これを見かねた矢部裕教授のご高配により、“次男にあたる大谷俊郎先生”を帰室させて頂き、更にLeeds大学に留学中であった“三男にあたる川久保誠先生”が帰国して、その協力を得ながら、また現在スポーツクリニクに出向している“叔父にあたる竹田毅先生”のご助言を頂きながら、研究も臨床も何とか手探りで進んでいる。

現在、膝関節研究班のactive memberおよびその指導で研究を行っているmemberは、松本秀男(57)、大谷俊郎(59)、川久保誠(60)、野村栄貴(61)、野本聡(61)、大熊一成(63)、須田康文(65)、宮坂敏幸(65)、栗村誠(65)、今本雅彦(66)、徳永祐二(66)、相羽整(66)、小林一(66)、中村光一(66)、豊田敬(67)、月村泰規(67)、大平孝之(67)、井上元保(67)、笹崎義弘(68)、関口治(69)、中山新太郎(69)、安藤祐之(70)、榎本宏之(70)、竹島昌栄(70)、森山一郎(70)、剣持太郎(71)、山田貴彦(71)、君島康一(71)、内田尚哉(72)、山根誓一(72)、望月竜太(73)の総勢約30名である。小林龍生先生(60)は現在、防衛医科大学校講師として富士川恭輔教授をsupport (assist)する傍ら臨床研究、教育に活躍している。また、関連病院の医長として第一線で活躍されている水島斌雄先生、磯田功司先生、

竹田誠先生、松林経世先生、菅沼淳先生、阿部均先生からも何かあればいろいろご助言を頂いている。

臨床的研究では富士川恭輔先生の開発したLeads-Koio人工靭帯の臨床応用がすでに15年を越えた。この間、手術法などには様々な改良が行われたものの、開発当初のphilosophyは現在もほとんどそのまま生き続けている。

近年、一つのdeviceで15年間も存続するものは極めて稀であるといわざるを得ない。その他、関節授動術、関節形成術、膝蓋骨脱臼に対する手術などに関する臨床的研究でも、これまでの研究班の業績を受け継いで研究、報告を重ねている。

基礎的研究では膝関節研究班の伝統である生体工学的研究を中心に、組織学的研究、生化学的研究など、様々な分野で研究を行っている。靭帯に関する解剖学的、生体工学的研究では野村君の内側制御機構を安藤君が引き継ぎ、須田君が外側制御機構、宮坂君が十字靭帯、笹崎君が膝蓋骨制動機構、中山君が腸脛靭帯についてそれぞれ研究を行っている。また、靭帯損傷時に生じる様々な動的不安定性について栗村君、今本君がACL損傷膝を用いた研究を行っている。更に、大熊君がACLの部分断裂時の修復過程について、相羽君が外固定が靭帯の物理特性に及ぼす影響について、豊田君が斉藤聖二先生の

御指導を得て、ACL由来の細胞についての生化学的研究、関口君が再生靭帯の組織学的研究を行っている。半月板については徳永君が同種移植の研究、中村君が生体工学的研究、竹島君が修復能力についての研究を行っている。更に、月村君が恒久性膝蓋骨脱臼の研究を、井上君が人工膝関節の力学的解析を、内田君が骨端線損傷の研究、望月君が内側膝蓋大腿靭帯の研究を行っている。

これらの研究はすでに矢部裕教授のご指導により学位を授与されたものもあるし、研究がやっと始まったばかりのものもあるが、毎週月曜日に膝カンファレンスを行い、それぞれの研究について、つたないながらも活発に意見交換を行っている。また、2、3カ月に一回、防衛医科大学校との合同カンファレンスを行い、残された子供たちが父親、富士川恭輔の意見を求めに行っている。

現在、膝の学会は靭帯に関する研究がまだまだ中心ではあるが、molecular biologyなどの進歩により、今後、軟骨や滑膜などの培養や移植の研究が増えてくると予想される。わが慶大整形膝関節研究班も本年度からこれらの問題に取り組んでおり、先輩たちが切り開いてくれた学会での二歩、三歩のリードを何とか守っていきたいと考えている。また研究班も年々優秀な人材がどんどん入っており、彼らの素質をつぶさない様、力不足ながら、長

男として精一杯努力する所存である。

この原稿を書いているたった今、田辺碩先生のご訃報が入った。伊勢亀富士朗先生とともに膝関節研究班の創設された先生のご冥福を祈るとともに、今後の私たちの責任の重さを痛感しました。



小児・股関節研究班の現況

柳本 繁(59)

まず診療、手術について紹介します。外来は午前中は水曜(柳本)、土曜(吉田宏)、午後は木曜(小児股関節外来)に診療を行っています。疾患内容は成人股関節疾患が大部分を占め、先天性股関節脱臼由来の股関節症が減少傾向であり、大腿骨頭壊死症が増加傾向にあります。小児疾患は激減しています。先天性股関節脱臼の減少と関東近県すべてに小児医療センターが設立された影響が大きいのと思われます。同窓の先生方から紹介していただく患者さんの多いことも感謝しております。入院は大体15名前後の患者さんが入院しており、週に2、3件の手術を行っています。人工股関節手術がさらに増加傾向にあり、骨切り手術の患者さんは全体の2割程度と減少傾向にあります。輸血が予想される患者さんは術前に自己血貯血を行い、さらに必要な場合は術中・術後出血の回収装置を使って体内に戻す方法も併用しており、日赤血を使うことは強度の貧血やかなりの高齢の方以外はほとんどありません。術後3週程度で月ヶ瀬のリハビリセンターに移っていただくようにして入院期間ひ

いては入院待ちの期間をなるべく短縮するように努力しています。

次に研究面について紹介いたします。矢部教授の指導の基に坂巻先生のアイデア、手助けでたくさんの博士論文テーマが完成いたしました。研究技法としては画像解析、動物実験、生力学的研究に分かれます。CT・造影画像を用いた股関節・大腿骨骨髓腔の立体的な形態分析(柳本、福、石橋、吉田)では日本人の特徴をデータ解析し、正常値分布、日本人用人工股関節の基礎データを示しました。また犬用人工股関節を使った動物実験(井上、山下)では人工股関節の evaluation を実体を病理学的に明らかにしました。人工股関節システムを大腿骨エポキシ樹脂モデルに挿入し大腿骨ひずみの測定を行った実験(千葉、本間、下村)では人工股関節システムに求められる最適な長さ、断面形状を生力学的に明らかにしました。これらの人工股関節開発に直結する研究結果に基づいて矢部教授の指導の基に作成された京セラKKKS人工股関節はすでに臨床応用されて8年以上経過し、臨床データの積み重ねも増加して各種の学会で報告されています。さらに人工股関節に関する研究は継続されており、新しい研究結果や臨床データを基にKKKS人工股関節システムの改良が続いているところです。画像解析では

さらに泉田重雄前教授、石井良章現杏林大学教授以来蓄積されてきた豊富な症例を基に長期間に渡るX線像観察の結果からの股関節症進展の予後予測の最重要因子の検討(関)など歴史を誇る慶應ならではの研究もあります。また最先端の方面では泉田良一先生の指導の基にコンピューターグラフィックを用いた股関節形態の分析(逸見)により手術手技シュミレーションや画像による関節荷重面の分析まで可能になりました。

矢部教授の任期終了に伴い多くの研究は完成しひと段落したところですが、現在も継続している研究もあります。人工股関節の表面形状の研究(仁平、大山、旦下部)は動物実験を行っており、セメントレス人工股関節表面の最適なインターフェースの決定、さらに現在ゆるみの主因と考えられているオステオライシスの病態解明をめざしています。また従来から研究されてきたSLE患者の大腿骨頭壊死症をMRI像を使ったプロスペクティブスタディによる早期の進展様式の解明(矢吹)も行われています。

臨床研究では慶應で行われてきた股関節手術の長期成績の報告、人工股関節の経過報告などこれまでの股関節の諸先輩が築き上げてきた歴史を踏まえた発表を日本整形外科学会学術集会、日本股関節学会、日本人股関

節学会などを中心に報告しております。

先天性股関節脱臼の激減、高齢者の増加により股関節疾患の内容、分布は大きく変わりつつありますが、歴史のある慶應の先人の努力、業績を踏まえて長期に渡る手術例の経過報告を大事にすると共に、最先端の分子生物学、生化学、コンピューター技術、生力学的手法もとりにいて、他科、他のグループとも協力しながら、医局員がお互いに助け合い継続できる基礎的研究を行えるよう最善の努力をしたいと考えています。



新入局者紹介

平成八年度新入局者



磐田 振一郎

生年月日 昭和46年9月17日
出身大学 慶應義塾大学

早いもので入局して2年が過ぎようとしています。未だに毎日毎日新しい体験の連続で、勉強不足を痛感しています。

どういう形でも自分らしさを出す事。人間的にも偏りのない医師である事。失敗を恐れず、何事にも積極的に取りくむ事。これだけはずっと忘れずにかんばっていきましょうと思います。

まだまだ至らない点ばかりではありますが、今後とも御指導、御鞭撻の程宜しくお願い致します。





岩本 範 頭

生年月日 昭和44年4月6日

出身大学 慶應義塾大学

慶應の整形外科に入局して、早くも一年が過ぎてしまいました。私は現在、国立栃木病院で勤務しておりますが、大学病院を出てから色々と医局の良さに気付くようになりました。栃木県のような地方では周りの病院の整形が慶應系列であり、各病院の先生方で手に負えない患者を回したりすることがあり、協力態勢がしっかりしていることに関心しました。これから色々な体験をしていくと思いますが、慶應の整形外科の良い伝統を大切にしたいです、より良く働けるようにしていきたいです。



小見山 貴 継

生年月日 昭和44年10月27日

出身大学 慶應義塾大学

整形外科に入局して早くも一年以上過ぎました。社会人として、又医師として医局の諸先輩方から多くの事をご指導頂き、勉強させて頂きましたが、同時に多くの失敗もあり、ご迷惑をかけている次第であります。一日も早く、塾の伝統を築かれてきた先輩方の榮譽を汚すことのないよう、技術と知識を身につけ、はばかりながら塾に貢献できるよう、日々全力を尽す所存でありますので、これからもご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

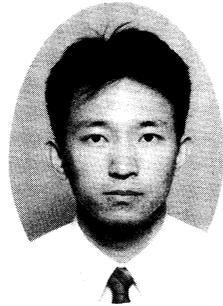


榎木 弘和

生年月日 昭和46年9月10日

出身大学 慶應義塾大学

大学でのフレマン生活を終え、現在大田原赤十字病院で研修させて頂き、早くも2ヶ月が過ぎようとしています。日常診療を通じ毎日の新しい発見と共に臨床の難しさ、医療の大変さを感じております。一日も速く諸先輩方に近づけるよう努力しますので今後とも御指導、御鞭撻の程、宜しくお願い致します。



林 俊吉

生年月日 昭和46年5月24日

出身大学 慶應義塾大学

機能の再建に関わる科ということで整形外科に入局させて頂いて頂きました。非常に広い領域にわたり勉強をしなければいけない科だということを実感し、日々勉強(する予定)の毎日です。平成9年4月からは済生会神奈川県病院に出張し、右も左もわからないまま救急の患者さんを相手に日々奮闘しています。失敗を繰り返しながらも、優しい先生方のご指導のもと、気力と根性で頑張る所存です。よろしくお願い致します。



三 上 裕 嗣

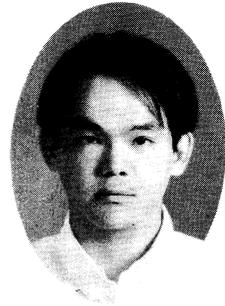
生年月日 昭和44年7月16日

出身大学 慶應義塾大学

平成八年四月に整形外科教室に入局させて頂いてから、早いものでもう一年以上の月日が経ちました。

辛いながらも楽しかったフレマン生活も終わり、平成九年七月より国立埼玉病院にて研修させて頂いております。大病院での研修中に得た知識、そして失敗も含めたさまざまな経験を糧に、一日一日を大切にして勉学に励んでいきたいと思っております。

今後とも御指導、御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



森 澤 妥

生年月日 昭和44年10月8日

出身大学 慶應義塾大学

今年の4月をもって、慶應から初めての出張で至誠会第二病院へ来ました。当地は、都内であり、なおかつ、武蔵野の面影が残るという大変恵まれた場所にあります。

こちらに来てからは、毎日毎日、体験すること（外来、手術、手技等）が新鮮で有意義に過ごしています。

慶應の時よりも若干、ゆとりがあるので、勉学にいそしみ、ゆめゆめ酒食にあけくれ、肥ってしまったなどというこのないようになりたいと思っっているこの頃です。



芦田利男

生年月日 昭和46年3月25日

出身大学 埼玉医科大学

平成八年四月に慶應義塾大学整形外科教室に入局してから一年以上経過し、現在横浜のけいゆう病院で研修させていただいております。

外来、病棟、手術と自分の無力さを痛感しておりますが、毎日充実した日々を送っています。

これからも何事にも積極的に取り組み経験をつみ、一人前の医師になるよう努力する所存ですので、今後とも宜しくお願い致します。



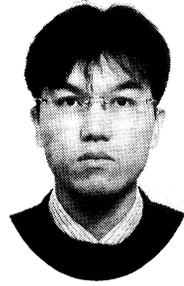
小野宏之

生年月日 昭和45年5月18日

出身大学 東京医科大学

整形外科教室に入局してはや一年が過ぎました。すばらしい先生、同僚にめぐまれ見習うことも多々あり、慶應でよかったと実感しています。現在は佐野厚生病院に勤務していますが慶應で身に付けた忍耐力、処世術をもとにがんばっております。

まだまだ半人前にも満たないと思えますがよろしくお願致します。

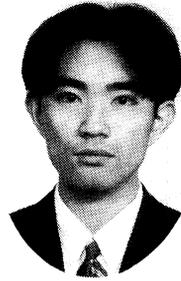


片岡 嗣 和

生年月日 昭和44年4月19日

出身大学 琉球大学

はじめまして。この度、75回として整形外科学教室に入局いたしました。出身大学は琉球大学です。大学時代は準硬式野球に所属しておりました。入局してみても偉大な諸先輩先生の多さと医療水準の高さにびっくりしていると同時に自分も頑張らなければと心に感じる毎日です。これからもいろいろとご迷惑をかけることがあると思いますがご指導ご鞭撻の程宜しくお願いいたします。



小久保 哲 郎

生年月日 昭和45年3月29日

出身大学 東京医科大学

学生時代は陸上競技部に所属し、中長距離を専門にしておりました。現在は、芳賀赤十字病院で研修中です。未熟者ですが、慶應義塾大学病院整形外科教室の一員として恥ずかしくない存在となるべく、精一杯努力したいと思います。以後、宜しくお願いいたします。



佐々木 敏 江

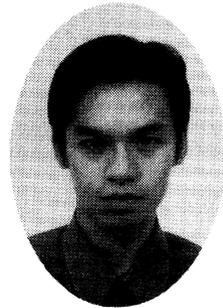
生年月日 昭和44年8月2日

出身大学 山形大学医学部

整形外科学教室に入局させて頂き、早くも一年以上が過ぎました。

現在は立川病院にて研修しております。失敗の連続ですが、諸先生方の温かく熱心な御指導の下で研修に励む毎日です。

今後とも御指導、御鞭撻の程宜しく願います。



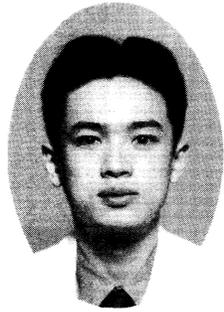
佐々木 政 幸

生年月日 昭和45年6月1日

出身大学 昭和大学

はじめまして、佐々木政幸と申します。現在、済生会宇都宮病院で浜野先生をはじめ平石先生、中村先生、堀内先生といった素晴らしい環境下で勉強させて頂いております。

今後はどちらかの病院で一緒に働かせて頂く事もあると思いますが、その時はどうぞ宜しく願います。

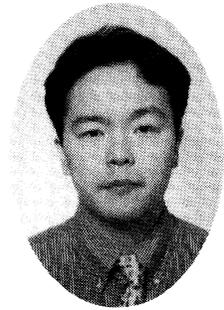


土橋 正

生年月日 昭和46年8月19日
出身大学 東海大学

整形外科学教室に入局させていただき、一年が過ぎました。伝統のある環境の中で、諸先生方の御指導をいただき、貴重な日々を過ごさせていただいております。

平成九年七月より、川崎市立病院にて研修させていただいております。まだ、知らない事ばかりですが、熱意と努力にてがんばります。今後とも御指導の程よろしくお願ひ申し上げます。



福田 健太郎

生年月日 昭和45年12月1日
出身大学 山梨医科大学

入局前から不安と期待でいっぱいでしたが、一年経って静岡日赤に出張となった今もやっぱり不安と期待でいっぱいです。それでもお世話になった方々にこの次お会いしたときには「おまえも少しは成長したな」と言われるよう何とか頑張っています。今後ともよろしくお願ひいたします。



三輪道生

生年月日 昭和38年4月25日

出身大学 防衛医科大学校

始めまして。私は平成元年に防衛医大を卒業し防衛医大整形外科入局、山田治基先生の下、主に股関節をやっております。専門研修が終了した7年目の時点で故新名教授の紹介により慶應義塾大学整形外科に入局する運びとなりました。入局時には認定医も既に取得しており、今年で卒業10年目を迎えます。多くの高名な諸先輩方の下で、臨床経験を積めることは本当に幸せなことだと思います。今後ともご指導のほど宜しくお願い申し上げます。



谷田部拓

生年月日 昭和45年9月28日

出身大学 獨協医科大学

平成八年より、当整形科学教室で研修させていただいております。平成九年五月より、社会保険埼玉中央病院に出張となりました。慶應義塾大学病院時代に研修した知識を、埼玉中央病院で日々実践しております。実際に自らが外来で診察し、病棟では主治医として治療方針をきめてゆくことが研修医二年目にして実践できるということは、当整形科学教室に所属しているからこそ可能であると思っております。今後もよりよい整形外科医を目指して日々精進するつもりです。

平成九年度新入局者

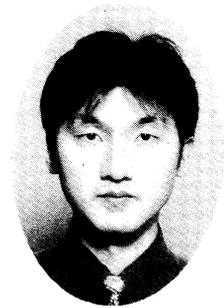


太田 憲 和

生年月日 昭和46年5月3日

出身大学 慶應義塾大学

平成9年春、慶應義塾大学を卒業、整形外科学教室に入局いたしました太田憲和と申します。在学時、ポリクリ最中に直感的に入局を決意、その後はろくに説明会にも参加せず飛び込んで参りましたが、入局後数ヶ月を経た今、かつてないほどの向学心に燃えております。いまだ医師と名乗るのも恥ずかしい若輩者ではありますが、一歩々々努力していくつもりで御座いますので、諸先輩方の御指導御鞭撻のほど宜しくお願いいたします。

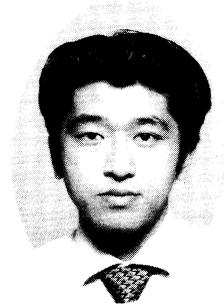


加藤 匡 裕

生年月日 昭和45年7月15日

出身大学 慶應義塾大学

このたび慶應義塾大学整形外科学教室に入局することになりました加藤匡裕です。私が本教室の入局を希望した理由は、中学三年生の時左前腕部骨折のため浦和市立病院に入院、手術したのですが、そのときの先生方がたいへん格好良かったのです（執刀医の先生のお名前は残念ながら覚えていませんが、橋本先生と大谷先生がいらっしやいました）。これからがんばりますので、今後とも御指導よろしくお願いいたします。



船山 敦

生年月日 昭和47年10月3日

出身大学 慶應義塾大学

今年度から当教室の同窓会の一員になることができ、たいへん光栄であるとともに、これからは当教室の名を汚すことのないよう、さらには教室の発展の一助となるよう切磋琢磨する所存です。学生時代は、バスケットボール部に所属し、スポーツに明け暮れる毎日でしたが、今後はその時に培った情熱と根性、そして感謝の気持ちを、医師としてまた一人の整形外科医としての生活の中で役立てていきたいと思えます。よろしくお願い致します。



細金 直文

生年月日 昭和47年5月13日

出身大学 慶應義塾大学

この度は慶應大学整形外科に入局させて頂き誠に有難うございます。

思えば予科2の時ACL損傷で御世話になって以来私の医者に対するイメージを代表するものが整形外科医でありました。加えて医者になったからには知識だけでなく技術も身につけたいと考え入局させて頂きました。

本当に何もわからず小さなことにも感動させられる毎日ですがこれからどうか宜しくお願い致します。



前野 晋 一

生年月日 昭和47年7月2日

出身大学 慶應義塾大学

古くは小学生の頃の尺骨骨幹部骨折に始まり、昨年松本先生に膝を手術して頂くまで、自分と、スポーツと整形外科とは縁が切れませんでした。ようやく今年整形外科に入局させて頂いて、自分が味わせて頂いたスポーツ復帰の時の喜びを、人に与えられる立場となりました。まだまだ右も左も分かりませんが、気合は入っています。何卒ご指導、ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。



渡部 逸 央

生年月日 昭和47年1月25日

出身大学 慶應義塾大学

初めまして、慶應義塾大学医学部出身の渡部逸央と申します。入局してからは、あらゆる事が目新しく、新鮮に感じられる一方で、諸業務で失敗があり、先輩方に迷惑をかけています。しかし、これからは、少しずつ勉強して少しでも先輩の方々の域に近付きたいと思えます。御指導宜しくお願いいたします。



渡辺 航太

生年月日 昭和47年5月11日

出身大学 慶應義塾大学

慶應義塾大学整形外科学教室の一員に加えていただき、大変に光栄に思っております。入局前は、色々と不安がありました。現在では、素晴らしい先輩先生方、かけがえない同輩に囲まれ、大変有意義な毎日を過ごさせていただいております。これからは、一医局員として、その名に恥じない様、奮闘努力していきたいと思っております。今後ともどうぞよろしく願います。



池澤 裕子

生年月日 昭和46年3月18日

出身大学 東海大学

私は大学卒業後二年間、国立東京第二病院で内科を中心とした総合臨床方式で研修を行いました。そこでの整形外科研修は短期間でしたが、諸先生方の御熱心な指導を受け大変に興味を覚え、今春慶應義塾大学整形外科学教室に入局させて頂くことにしました。この一年は人間として、女性として、医者として多くの事を吸収し、良き整形外科医を目指し先輩先生の後に続きたいと思っております。どうぞ御指導御鞭撻をお願い申し上げます。



井上 薫

生年月日 昭和47年9月22日

出身大学 北里大学

「今年はフレマンが少ないから大変だね。」と4月当初に言われ不安を抱きながらのスタートとなりましたが、幸い同期の方々に恵まれ毎日が本当にあっという間に過ぎてゆくことを嬉しく思います。働き出してまだ数ヶ月ですが横のつながりの大切さをしみじみ実感しております。同期の方々には毎日会っているのに新鮮な刺激を感じます。自分も彼らにとって刺激となる存在で在りたいと思います。

至らぬ点多々あることと思いますがどうぞ宜しくお願い申し上げます。



奥 口 さゆり

生年月日 昭和47年7月25日

出身大学 福島県立医科大学

この度、伝統ある慶應義塾大学整形外科教室に入局させて頂けた事を、心より嬉しく思っております。

今自分に出来ることといえば、笑顔で患者さんにあいさつすることぐらいではありますが、同僚・パラメディカルの方々・患者さんから信頼される医師、そして、一整形外科医として自分なりのポリシーを持つ医師を目指して、常に前向きに努力する所存です。

今後とも御指導、御鞭撻の程、宜しくお願い致します。



山口 健治

生年月日 昭和45年1月18日

出身大学 宮崎医科大学

入局して以来、一ヶ月がたちました。病院での仕事のみならず社会人としての生活に慣れず苦労しております。私が当医局に入局したのは、大きな医局であるために多くの先輩方より多くの事を学べると思ったからです。がんばりますので、御指導の程、宜しくお願いします。

秘書紹介

医局秘書

白土若菜 工藤朱美 松島千晶

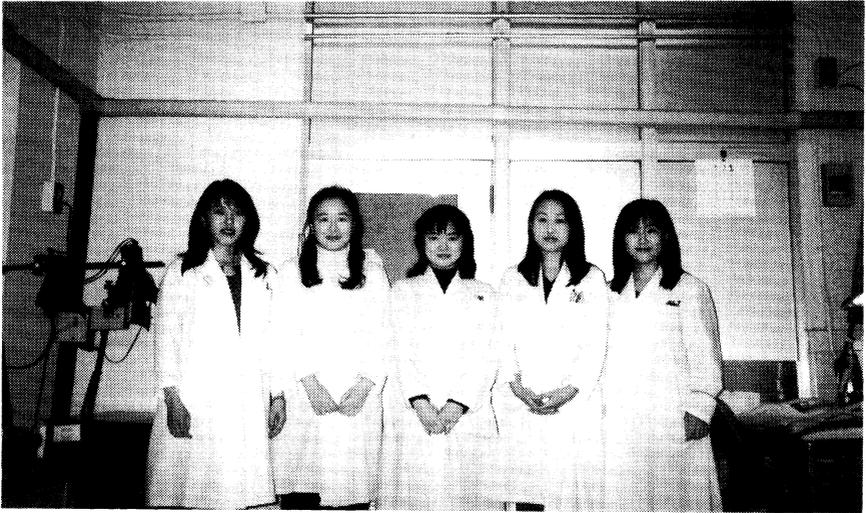
現在、医局秘書は私達3人です。色々致らない事も多く、先生方にご迷惑をおかけすることもありますが、3人でフォローし合いながら頑張っていきたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

教授秘書

宮城直実

平成六年四月に就職して以来四年間矢部教授の秘書をさせて頂きました。

とても忙しい毎日でしたが充実した日々を送ることができました。お茶くみ、使い走り等は勿論、電話や来客の対応、書類整理、スケジュールの調整（病院長をなさっていた時は分刻みでした）、教室業績集を毎年製本し、



右より 白土若菜 工藤朱美 松島千晶
宮城直実 城ひろみ

先生が研究会を主催なされば事務局の仕事をし、他科教
授選考委員会等の委員長をなさればその議事録を作成し、
原稿書きをなさればワープロで清書し（先生は医学部新
聞部ご出身で原稿書きは御手の物です）、学会や講演会
があれば抄録をタイプし、スライドを作ったり……。

教授室での先生はいつも時間に追われていましたが面
白い事をおっしゃったりしてほのぼのとした優しい雰
囲気でした。先生、とても楽しい四年間でした。どうもあ
りがございました。

日本パラプレジア医学会 日本脊椎外科学会秘書

城 ひろみ

先生方が気持ちよく患者さんやその家族に向かえるお
手伝いをしたく、こちらに努めて二年になります。私な
りにお役に立てていけば、嬉しいのです。これからも、
ご指導よろしく願います。



ふるさと98教室人事一覽

●教室関連人事（平成7年11月～平成10年1月）

(1) 院長・所長

平成8年4月 大谷 清君 国立療養所村山病院院
長

4月 芝田 仁君 北里研究所バイオイア
トリックセンター長

9年4月 石名田洋一君 国立埼玉病院院長

5月 田崎 憲一君 荻窪病院副院長

6月 彦坂 一雄君 東京専売病院副院長

(2) 副院長

平成8年4月 柴崎 啓一君 国立療養所村山病院副
院長

10年1月 伊佐治 純君 田無病院整形外科医長

1月 松村 崇史君 大田原赤十字病院整形
外科部長

1月 上石 聡君 佐野厚生病院整形外科
部長

(3) 部長・医長

平成8年1月 大熊 哲夫君 南多摩病院整形外科医
長

1月 飛弾 進君 練馬総合病院整形外科
医長

1月 星野 達君 聖母病院整形外科医長

4月 坂巻 豊教君 国立小児病院整形外科
医長

4月 阿部 均君 北里研究所病院整形外
科部長

7月 山岸 正明君 公務員共済立川病院整
形外科部長

9年7月 栗村 誠君 江戸川病院整形外科医
長

8月 渡辺 理君 浜松赤十字病院整形外
科部長

11月 加藤 哲也君 東京国立第2病院整形
外科医長

1月 伊佐治 純君 田無病院整形外科医長

1月 松村 崇史君 大田原赤十字病院整形
外科部長

1月 上石 聡君 佐野厚生病院整形外科
部長

平成8年4月 富士川恭輔君 防衛医科大学校整形外
科教授

9年10月 中川 研二君 藤田保健衛生大学整形
外科教授（定員外）

平成7年12月 坂巻 豊教君 慶應義塾大学整形外科

助教授(赴任)

8年1月 小柳 貴裕君 東京歯科大学市川病院

整形外科助教授

7月 齊藤 聖二君 東京女子医科大学膠原

病リウマチ痛風センター

助教授

9年4月 竹田 毅君 慶應義塾大学スポーツ

クリニック助教授

4月 根本 孝一君 防衛医科大学校整形外

科助教授

6月 安藤 謙一君 藤田保健衛生大学坂文

種報徳会病院整形外科

助教授

10月 中井 定明君 藤田保健衛生大学整形

外科助教授

(6) 講師

平成7年12月 西浦 康正君 筑波大学整形外科講師

8年4月 竹田 毅君 慶應義塾大学スポーツ

クリニック講師

4月 増本 項君 日本女子体育大学講師

5月 中村 俊康君 藤田保健衛生大学坂文

種報徳会病院講師

10月 戸山 芳昭君 慶應義塾大学整形外科

講師

10月 松本 秀男君 慶應義塾大学整形外科

講師

9年4月 小林 龍生君 防衛医科大学校整形外

科講師

4月 桃原 茂樹君 東京女子医大膠原病リ

ウマチ痛風センター講

師

6月 鈴木 克侍君 藤田保健衛生大学整形

外科講師

10月 伊崎 寿之君 防衛医科大学校整形外

科講師(指定)

(7) 教室幹事

平成7年10月より 松本 秀男君

平成9年4月より 高山真一郎君

●留学

平成8年2月帰国 川久保 誠君

イギリス・リーズ大学(平成6年1月より)

平成8年6月帰国 寺田 信樹君

スウェーデン・ルンド大学(平成7年4月より)

平成8年9月帰国 市村 正二君

アメリカ・ワシントン大学(平成6年7月より)

平成8年9月帰国 桃原 茂樹君

アメリカ・ラッシュユ大学(平成6年9月より)

平成9年1月帰国 千葉 一裕君

アメリカ・ラッシュユ大学(平成6年4月より)

平成8年10月より 須田 康文君

イギリス・リーズ大学

平成9年1月より6月まで 仁平高太郎君

フランス・パリ大学

平成9年4月より 新井 健君

スウェーデン・ルンド大学

平成9年6月より 関 敦仁君

デンマーク・オーフス大学

平成9年7月より 岩本 潤君

アメリカ・ウイントロップ大学

平成8年3月 村上 寶久君 国立小児病院定年退職

平成8年3月 富士川恭輔君 防衛医科大学校整形外科教授

平成8年3月 福 秀二郎君 わたなべ整形外科副院長

平成8年3月 岩本 靖彦君 湖南病院整形外科部長

平成8年4月 井上 邦夫君 開業

平成8年4月 今井 仁君 産婦人科学教室へ転科

平成8年6月 齊藤 聖二君 東京女子医大膠原病リウマチ痛風センター助

平成8年6月 堀江 康夫君 開業

平成8年12月 桜田 卓也君 開業

平成9年4月 根本 孝一君 防衛医科大学校整形外科助教授

平成9年5月 西脇 祐二君 公衆衛生学教室へ転科

平成9年5月 六馬 信之君

平成9年6月 松本 隆志君 開業

平成9年6月 徳永 祐二君 開業

平成9年6月 西 幸美君 開業

平成9年6月 安藤 謙一君 藤田保健衛生大学坂文

平成9年6月 種報徳会病院整形外科

●退室・開業

平成7年12月 森岡 英雄君 開業

平成7年12月 田辺 巖君 開業

平成8年2月 西村 正智君 開業

平成8年2月 小野陽二郎君 開業

助教授

平成9年7月 飯島謹之助君

開業

平成9年10月 中井 定明君

藤田保健衛生大学整形

外科助教授

平成10年1月 三谷 哲史君

室戸病院院長

平成10年1月 鶴飼 茂君

開業

平成10年1月 根本 哲夫君

平和病院整形外科医長

平成10年1月 長山 信幸君

大河内病院整形外科医

長

平成10年1月 堂脇 慎一君

開業

敬称略

●慶弔のお知らせ

○結婚

平成8年3月 長田 夏哉君

3月 藤田 貴也君

4月 小川 祐人君

4月 大津寄雄志君

4月 山下 裕君

4月 名倉 武雄君

6月 田村 睦弘君

6月 吉田 英彰君

6月 早稻田明生君

9月 鈴木 禎寿君

9月 谷島 浩君

10月 奥島雄一郎君

平成9年1月 日下部 浩君

3月 金子 博徳君

4月 照屋 徹君

5月 谷野 善彦君

6月 小見山貴継君

9月 高尾 努君

10月 本間 隆之君

10月 谷戸 祥之君

10月 森山 一郎君

10月 土橋 正君

11月 山根 誓二君

11月 岡崎 真人君

平成10年2月 細金 直文君

○逝去

平成7年11月 若野 紘一君

11月 若野 紘一君

12月 宮本 銈造君

12月 丸山 徹雄君

御母堂

御尊父

御本人

御尊父

『同窓会活動に対するアンケート』の結果報告

慶大整形同窓会係 柳本 繁

平成九年秋に皆さまにお願ひしましたアンケート結果
について報告いたします。

(平成九年十二月三十一日現在)

有効回答数：149通(送付数630通)……………24%
勤務形態——開業……………38通
病院勤務……………61通
大学病院勤務……………29通
記載なし(不明)……………21通
年 代——20歳代：12通、30歳代：26通
40歳代：32通、50歳代：18通
60歳以上：52通、記載なし(不明)：8通
I、同窓会総会・懇親会への参加について

(回答数：148通)
よく参加する(38)……………26%
ときどき参加する(43)……………29%
ほとんど参加しない(67)……………45%
II-① 同窓会総会・懇親会の日程について
(回答数：137通)
このままでよい(125)……………91%

変更を望む(12)……………9%

II-② 同窓会総会・懇親会の内容について

(回答数：124通)

このままでよい(111)……………90%

変更を望む(13)……………10%

III、教室の情報を盛り込んだ同窓会ニュースを

(回答数：139通)

希望しない(57)……………41%

費用がかかるなら希望しない(29)……………21%

費用がかかっても希望する(53)……………38%

IV、現在の同窓会活動に対して (回答数：139通)

満足(45)……………32%

満足とは言えないが変更も希望しない(75)……………54%

不満(18)……………14%

貴重なご意見をいただきましたありがとうございます。以上の結果や小意見も踏まえて、同窓会委員会と同窓会幹事会などで討議を重ねました。同窓会総会・懇親会は従来通り十一月第二週に教室公開セミナーのあとに同様の形式で行うことにいたしました。教室の情報を盛り込んだ同窓会ニュースは開業の先生を中心に費用がかかっても希望するとの意見がかなりあることより、希

望なざる先生方には費用も少しいただいて教室人事を中心にトライアル形式で行ってみようということになりました。詳細は後日またご連絡いたします。



編集後記

たくさんの御投稿ありがとうございます。久しぶりに原稿を催促される側から、催促する側の仕事をさせていただき、その苦勞を思い出しました。厚顔無恥といわれる私でさえ、目上の方に原稿を催促するタイミングに結構気を使いました。但し、私気が使ったつもりでも「全然使っていないじゃないか」と思われる方も多いと思います。この場を借りてお詫び申し上げます。校正は基本的にはこちらでやらせて頂きました。簡単なものは良いのですが、大先輩方が書かれた原稿は、漢字を知らないワープロ世代の私にとっては、まるで漢文か古文のようで、国語辞典の離せない毎日が続きました。また、昔の関連病院の名前、今は使われなくなったテクニカルタームなどについては諸先輩のご指導を仰ぎました。校正ミスも多々あるかと思いますが、精一杯やったつもりでおりますのでお許しください。

H. M.

